

平成26年度指定

スーパーグローバルハイスクール研究報告書

第 4 年 次



平成30年3月

徳島県立城東高等学校

目 次

(グラビア) 平成29年度SGHの取組

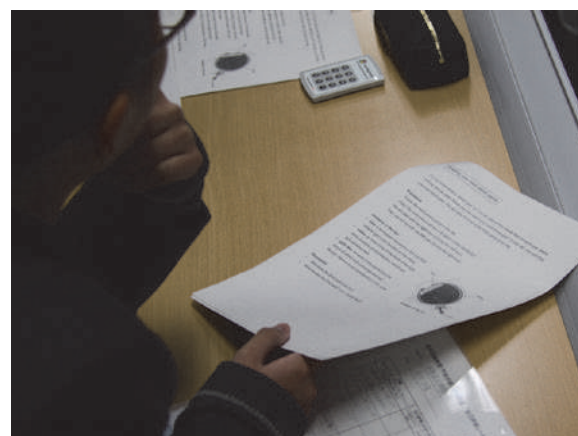
I	研究開発完了報告書（別紙様式3）	1
II	研究開発の実施	
1	スーパーグローバルプログラムにおける取組	
1. 1	スーパーグローバル講座 <i>academic</i>	9
1. 2	スーパーグローバル講座 <i>professional</i>	16
1. 3	グローバル育成メソッドⅠ <i>in school</i>	23
1. 3. 1)	学校設定科目	
1. 3. 2)	講演等	
1. 3. 3)	英語運用能力の育成	
1. 4	グローバル育成メソッドⅡ <i>home</i>	46
1. 5	グローバル育成メソッドⅢ <i>abroad</i>	51
2	課題研究の取組	
2. 1	課題研究の実践	59
2. 2	成果発表	62
3	その他の取組	
3. 1	各種大会・参加記録	66
3. 2	課題研究集録	72
3. 2. 1)	課題研究	
3. 2. 2)	English Research Paper	
III	成果, 評価	
1	スーパーグローバルプログラムの成果	92
2	課題研究の成果	96
IV	資料	
添付資料①	目標設定シート(別紙様式7)	98
添付資料②	生徒アンケート	101
添付資料③	職員アンケート	105
添付資料④	教育課程表	107
添付資料⑤	運営指導委員会における指導, 助言等	108
添付資料⑥	生徒の変容・ルーブリック評価基準	110

【スーパーグローバル講座 academic】

大阪大学



徳島大学



【スーパーグローバル講座 professional】

大塚製薬



日亜化学工業



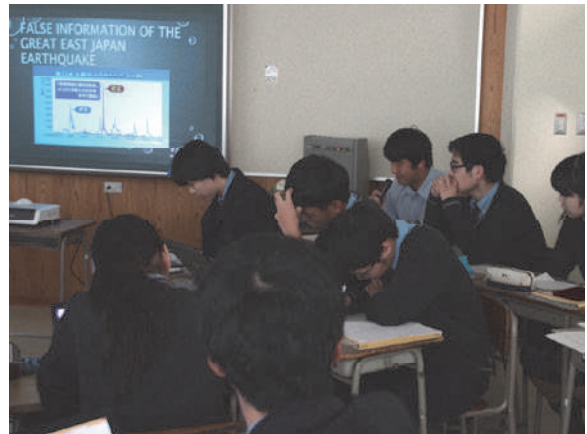
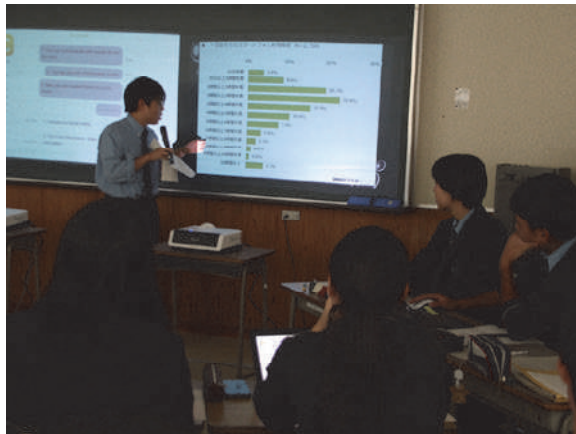
企業研修



【グローバルリーダー育成メソッド I in school】
講演・ワークショップ「不寛容の時代の民主主義」



グローバルリーダー論 I



クエスト活動



【グローバル育成メソッドⅡ home】

FAO・文部科学省日本ユネスコ委員会訪問



講演・座談会「外務省『高校講座』」



EUがあなたの学校にやってくる



【グローバル育成メソッドⅢ abroad】

インドネシア研修



【成果発表】

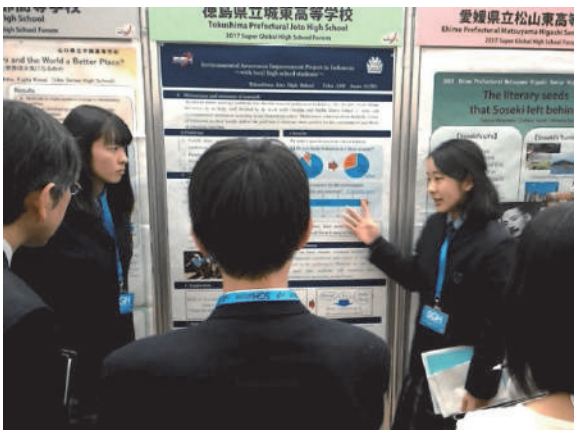
S G H 課題研究発表会



S GH発表会



S GH全国高校生フォーラム



S GH甲子園 2018





Environmental Awareness Improvement Project in Indonesia ~with local high school students~



Tokushima Joto High School Yuka ABE Anna GOTO

1. Motivations and summary of research

In recent years, garbage problems has become a social problem in Indonesia. We thought about things we could do to help, and decided to do work with Otsuka, and Stella Maris School to carry out environmental awareness activities in an elementary school. Elementary school students hold the future of Indonesia in their hands, and so the goal was to increase their concern for the environment and think of solutions together.

2.Problems

- ① People don't understand the environmental conditions in Indonesia
- ② People don't have the habit of cleaning and throwing away garbage in the garbage can.
- ③ People are not interested in the environment.

3. Activities

1. Explanation in Power Point

- make children notice their situation
- grow children's concern for the environment

2.Garbage games

- (1) Make a group of 5 people.
- (2) Collect garbage(The time limit is 8 minutes)
- (3) Give a prize to the group with the most garbage collected

→make children establish the habit of throwing away garbage in the garbage can.

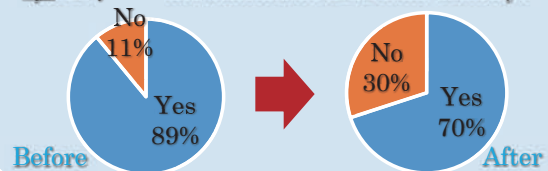
→grow children's concern for the environment.



4.Results

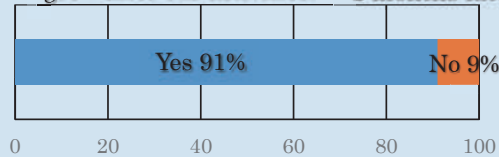
We sent a questionnaire to schoolchildren

Q1.Do you think Indonesia is a clean country?



Q2.Did your concern for the environment

grow after our activities? 2 months later



Teacher

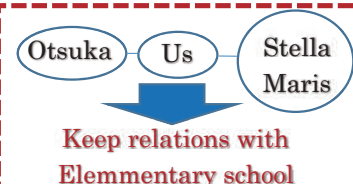
The children have come to notice fallen garbage and throw it away in the garbage can.

5. Consideration

Based on these results, students noticed their environmental conditions and began to take an interest in the environment. However, we can't say for sure that students will maintain this environmental awareness in the future.

6. Suggestions

Hold an **Environmental Day**
Once a month
Clean the school on the day



7. Reference

MURASE,N.,T.MURAYAMA and S.NISHIKIZAWA(2015)Analysis on Relationship between Residents' Awareness and waste Bank Activities in Indonesia-Case of Balikpapan City *Environmental Information Science vol.29* 267 ~272

I 研究開発完了報告書

(別紙様式3)

平成30年3月30日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 徳島県徳島市万代町1丁目1番地
管理機関名 徳島県教育委員会
代表者名 教育長 美馬 持仁 印

平成29年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成29年4月3日（契約締結日）～平成30年3月30日

2 指定校名

学校名 徳島県立城東高等学校

学校長名 佐々木 尊

3 研究開発名

「四国徳島発・人類の健康と環境に貢献するグローバルリーダーの在り方について」

4 研究開発概要

グローバルリーダーに求められる資質を探究していくにあたり、「四国徳島発・グローバル企業の創造戦略について」を研究テーマに、県内に拠点・本社が置かれているグローバル企業（大塚製薬、日亜化学工業）や大学（大阪大学、徳島大学）と連携し、5つのスーパーグローバルプログラム（以下、SGプログラム）を実施する。

自分たちが考える「グローバル戦略」「グローバルブランド」「CSR活動」やグローバル化が世界に与えた社会的・経済的・政治的影響から予測する今後の世界の潮流等について「課題研究」を希望別にグループに分かれて行う。人類の健康増進と環境保全の観点からも考察、発信していくため、大学・留学生等からサポートを受けて研究に取り組む。本校が主催するSGH発表会のほか、県内外での発表の場において発信することをおして、持続可能な社会の発展に貢献するグローバルリーダーに必要な態度や素養を習得する。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（H29年4月3日～H30年3月30日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
②							○				○	
③	○			○				○	○	○		○
④					○					○		

(2) 実績の説明

※全校生徒（957名）を対象にSGH事業を実施

① 指定校及び連携先大学・企業等との事業計画推進に係る協議

- ・指定3年目の課題，H29（4年目）事業計画を踏まえた指定校への指導助言（4/3～）
- ・徳島大学（連携先大学）との協議（5/16）
- ・大阪大学（連携先大学）との協議〔大阪府豊中市〕（5/15）
- ・大塚製薬（連携先企業）との協議（5/17）
- ・日亜化学工業（連携先企業）との協議（6/13）
- ・運営指導委員会での指導助言を踏まえた指定校との協議（10/20～，2/14～）

② 運営指導委員会

ア 第1回運営指導委員会（10/20）

<議題>・・・授業見学，進捗状況説明，質疑応答

～運営指導委員からの主なコメント～

- ・「グローバルリーダーになりたい」と思うことが必要。各生徒がイメージを持ちやすいように，「城東高校で育てようとする人物像」をはっきりさせる必要がある。
- ・グローバルリーダーになるためには，日本でもリーダーである必要がある。そのためには人間力を高めることが必要。文化や趣味など，いろんなことにチャレンジしてほしい。

イ 第2回運営指導委員会（2/14）

<議題>・・・生徒による課題研究発表，年間事業報告，質疑応答

～運営指導委員からの主なコメント～

- ・発表態度が堂々としていて感心した。私のときと隔世の感があり，課題設定のユニークさは大きな成果だと思う。中には論理展開に飛躍が見られるものもあるが，内容はよく練られており，自ら課題を見つけて解決していく力を養おうという国の動きを感じる。
- ・1，2年の生徒全員が参加することはとてもよいと思う。一生懸命考えたことを問題提議し皆で共有できる有意義な取組である。

③ 指定校を支援する取組 ※ [] は対象

- ・国際公共政策学会（大阪にて開催）への生徒引率教員1人分の旅費経費負担（4/17）
- ・スーパーグローバルハイスクール発表会での指導助言（7/22）
[生徒102名，教員約30名，一般・保護者約50名]
- ・SGH全国高校生フォーラム参加についての指導助言（7月）[SGH担当教員]
- ・英語4技能を育成する授業実践に係る指導助言（11/15）[英語科教員8名]
- ・徳島県教育委員による学事視察（11/2）
県教育長，県教育委員による学事視察が行われ，SGH事業の説明の後課題研究の授業を公開した。事業の目的や成果について県教育委員に理解を深めていただける機会となった。
- ・徳島県知事による県立高校キャリア教育講座（12/19）（城東高等学校1，2年生が参加）
県知事の講演の後，県知事と生徒代表がグローバル化などをテーマにパネルディスカッションを行った。グローバルリーダーとして高い意識をもった生徒の姿を県知事に見ていただけた。
- ・あわ（OUR）教育発表会（12/26）[一般・教職員約40名]
1学年の生徒1名が，自分が受けた研修や体験活動について発表した。発表を聞いた小・中学校の教員にも情報共有ができた。
- ・研究開発実施計画書のまとめ方等に係る指導助言（1/15～）[SGH担当教員]
- ・研究開発完了報告書のまとめ方等に係る指導助言（3/2～）[SGH担当教員]

④ 文部科学省連絡協議会（6月）管理機関等連絡会（1月）参加後

- ・指定5年目以降の取組の方向性について協議及び指導助言（6/16）
[SGH担当教員]
- ・管理機関等連絡協議会内容伝達及び5年目の取組について指導助言（1/25）
[学校長及びSGH担当教員]

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間 (H29年4月3日 ~ H30年3月30日)											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
A-I	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○
A-II			○	○		○	○	○	○			
A-III	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
A-IV					○			○		○	○	
A-V					○							○
B	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

(2) 実績の説明

1. SGプログラム ※ () 内は参加者

本校では、スーパーグローバルハイスクール構想を進めて行くにあたり、実施する取組を5つの系統で進め、課題研究を実施し、その成果を発信した。

1. 1 スーパーグローバル講座 *academic*

<大阪大学大学院国際公共政策研究科・徳島大学との連携による講演・講義・ワークショップ・課題研究のサポートを中心とした、大学の講師陣による講座の開講>

- a) 講演/座談会「グローバル化する社会で求められる力とは？」(1学年321名)
大阪大学大学院国際公共政策研究科教授 松繁 寿和 氏
- b) 講演/座談会「インドネシアー見果てぬ夢を追うー」(1学年321名)
大阪大学大学院国際公共政策研究科教授 松野 明久 氏
- c) 大阪大学主催宿泊型研修「Future Global Leaders Camp」参加(1学年希望者1名)
グループワークによる研究プレゼンテーション等
- d) 大阪大学国際公共政策学科訪問(2学年希望者20名)
大阪大学の授業やセミナー、留学生との交流を体験
- e) 徳島大学医学部体験学習(2学年希望者25名)
講演、英語での体験実習、本校出身の医学部生の話聞くなど

1. 2 スーパーグローバル講座 *professional*

<県内に本社を置くグローバル企業、大塚製薬・日亜化学工業との連携を基盤として実施される講演、調査研究、インターンシップなどの講座の開講>

- a) 講演「大塚製薬のグローバル化～世界の人々の健康に貢献するために～」(1学年321名)
大塚製薬株式会社東京本社総務部長 浜本 光生 氏
- b) 講演「大塚の海外におけるCSR活動について」(1学年321名)
大塚ホールディングス株式会社総務部課長 梅津 芽生 氏
- c) 講演「海外勤務経験者に聞く」(1学年321名)
日亜化学工業株式会社 黒田 浩章 氏, 山本 敦司 氏
- d) 企業研修・国際機関訪問(1学年321名)
9コース別に県外17の企業・国際機関を訪問, CSR活動について学ぶ

1. 3 グローバルリーダー育成メソッド I *in school*

<①学校設定科目及び教育課程の特例を適用した授業により、将来グローバル人材として必要となる資質・能力を育成する取組>

<②国際課題を探究する態度、研究を進める上で不可欠な英語運用能力を育成の取組>

1. 3. 1) 学校設定科目

- a) 「21世紀を生きる(公民科)」(1学年人文社会コース26名)
レポートやディスカッションを通して世界の課題や身近なグローバル化について知る。特定の国を自ら選定し日本が見本とする先進的な施策を研究する。グローバル課題について自らテーマを設定し、ポスターを作成するなど。
- b) 「Current English(外国語科)」(1学年人文社会コース26名)
コミュニケーションのとりかたを学ぶ、日本(徳島)を英語で紹介する、世界の環境問題

や健康問題など現代世界の抱える諸問題について知り、自分の意見をまとめるなど。

- c) 「Global Health (保健体育科)」 (1 学年321名)
環境と健康, 食の安全, 保健衛生活動についてグローバルな視点をもって学習活動に取り組む。関連機関を訪問しての学習や, 年間2回の外部講師を招いての特別講座等を通じて, 世界の人々の健康と環境に関する諸課題の理解を深めるなど。
- d) 「クエスト (Quest: 総合的な学習の時間)」 (全学年957名)
 - 1 学年: 企業訪問・職業ガイダンス等を通じた自己理解及びSG講座
 - 2 学年: 課題研究の実践 (後述)
 - 3 学年: テーマ研究・ディスカッション・ディベート及び小論文演習
- e) 「グローバルリーダー論Ⅰ」 (2 学年人文社会コース37名)
英語でのディスカッション, プレゼンテーション, ミニディベート, 英語の論文の書き方と効果的なプレゼンテーションの仕方についての講義など
- f) 「グローバルリーダー論Ⅱ」 (3 学年人文社会コース40名)
課題研究を英語でプレゼンテーション, 英語論文作成 (課題研究で作成した日本語論文をALTのサポートでEnglish Research Paperに再構成) など

1. 3. 2) 講演等

- a) 第1回グローバルヘルス講座「アジアの人々の飲み水と健康」 (1 学年321名)
徳島文理大学薬学部教授 姫野 誠一郎 氏
第2回グローバルヘルス講座「地域の所得格差は健康を損なうか」 (1 学年321名)
徳島大学総合科学部教授 豊田 哲也 氏
- b) 職業ガイダンス (1 学年321名)
興味ごとにグループに分かれ, 第一線で働く講師に話を聞く
- c) 模擬授業「英語コミュニケーション論」 (1・2 学年人文社会コース63名)
津田塾大学教授 青沼 智 氏
- d) 講義「青年海外協力隊」 (1 学年人文社会コース26名)
城東高校司書 奈木 利恵 氏
- e) 講義・ポスターセッション「不寛容時代の民主主義」 (1 学年人文社会コース26名)
大阪大学大学院国際公共政策研究科准教授 中内 政貴 氏
- f) 講義「英語でのプレゼンテーション」 (2 学年人文社会コース37名)
徳島大学大学院総合科学研究部教授 田久保 浩 氏
- g) セミナー「海外留学・日本語教師」 (1・2 学年外語部員・希望者15名)
徳島大学国際センター特任助教 福岡 佑子 氏

1. 3. 3) 英語運用能力の育成

- a) TOEIC全員受検 (1・2 学年645名) 1年: TOEIC Bridge IP, 2年: TOEIC IP
- b) CAN-DOリストに基づいたパフォーマンステストの実施
- c) Essay Contestの実施
- d) 英検などの受験対策指導 等

1. 4 グローバルリーダー育成メソッドⅡ *home*

<中央省庁や国内の国際機関を訪問しての調査・研究>

- a) FAO (国連食糧農業機関)・文部科学省日本ユネスコ委員会訪問 (1・2 学年 8名)
- b) 講演・座談会 「外務省『高校講座』」 (1 学年321名)
外務省国際法局国際法課課長補佐 柏口 温子 氏
- c) 講演・座談会「EUがあなたの学校にやってくる」 (1・2 学年645名)
駐日ポーランド共和国大使館 ウルシュラ・オスミツカ 氏

1. 5 グローバルリーダー育成メソッドⅢ *abroad*

<フランス研修 (姉妹校交流)・インドネシア研修による海外での調査・研究>

- a) サン・ジョセフ校とのビデオレター交流 (1・2 学年48名)
- b) インドネシア研修 (2 学年14名)
大塚製薬海外拠点・工場等での調査・研究, インターンシップ等
日本大使館 (ASEAN日本政府代表部) を訪問しての調査・研究
小学校での環境啓発活動及び現地高校生との共同研究

2 課題研究の実施

2. 1 課題研究の実践 (2学年324名)

- a) マインドマップによるテーマ設定
- b) 論題設定に関する徳島大学教授による講演 (計2回)
徳島大学大学院総合科学研究部教授 豊田 哲也 氏
徳島大学教養教育院教授 渡部 稔 氏
- c) 徳島大学教授陣からの課題研究指導 (計3回)

2. 2 成果発表

- a) S G H発表会 (全学年人文社会コース102名, うち発表者30名) トモニプラザ
研究発表・海外研修報告 (ともに英語での発表)
- b) 徳島県国際教育振興弁論大会 (2学年8名) 徳島県総合教育センター
グループ研究発表, 英語による意見発表
- c) S G H全国高校生フォーラム (2学年2名) パシフィコ横浜
ポスター発表 (英語) 等
- d) あわ (OUR) 教育発表会 (1学年1名) …研修報告等
- e) S G H課題研究発表会 (1・2学年645名, うち発表者2学年75名) あわぎんホール
研究発表・海外研修報告 (英語での発表)
- f) S G H甲子園 (2学年7名) 関西学院大学
ポスター発表・環境問題についてディスカッション

7 目標の進捗状況, 成果, 評価

(1) 研究計画の進捗状況

昨年同様, 本年も概ね計画通り研究開発を行うことができた。1学年には講演や国際交流を通じて, 社会問題に関する知識の習得, 国際問題への関心の向上に努めた。また, KJ法やフィッシュボーンを用いて協働的学習を行い, 国際的素養や論理的思考力を深める取組を行った。

2学年の「課題研究」では学年団で指導する体制を整え, まず学問分野別にグループに分かれ, その中で班ごとに研究を進め, 課題研究発表会 (2月) を行った。マインドマップによる論題の決定や徳島大学講師に3回の指導を仰ぎ, 内容を充実することができた。ルーブリック評価によって仮説を設定し, 論理的に考える技や, 「プレゼンテーション」発表の技を身に付けた。

3学年の授業「グローバルリーダー論Ⅱ」で「課題研究」を更に深化させ, 英語論文「English Research Paper」を作成することで発展させた。さらに, 「S G H発表会」(7月)において4班が英語で発表し, 質疑応答も英語ですることができた。また, 「クエスト」の取組も進路を見据えた「テーマ学習」を行いながら, グループディスカッションをとおして, 自己表現力を身に付けた。

(2) 成果と課題の分析, 検証

1) 成果

本校のS G H事業は, 5つのS Gプログラムと課題研究の実施からなる。全学年で取り組んだ成果ではあるが, 特に学校設定科目はじめ, 人文社会コースの各学年での各S Gプログラムへの取組が, 顕著な成果として評価できる。1学年のS Gプログラムにおいて, 各プログラムの事前・事後指導によって論理的思考力を高め, 協働的学習によって国際的素養の育成を充実させることができた。

2学年団が中心となって「課題研究」に取り組み, 海外研修との連携を図って「国際グループ」の班編制を意図的にまとめ, 研究発表まで一連の流れを構築した。インドネシア研修・フランス研修班が従来の課題研究発表をグローバル課題に転換しつつ, 3学年の「S G H発表会」へとつなぐことができた。

さらに, 「ルーブリック評価」では生徒にも指導する教員にも到達点を示すことによって, 個々の資質を向上させることができた。同時に, 生徒の活動が論文作成の技や発表の技を身に付けている時間的な経過・変容を知る方法としても利用できた。特に, プレゼンテーション力の向上が顕著であり, 本年の総括として, インプットしてきたものがアウトプットできたことが, 取組の大きな成果としてあげられる。

2) 課題の分析

「自主的に社会貢献活動や自己研鑽に取り組む生徒数」は197名 (目標設定シート1-a)。ほぼ例年と同数であるが, 「将来留学したり, 仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合」は73% (昨年比+27%) と大幅に増加した (目標設定シート1-c)。大学や企業との連携や海外研修などとおしてインプットしたことがようやく成果として現れたと考える。しかしながら, 「課題研究」で自分たちが

考える「CSR活動」についてアウトプットできたのは一部の生徒であり、まだ「グローバル戦略」、「グローバルブランド」等を提案する段階までには至っていない。ただ、「四国・徳島発」グローバルなテーマも増加しているので、さらに、国際的に活躍したいと考えるグローバルリーダーとしての生徒を育成していかねばならない(添付資料⑥ 生徒の変容1, 2)。

現時点での取組で、SGプログラムの運営と課題研究の充実はある程度図られているが、次年度さらに目標が達成できるよう工夫していきたい。今後の課題は、「何を学ぶか」「何ができるようになるか」「どのように学ぶか」、改めて「生徒にどんな力をつけたいか」学校全体で取り組み、新たな学力観に基づいて教員の授業改善につながるよう見直す必要がある。

3) 検証の計画

- ① 生徒及び職員のアンケートにより事業の成果・改善点を見る。
- ② 「課題研究」に関する「ルーブリック評価」による生徒の変容を見る。
- ③ 「CEFRのB1～B2レベル以上の取得生徒の割合」並びにTOEIC Bridge IP(1学年全員受験)、TOEIC IP(2学年全員受験)の結果から英語運用能力向上策を探る。
- ④ インドネシア研修の募集及び生徒の活動を検証する。

4) 自己評価コメント

- ① 3学年(平成27年度入学生)の生徒アンケート(添付資料②)「SGH事業で身に付けた能力」では、「未来の社会問題に対する興味・関心が増した」、「異文化に関する興味・関心が増した」、「自分なりの観点・考えをもととする姿勢が向上した」とする生徒がそれぞれ約80%であった。「SGH事業によって、身に付いたもの」では、「社会問題に関する関心」、「異文化理解」、「コミュニケーション力」、「プレゼンテーション力」が上位を占め、取組の効果が確認できた。一方で、「身に付けたいもの」では「コミュニケーション力」、「英語の力」が上位を占める。

職員アンケート(添付資料③)でも、生徒は「社会問題」(46.7%)と「プレゼンテーション力」(33.3%)を身に付け、「周囲と協力する姿勢(協調性・リーダーシップ)」(50.0%)、「自分なりの観点や考え方を持つ姿勢」(43.3%)、「考えをまとめて伝える力」(40.0%)が向上したと実感している。また、「今後の進路選択に役に立つ」(50.0%)一方で、「問題解決能力」や「リーダーシップ」は身に付いておらず、「学力向上」や「新しい入試に対応できる」とは考えていない。しかし、職員自身は「国際課題に関心」(70.0%)を持ち、「語学力の育成の必要性」(61.7%)を感じており、新しい学習指導要領にある新たな学力や来る新しい入試制度にも対応できるように、今後とも検証を進めたい。

- ② ルーブリック評価は生徒にも指導する教員にも到達点を示すことから、研究のテーマがグローバル化し、原稿を見ずに聴衆に巻き込むように発表ができる班・生徒が増えた。

ルーブリック評価を用いて自己評価をさせ、グループ別発表会後の11月時点と課題研究発表会及び論文作成後の2月時点と比較した(資料⑥-3)。

学年全体を見ると、11月時点から2月時点にかけての伸びが大きかったのは、「資料収集」(+11.6%)、「仮説の設定」(+10.3%)である。アンケート分析等を行ったり、参考文献を検索したりした結果、仮説を検証するために、参考文献を調べ根拠の裏付けを行い、新たな仮説を設定し、論理的に考える技を身に付けたものとする。

SGH対象の人文社会コースの生徒は、当初から高い評価を維持し、6項目で80%以上の高評価を示している。「説明する力(話し方)」は低評価だが変容は20.8%増と高く、「技術(スライドの効果)」も91.9%(+14.1%)と高評価であることを考えると、プレゼンテーション発表の技が身に付いたと生徒が考えていることがわかる。「SGH課題研究発表会」で代表班10班の中の4班、海外体験発表3組の中に人文社会コースの生徒が含まれており、数多くの生徒が発表した経験から、このような結果として表れていると考えられる。さらに課題研究で生徒に「身に付けさせたい力」を明確化し、ルーブリック評価基準に反映したい。

- ③ 「卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベル以上の取得生徒の割合」(目標設定シート1-e)は49%と減少しているが、本年度よりSGH対象生が3学年全体となったためである。英語運用力の向上(資料⑥-4)では3学年全体、1・2年次SGH対象であった人文社会コースとそれ以外を比較すると、全体がSGH指定を受けて以降10%ずつ増加している。特に昨年までSGH対象クラスの人文社会コースは例年高い取得率を維持しており、課題研究を海外へ発信するためのツールとして、コミュニケーションを取るツールとしての

必要性を認識し、それらの取組体験から学習意欲を高めていった。加えて、その姿勢が学年全体・学校全体へ波及しているものとする。なお、本年度のTOEICの結果（添付資料⑥-5, 6）について、2学年は過去3年度と比べて高い結果、1学年は全国平均スコアを大きく上回っているため、今後の取得率の向上についても見込まれる。

- ④ インドネシア研修の生徒募集については、昨年度「SGH課題研究発表会」（平成29年2月8日）での「海外体験発表」の際にその意義と内容を伝え次年度の参加を呼びかけた。希望生徒対象の説明会には約40名の参加があり、うち16名の「志願書」提出者の中から選考試験（筆記テストと面接）を日本語・英語で行った。合格者は14名、教諭2名が引率することと補助金額の制約の中で決定をした。なお、次年度の生徒募集に関しては、同様に募集を行った結果、24名のものが志願しており、順調に成果を上げている。

生徒の活動については、以下の通りである。

- a) SGH発表会（全学年人文社会コース102名、うち発表者11名）とくぎんトモニプラザ
海外研修報告（英語での発表）ただし、昨年度の参加者
- b) SGH全国高校生フォーラム（2学年2名）パシフィコ横浜
ポスター発表（英語）等
- c) SGH課題研究発表会（1・2学年645名、うち発表者14名）あわぎんホール
海外研修報告（英語での発表）
- d) SGH甲子園（2学年7名）関西学院大学
ポスター発表・環境問題についてディスカッション
- e) 学校支援協議会（2学年7名）城東高校
ポスター発表
- f) 大阪大学コンファレンス（新3学年3名）大阪大学
口頭発表・ディスカッション等に参加予定（H30.4.21～22）

8 次年度以降の課題及び改善点

(1) 検証の結果に基づく取組の改善

- ① 1学年のSGプログラムにおける授業形態の改善
- ② 2学年の海外研修と「課題研究」との連携やルーブリック評価の基準の改善
- ③ 3学年の「クエスト」と「課題研究」論文指導の改善
- ④ 成果の普及について

(2) 自己評価コメント

1学年のSGプログラムにおいて、各講演の事前・事後指導では、ディスカッションを行って論理的思考力を高め、協働的活動により「自分たちが考える○○」といったワークショップ型授業を行うことができた。「21世紀を生きる」ではポスター発表と講義形式の授業が好評であった。また、「Global Health」では全クラスでポスター発表を行うことができた。次年度は連携して「健康」をキーワードにポスターセッション・コンテストを実施し、さらに、2学年の課題研究につなげたい。

2学年の「課題研究」と海外研修との連携を図るために、班編制で国際グループにまとめ、研究発表まで一連の流れを構築した。そして、校外での成果発表の中心的役割を担っているのは、前述の通りである。生徒への海外研修報告会や文化祭の展示発表等を行うことによって、インドネシア研修の希望者は倍増した。今後ともフランス研修とともにインドネシア研修の継続を含め、次年度以降の計画を検討する。

また、ルーブリック評価は「課題研究」を評価する上で、生徒にも指導する教員にも到達点を示すことによって、論文作成、プレゼンテーションの力を身に付けた生徒が増えた。さらに、グローバルリーダーとして生徒に身に付けさせたい力を明確化し、評価基準に反映したい。

3学年の人文社会コースの生徒は、「課題研究」を深化させるために、英語論文作成と英語での口頭発表を行った。今後は「健康」と「環境」をキーワードに、高校生ならではの発想に基づいた「四国・徳島発」、「グローバル戦略」等の提案ができるよう、様々な仕掛けを講じて取り組ませたい。

成果の普及に関しては、前述の通り、発表会等において広く発信することができた。しかしながら、普及の対象が高校生中心であったことから、来年度は中学生や教育関係者、地域の方々へ広げるとともに、機会あるごとに海外へも発信することを考えていきたい。

(3) 今後の課題

海外研修と課題研究との連携を一層深め、自分たちが考える「グローバル戦略」「CSR活動」や今後の世界の潮流等について人類の健康増進と環境保全の観点からも考察、発信していくための課題研究を拡充・充実へとつなげていくために、次のことに取り組みたい。

- グローバルリーダーとしての生徒像を再確認しつつ、各取組の検証方法や、その成果の評価方法について検討する。
- 「四国・徳島発」課題研究テーマのさらなる深化を図るために、協働的活動をとおして生徒の研究活動への意欲向上を図る。
- SGH指定終了後の取組について、現状の取組を「維持」していきつつ、インドネシア研修も含めた国際交流を「いかに図るか」検討をする。

(4) 成果の普及

成果の普及については、県内外での「課題研究発表会」等でその成果を広く普及するとともに、海外研修成果等は英語版ホームページにて国内外へ発信する。

- ① 本校主催の「SGH発表会」や「中学生対象の学校説明会」等を、教員・生徒・保護者等に対して幅広く案内し、そこで本校の課題研究の成果を広く普及する。
- ② 県教委主催の「あわ(OUR)教育発表会」や「課題研究合同発表会」等において、その成果を広く普及する。
- ③ 県外の「SGH指定校合同発表会」等において、その成果を広く普及する。
- ④ 「とくしま教育週間」期間中の「本校公開授業週間」において、「課題研究中間発表会」を開催し、その内容を近隣の住民や中学生等に伝える。
- ⑤ フランス研修では共通テーマを研究し、互いの仮説を検証し合い、研究成果を英語版ホームページで国内外へ発信する。

<添付資料>

- 添付資料① 目標設定シート【別紙様式7】
- 添付資料② 生徒アンケート
- 添付資料③ 職員アンケート
- 添付資料④ 教育課程表
- 添付資料⑤ 運営指導委員会における指導、助言等
- 添付資料⑥ 生徒の変容

【担当者】

担当課	教育委員会学校教育課	TEL	088-621-3206
氏名	寺澤 昌子	FAX	088-621-2882
職名	指導主事	e-mail	terazawa_masako_1@pref.tokushima.lg.jp

II 研究開発の実施

1 スーパーグローバルプログラムにおける取組

1. 1 スーパーグローバル講座 *academic*

①講演・座談会「グローバル化する社会で求められる力とは？～なぜ課題探究型学習は必要か～」

(a) 実施実績

- 実施対象 (講演) 第1学年 全員
(座談会) 人文社会コース全員に希望者を加えた約30名
- 実施日時 平成29年5月22日(月)(講演) 13:30～14:40
(座談会) 14:55～15:25
- 実施場所 徳島県立城東高等学校 多目的ホール・講義室A
- 指導講師 大阪大学大学院 国際公共政策研究科教授 松繁 寿和 氏
- テーマ等 異文化理解, グローバル経営戦略等
- 目的
 - ・高校生としてグローバル化する社会でのあり方について考える。
 - ・グローバル人材に求められる資質や能力について理解する。
 - ・企業の世界戦略について知る。

(b) 実施計画

- 実施前: S G H事業についての意義や目的についての説明。
- 実施後: 講演内容をまとめ、感想を書いて提出する。生徒アンケート実施。

(c) 実施概要

平成29年5月22日(月)に、第1学年を対象とした、今年度最初のスーパーグローバル講座が行われた。本校 S G H事業への取組を新入生に動機づける大きな意味をもっている講演会であり、昨年に引き続き、大阪大学大学院国際公共政策研究科教授の松繁寿和先生に御講演いただいた。松繁先生は教育経済学や労働経済学が専門であり、変化するグローバル社会に造詣が深いことに加え、大阪大学が関係する高校生対象のイベントなどに数多く携わられており、城東生も機会があるごとに大変お世話になっている先生である。

「グローバル化する社会で求められる力とは～なぜ課題探究型学習が必要か～」の演題のもと、講演の前半では、世界に比べて日本は高度人材育成において遅れ、外国語能力が劣るという事実についての内容であった。また、グローバル化された社会において必要なのは、異分野融合によるイノベーションであり、そのためには他分野の人たちに自分のアイデアを伝えるためのコミュニケーション能力やプレゼンテーション技術が必要だということなどを、具体的にお話いただいた。講演の後半では、研究の進め方についての内容であり、知的作業における作法や先行研究の調べ方などを、具体的かつ分かりやすい説明をいただいた。1年生のこの時期に実施することによって今後生徒自身が何を学び、どのように成長すべきかを考えるよい機会となった。

講演後の座談会は、人文社会コースの生徒と希望者で行われた。生徒からの「具体的にどうということですか？」という質問に対し、先生が身近な事象や具体的な企業を例に解説していただき、それを聞きながら聞いている生徒の姿は大学のゼミを彷彿とするものであり、生徒にとっては講演内容の理解を深めるまたとない機会となった。



(d) 実施結果

□生徒感想文（抜粋）

- ・社会の中では英語の力が重要になってくることを改めて実感しました。そのほかにもコミュニケーション能力、積極性、物事への興味・関心など大切なことは数多くあるので、高校生活の中で少しずついいから身に付けたいと思いました。
- ・日本はグローバル化が進んでいると思っていたけれど、ほかの国と比べると、言語能力が低く、自分の意見をもってそれを他の人に伝える力がないことを知ってびっくりしました。
- ・日本と外国の教育に関する圧倒的な差があることを知ることができた。また研究の進め方では個人の思いと客観的な重要性は異なり、一般性を問うことが大事だということもわかりました。
- ・グローバル化によって起こる変化に対応していきたいと思いました。英語力はもちろん、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力も身に付けていきたいと思います。
- ・独特な発想をすること、コミュニケーションをとること、他者を理解し、配慮すること、自ら学ぶことなどの大切さをよく学べた。
- ・現代の日本では理系が必要とされているのだと思っていましたが、その理系の人たちを生かすのは、文系の人たちで、英語力はもちろん、世界で戦うための能力も必要とされていると知り、自分には勉強しなければならないことがまだまだたくさんあるのだと痛感しました。「英語ができなくても・・・」と正直思っていました、これから考えを変えて学んでいきたいです。

□生徒アンケート（平成29年5月実施 対象：1年生出席者312名）

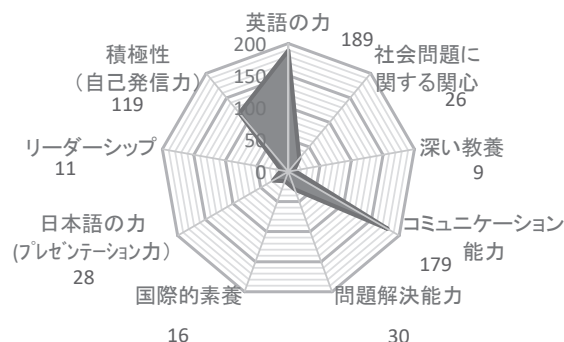
Q. 今回の講座で、国際課題や社会問題に対する興味・関心が増しましたか。

肯定的意見の割合（増した+どちらかという増した）
87.5%

Q. 今回の講座で、異文化や外国語に対する興味・関心が増しましたか。

肯定的意見の割合（増した+どちらかという増した）
82.4%

Q. 今回の講座で、あなたが特に必要だと感じたものを2つ選んでください。



(e) 検証と考察

□取組の成果について

グローバル社会を現在の自分達とのつながりを意識し、そのなかでこれからの社会で生きるために身に付けるべき能力や求められる資質について考え、認識することができる機会となった。高校生の日常で身の回りにあるものや聞いたことのある出来事を世界と関連づけて再認識することができるような講演内容であり、日本を取り巻く環境が厳しさを増すなかで今後どのような視点を持つべきか刺激となる内容であった。

□次年度への改善点等

本校SGH事業の起点となる講演であり、グローバル化社会に対応するために、高校生としてこれから何をすべきか、何ができるのか、といった視点で大いに示唆に富んだものであった。今後の事業のなかで主体的に取り組める仕掛けや環境をつくり、生徒が諸事業に実践的に取り組むことができるような意識づけを行うことの重要性を再認識し、さらに意識づけたものを流れのなかで育てていくことが大切であると考え。

②講演「インドネシア～見果てぬ夢を追う～」

(a) 実施実績

- 実施対象 第1学年 全員
- 実施日時 平成29年11月27日(月) (講演) 9:40～11:40
(座談会) 11:40～12:30
- 実施場所 徳島県立城東高等学校 多目的ホール・101HR
- 講演講師 大阪大学大学院 国際公共政策研究科教授 松野 明久 氏
- テーマ等 インドネシアの歴史・経済・汚職問題, イスラム教
- 目的
 - ・インドネシア社会(多民族社会・宗教等)について理解する。
 - ・グローバル化する世界における日本の在り方について考える。

(b) 実施計画

- 実施前: インドネシアについての基礎的知識を事前に確認する。
- 実施後: 講演内容をまとめ, 感想を書いて提出する。生徒アンケート実施。

(c) 実施概要

東ティモールやインドネシアを研究フィールドとして, 特に紛争史, 紛争解決, 平和構築などの分野を研究されている大阪大学大学院 国際公共政策研究科教授 松野 明久 氏を迎え, 本校が海外研修を行っているインドネシアの社会に関する講演会を行った。

内容としては, インドネシアの地理・歴史・社会的背景・宗教的背景, そしてイスラム主義と民族主義からなるインドネシアの経済などについてお話いただいた。利子を取らないイスラム銀行の存在や, 国民の大きな不満の種となっている汚職問題の話などを, 具体例を用いながら, 丁寧に説明していただいた。

座談会では, 生徒からの「インドネシア人の日本人に対する感情」や「スハルト政権と汚職問題の関係」についての質問に対して, 黒板を用いながらより詳しい説明をしていただいた。

(d) 実施結果

- 生徒アンケート(平成29年11月実施 対象: 1年生出席者318名)

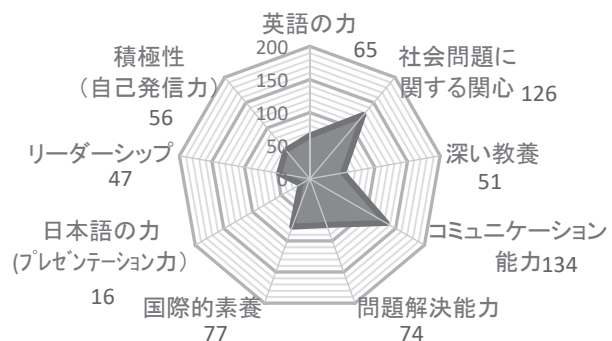
Q. 今回の講座で, 国際課題や社会問題に対する興味・関心が増しましたか。

肯定的意見の割合(増した+どちらかという増した)
85.3%

Q. 今回の講座で, 異文化や外国語に対する興味・関心が増しましたか。

肯定的意見の割合(増した+どちらかという増した)
81.4%

Q. 今回の講座で, あなたが特に必要だと感じたものを2つ選んでください。



- 生徒感想文(抜粋)

- ・今回の講演で, インドネシアの過去から現在の状況まで詳しく知ることができた。日本が占領していたことや, バリ島のみヒンドゥー教であること, 汚職が問題になっていることなど意外なこともあった。私はまだ外国に行ったことがないので, 将来インドネシアに行って, 現在との比較や貧富の格差などを自分の目で見たいと思う。
- ・経済が発展していく中での経済格差の広がりや賄賂問題がよくわかりました。賄賂問題に関しては, 衝撃の連続でした。日本の日常の中では賄賂のやりとりというものはあまり見かけません。それがインドネシアでは頻繁に行われているのを知って, 啞然としました。発展の中にも皆が目を向

けない問題がたくさん存在しているのだと今回の講演を聞いて強く感じました。そういう闇の部分にもこれからは目を向けていく必要があると思いました。

- ・東南アジアの国ということしか知らなかったインドネシアについて、いろいろなことがわかり、とても興味深かったです。若者が政治に対して熱心なところは見習うべきだと思いました。
- ・インドネシアという一つの国に対して、とても深く知ることができるとてもよい機会となりました。インドネシアの現在の経済的発展という光の部分や、汚職がはびこる公務員の体制などの陰の部分は、全てそれ以前の歴史が影響しているのだと、当たり前なことなのですが、改めて感じました。座談会でのスハルト政権が影響して現在の汚職体制があるという話は、歴史的な流れやつながりが見えて、とても興味深かったです。

(e) 検証と考察

□取組の成果について

インドネシアに造詣の深い松野明久教授の講演を設定することができたことで、今後ますますの発展が見込まれる東南アジア、特にインドネシアへの理解を深める機会となった。また、今回の講演を、本校SGH事業の全体の流れのなかでインドネシア海外研修へのステップと位置づけ、インドネシアへの興味・関心の導入とすることができた。

□次年度への改善点等

講演に際しての事前指導で、インドネシアの地理や人口、宗教など基本事項はもちろん、経済や政治の時事的な事項についての予備知識が十分あれば、より講演の理解が深まったように思われる。

③大阪大学 Future Global Leaders Camp

(a) 実施実績

- 実施対象 第1学年 希望者1名
- 実施日時 平成29年8月8日(火)～10日(木)
- 実施場所 大阪大学 豊中キャンパス OSIPP棟内
- 主催 大阪大学大学院国際公共政策研究科
- テーマ等 高校生対象のセミナー合宿 定員30名
- 目的 将来リーダーシップを発揮しグローバルに活躍するために、国際的な感覚を養う。

(b) 実施計画

- 実施前：『以下のテーマから一つを選択し、1500字以上であなたの考えを述べてください。なお、図表を必ず一つ使用すること』という事前課題の提出。
 - ①世界が直面している問題について日本はなにができるか
 - ②日本がお手本とする国・取り入れるべき政策について
 - ③生活の中で感じるグローバル化
 - ④その他、国際問題やグローバル化に関する問題についての自由テーマ
- 実施後：感想を書いて提出する。

(c) 実施概要

- | | | |
|-------|----|---|
| 8日(火) | 午前 | 開会式
講義1 |
| | 午後 | 講義2
グループ作業1(グループ分け、テーマ設定)
大学院生によるモデルプレゼンテーション1
グループ作業2 中間発表準備
Welcome Party |
| 9日(水) | 午前 | グループ作業3 中間発表準備 |

大学院生によるモデルプレゼンテーション2

	午後	グループ作業4	中間発表準備
		中間発表	
		グループ作業5	最終発表準備
10日(木)	午前	グループ作業6	最終発表準備
	午後	最終発表	
		結果発表, 閉会式	

(d) 実施結果

生徒感想文 (抜粋)

私はこのキャンプで世界の教育問題について考えました。最初は世界規模の大きな問題なのでどこから取り組むべきかわかりませんでした。大学院生の方や先生方にアドバイスをいただき、焦点を絞って考えることが重要だとわかりました。このキャンプを通して感じたのは、問題解決の一番の近道は多角的な視点を持つということです。多面的に見ないと答えは見えてきませんでした。また周りの生徒たちのレベルがとても高く、良い刺激になりました。想像以上の多くの学びがあり、参加して良かったと思います。

(e) 検証と考察

取組の成果について

日常の学校生活とは異なる環境で、初めて出会う他校の生徒たちと、社会問題について考え、発表することは、想像以上に大変だったようである。しかし、多くの良い刺激を受け、自分自身を見直す良い機会となった。

次年度への改善点等

募集人員に限りがあるが、内容が非常に充実しているため、できるだけ多数の生徒が参加すればよいと思われる。昨年度に参加した先輩から、事前のアドバイスなどをもらえたら希望人数も増え、一層有意義なものになると思われる。

④大阪大学法学部国際公共政策学科訪問

(a) 実施実績

- 実施対象 第2学年 希望者20名
- 実施日時 平成29年12月18日(月) 11:45~20:30
- 実施場所 大阪大学法学部 豊中キャンパス
- 指導講師 大阪大学法学部 松繁 寿和 先生 赤井 伸郎 先生 大槻 恒裕 先生
高井 裕之 先生
Oksana Hagverdiyeva アゼルバイジャン出身 大学院1年生
Khayyom Rahmatuloev タジキスタン出身 大学院2年生
Secil Er トルコ出身 研究生
- テーマ等 大学の講義見学, 留学生との座談会
- 目的 スーパーグローバル大学に指定されており、グローバル人材の育成をめざす大阪大学の取組に興味・関心を持ち、日常での大学の講義に触れることによって大学に対する理解を深めることを目的とする。大学生と同じ講義を受講することで高いレベルでの刺激を受けることやゼミ形式の講義を受講することで、大学生が小人数で主体的に学問に取り組む姿に触れることも目的とする。

(b) 実施計画

- 実施前: 大阪大学法学部の講義についてホームページのシラバス等で事前に調べ、講義内容の関連事項について情報を集め、知識を増やしておく。

□実施後：講義の内容を整理し要点をまとめる。また、講義を受講して感じたことを感想としてまとめる。

(c) 実施概要

大阪大学法学部国際公共政策学科を訪問し、ゼミや講義を見学・受講した。また、留学生と座談会を実施し、様々な国の実情について意見交換や質問を交えより具体的に知ることができた。

14:40～16:10 留学生との座談会（出身国・研究テーマ等）

Oksana Hagverdiyeva, Khayyom Rahmatuloev, Secil Er

16:20～17:50 「セミナー（2～4回生対象）」見学

松繁 寿和 先生，赤井 伸郎 先生，大槻 恒裕 先生，高井 裕之 先生

(d) 実施結果

□生徒感想文（抜粋）

- ・私たちの課題研究と違って分析やデータ収集，数式によって実証することに力を入れており，それを踏まえたうえでの発表であったので根拠がしっかりしていて感動しました。また，発表をもとに実際に省庁に働きかけるなど現実的な行動に圧倒されました。
- ・文系学部でも統計学のような数学的な思考を必要とする科目があることを知ることができ，幅広く学ぶことの重要性が実感できた。
- ・阪大生が実際にゼミで学習している内容を知ることができよい機会となりました。大学での学びや受験勉強の乗り切り方など具体的に教えてくださいました。
- ・自分の興味ある分野を選択し，深く学べるゼミは本当に魅力的で私も3年後には生き生きと発表をされていた大学生の方と同じようになれたらいいなと想像しながら見学させていただきました。

(e) 検証と考察

□取組の成果について

今回はスーパーグローバル講座 academic（大学との連携による取り組み）の3回目として大阪大学法学部国際公共政策学科を訪問し，ゼミに参加させていただくことで日常の講義の様子に触れる機会や出身国がそれぞれ違うなど多様な背景を持つ留学生との座談会の機会を特別に設けていただいた。ゼミでの学びが学生主体で積極的に取り組まれている様子や座談会形式でアットホームな雰囲気や留学生のプレゼンテーションに耳を傾け，刺激を受ける生徒が多かった。また，一つのことに対して議論を展開させることの面白さ，積極的に発表することの大切さなど学び取り，意欲を高めることができた。

□次年度への改善点等

日程を調整し，余裕のある形で講義の受講時間等の変更を考えてもよいかと思われる。

⑤徳島大学医学部 医学体験実習

(a) 実施実績

□実施対象 第2学年 希望者25名

□実施日時 平成29年12月16日（土）8:50～16:15

□実施場所 徳島大学医学部

□指導講師 徳島大学医学部 勢井 宏義 教授

□目的 医師を志す者としての心構えを学び，医学体験を通して将来的な研究に対する意欲を高める。

(b) 実施計画

□実施前：DNA抽出のための唾液採取

□実施後：感想を書かせる。

(c) 実施概要

「医学部講義」 指導講師：勢井 宏義 教授

「先輩に聞く」 医学部2回生学生（本校出身）

「基礎医学実習体験“唾液からDNA抽出”」 指導講師：勢井 宏義 教授

「Finding your blind spots」 指導講師：山田 佳子 先生

施設見学 指導講師：勢井 宏義 教授, Tania Afroj 先生

「スキルスラボでの臨床体験」 指導講師：赤池 雅史 教授, 岩田 貴 教授

勢井教授からの講義では、医師としての心構えについて学び、いかにして社会貢献するかを考えた。研究医となって社会貢献するか、臨床医となって地域医療で社会貢献するか、また、国際地域を見据えて世界で医療に貢献するか、様々な貢献の仕方のお話を聞き、将来医師として働く覚悟について考えさせられた。

次に、事前に採取した唾液からDNAを採取する実験を行った。実験では、勢井教授とバングラディッシュからの留学生である Tania Afroj 先生の御指導のもと、主として英語による説明により進められた。実験を進めるには、事前に実験の全体を把握しておかないと正確にかつ手際よく行うことができないことを学んだ。大学での実験では、留学生との共同実験も数多くあり、英語がコミュニケーションスキルの一つであることをあらためて学んだ。また、山田佳子先生の講義はすべて英語によって行われ、講義内容を理解し、器具を用いて自分の Blind Spots を発見し、観察することができた。

施設見学では、カンファレンスルームや Tania Afroj 先生の研究室を見学した。臨床医ばかりでなく研究医の仕事をつぶさに見ることができ、視野を広げる一助となった。また、スキルスラボでは聴診器を用いた検診体験、採血体験、縫合体験および BLS (Basic Life Support) について実習を行った。



(d) 実施結果

□生徒感想文（抜粋）

- ・医師の責任の重さや、医学を学ぶとはどういうことなのかを肌で感じることができた。そして、「常に謙虚な気持ちで向き合う」という科学者としての心構えの大切さを学ぶことができた。
- ・英語の講義では、リスニングはできても質問したり意見を述べたりするアウトプットが十分にできなかった。今後、自分の考えを英語で相手に伝えられるように学習する必要性を痛切に感じた。
- ・実験をスムーズに進めるには、事前の準備段階から目的や方法を十分に理解しておくことが重要であると思った。
- ・縫合体験や採血体験は初めてだったので、とても貴重な体験となった。「医師になる」という夢から、どんな医師になるのかももっと具体的な目標を定めようと思うようになった。
- ・DNAという書物の中で見たことのないものを、実際に自分の唾液から取り出し、自分の目で見ることはできたときは、



感動と興奮を覚えた。また、この実験の先にはどんな世界が広がるのだろうかと気持ちが高ぶってきた。

(e) 検証と考察

□取組の成果について

例年より多くの25名の生徒の参加ができた。医師と言えば臨床医と考えていた生徒たちが、研究医となって社会に貢献するという選択肢に興味を持つようになった。また、徳島県内の地域医療に携わることを目標としている生徒の中に、世界の地域医療に貢献している医師の話聞き、グローバルな視点に視野を広げることができた生徒もいた。医師の仕事を単一方向ではなく、多方向から考えるようになったことは大きな成果と言える。また、英語を学問としてではなくコミュニケーションツールとして使いこなさなくてはならないことを肌身で体験したり、科学者として実験に取り組む姿勢を学んだりすることができたことは、大きな収穫であった。

□次年度への改善点等

例年DNAの抽出実験を行っていただいているが、当日配布される1枚のペーパーから、実験器具の取り扱いや実験の内容を素早く理解し、適切に器具を扱うことができる生徒が少ないので、普段の授業の中や放課後を利用して、参加生徒たちに実験の基礎基本を体験させておくことが大切だと感じた。実験を行う上での最低限の常識を理解させておくと、もっと実験をスムーズかつ正確に行え、英語による意思疎通にも集中できたのではないだろうか

1. 2 スーパーグローバル講座 *professional*

①講演「大塚製薬のグローバル化～世界の人々の健康に貢献するために～」

(a) 実施実績

- 実施対象 第1学年 全員
- 実施日時 平成29年6月22日(木) 13:15～15:35
- 実施場所 徳島県立城東高等学校 多目的ホール
- 指導講師 大塚製薬株式会社 東京本社総務部長(能力開発研究所駐在) 浜本 光生 氏
- テーマ等 大塚製薬の海外戦略, 海外勤務
- 目的
 - ・企業を取り巻くグローバル化による変化について理解する。
 - ・グローバル化のもたらす意味やその中で自己の使命を考える。

(b) 実施計画

- 実施前: 大塚グループの概略についての事前指導。
- 実施後: 講演内容をまとめ、感想を書いて提出する。生徒アンケート実施。

(c) 実施概要

大塚製薬株式会社 東京本社総務部長(能力開発研究所駐在) 浜本 光生 氏を迎え、「大塚製薬のグローバル化～世界の人々の健康に貢献するために～」と題して講演会を行った。化学原料メーカーの会社としてスタートした大塚製薬がどのように今のグローバル企業になったか、大塚製薬が目指していること、海外戦略等について伺った。

発祥の地である徳島県民からは身近に感じられている大塚製薬だが、4万7000人のグループ従業員の内約6割は外国人である。海外従業員を含めて全社員が、企業理



念の“Otsuka-people creating new products for better health worldwide.”に従って日々働いているということから、企業としての目的意識共有の大切さを学んだ。

ほかにも、海外の拠点の話や、医薬品のグローバル化などトピックは多岐にわたったが、随所に「自分で問題を見つけて自分で解決する」、「人と同じことやものまねをしない」、「先入観を取り除き発想を転換する」などの大塚製薬を成功に導いたアイデアが盛り込まれていた。

(d) 実施結果

□生徒感想文（抜粋）

- ・私たちの身近にある大塚製薬について、今まで知らなかったたくさんのことを学ぶことができました。
「人のまねをしない」をモットーとした大塚製薬だからこそ生むことのできた製品がたくさんあるのだと思った。また「失敗しなければ成功もしない」、「先入観を取り除き発想を転換する」などこれからの生活に役立てて行きたいことも学べた。世界へ発展している大塚製薬さんのグローバルかについての講演はとても貴重なものになった。今日学んだり知ったりしたことを生かし、グローバル化について知識を深めていきたいと思う。
- ・自ら問題を見つけ出し、自ら解決していくというやり方にとってもいいなと共感できた。先入観だけでは限界のある発想を、先入観をなくすことによって無限の発想へと変えていくことができることをとても難しいなと感じた。そのためには自分自身の先入観というものを自覚しないといけないと思った。
- ・私は今日の講座は、たくさんのことを考えるきっかけとなったと思う。大塚製薬さんの歴史や企業理念をはじめ、グローバル化にどう対応していくかなど、とても勉強になる話をいただいた。特に心に残ったのは、3人のレンガ造り職人の「目的意識」の話だ。同じ作業をするにしても、心の持ち方で結果や周りからの評価が大きく変わってくるという話にとっても心動かされた。私も普段の勉強で「やらなければならない」と思うより、どうせ勉強するのならば、「学べてうれしい！」という心持ちで行きたいなと思った。

□生徒アンケート（平成29年6月実施 対象：1年生出席者313名）

Q. 今回の講座で、国際課題や社会問題に対する興味・関心が増しましたか。

肯定的意見の割合（増した+どちらかという増した）
90.1%

Q. 今回の講座で、異文化や外国語に対する興味・関心が増しましたか。

肯定的意見の割合（増した+どちらかという増した）
77.0%

Q. 今回の講座で、あなたが特に必要だと感じたものを2つ選んでください。



(e) 検証と考察

□取組の成果について

大塚製薬は大変身近な企業であり、有名大企業であるという認識を生徒はもちろん持っていたが、グローバル展開が急激に進んでいること、特にグループ全体の売上高の半分以上、全従業員の6割以上を日本以外の海外で占めているということに驚いている生徒が多かったようである。「大塚製薬のグローバル戦略」の話聞き、理解を深めるというテーマを設定していたが、「地域に対する社会貢献」、「環境へのアプローチ」、「先入観を取り



除き発想を転換する」といった大塚製薬だけでなく海外戦略を語る上で普遍的な戦略を、きちんと抜き出している生徒が数多く見受けられた。

□次年度への改善点等

本校が実践しているSGHの取組・目的・理念などについて、本校の構想を事前にもっと伝えておけばさらに効果的な講演になると思われる。

②講演「大塚グループのCSR」

(a) 実施実績

- 実施対象 第1学年 全員
- 実施日時 平成29年10月19日(木) 14:20～16:10
- 実施場所 徳島県立城東高等学校 多目的ホール
- 指導講師 大塚ホールディングス株式会社 総務部課長 梅津 芽生 氏
- テーマ等 CSR活動(企業の社会的責任)
- 目的
 - ・CSR活動や企業としての国際貢献の在り方について理解する。
 - ・生徒一人ひとりのグローバルな見方・考え方を広げる。

(b) 実施計画

- 実施前: 企業のCSR活動についての事前指導。
- 実施後: 講演内容をまとめ、感想を書いて提出する。生徒アンケート実施。

(c) 実施概要

大塚ホールディングス株式会社 総務部課長 梅津 芽生 氏を招き、「大塚グループのCSR」というテーマで講演会を行った。

講師は徳島県出身で、本年度のインドネシア研修(大塚製薬インターンシップ)でもお世話になっている。今回は、来年度にインドネシア研修の対象となる第1学年の生徒に向けて、大塚グループのCSR活動についてお話いただいた。

最初に大塚グループ沿革の紹介があり、CSR活動の根底にある企業理念“Otsuka-people creating new products for better health worldwide.”についての説明があった。

CSR活動については、まずCSRとは何かということから始まり、大塚グループは海外を含め、事業を展開している地域への「恩返し」としてCSR活動を行っていることや、5つの分野(健康・環境・品質・社員・文化)からアプローチしていることを学んだ。

その後、具体的なCSR活動の事例として、インドネシアで子供に勉強を教える寺子屋活動(本校のインドネシア研修において、この活動の補助を生徒が行っている)、パキスタンに設立した無料診療所、ミャンマーの助産診察センターなどの紹介があった。また企業だけではなく、すべての組織を対象にし、持続可能な社会への貢献に責任を持つSRが広がっていることや、CSRを企業が成長するための戦略ととらえる戦略的CSRについての説明もあった。質疑応答では、「CSR活動を行うには多額の費用がかかるのに、なぜ行うのか」などの質問が出た。

(d) 実施結果

□生徒感想文(抜粋)

- ・CSR活動とは?というところから大塚グループのCSR活動について詳しくお話をくださり、よりCSR活動についての理解が深まりました。パキスタンの難民診療所では宗教に配慮して、女性の患者は女性の医師が診るなど、支援する中でもそれぞれの人に合わせるという工夫をしていると思いました。



他にも様々なCSR活動をしていると思うので、今回のことをきっかけに調べてみたいと思います。

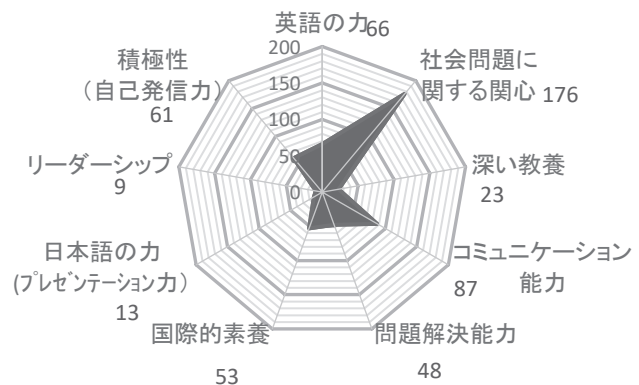
- ・創業したときから海外を視野にいれていたということは、すごい大きな夢を持っていたということなので、私もそんな風に大きな夢をもち、実現できるように追いつきたいと思った。
- ・企業理念とCSR活動の関係はあまり分かっていなかったけれど、今回の講演で、強い結びつきがあるのだと知りました。日本国内にとどまらず、世界に目を向けることで企業として大きく成長できるのだらうと思いました。いろいろな企業や組織のCSR・SRに興味を持ちました。
- ・CSR活動は主に世界や国、地域など大きな単位でしているものばかりであると思っていただけ、学校やスポーツクラブなどで熱中症予防などの活動をしているなどと聞いて、身近なところにCSR活動があるのだと知りました。

□生徒アンケート（平成29年11月実施 対象：1年生出席者310名）

Q. 今回の講座で、国際課題や社会問題に対する興味・関心が増しましたか。

肯定的意見の割合（増した+どちらかという増した）
72.9%

Q. 今回の講座で、あなたが特に必要だと感じたものを2つ選んでください。



Q. 今回の講座で、異文化や外国語に対する興味・関心が増しましたか。

肯定的意見の割合（増した+どちらかという増した）
67.1%

(e) 検証と考察

□取組の成果について

生徒の感想から、「CSR活動への理解・関心」、「異文化や地域融和への理解・関心」がよく深まったことがわかった。また、CSR活動への理解を深めるだけでなく、自分のことに置き換えて今回の講演から学ぶことができた生徒もいたことが分かった。

□次年度への改善点等

1年生の「クエスト」の大きな目的の1つである「職業研究」におけるこの講演の目的や意義をより明確にし、事前・事後指導まで充実させることでより一層充実した講演にできると思われる。

③講演「日亜化学工業株式会社 海外勤務経験を聞く」

(a) 実施実績

- 実施対象 第1学年 全員
- 実施日時 平成29年12月14日（木）14:35～16:25
- 実施場所 徳島県立城東高等学校 多目的ホール
- 指導講師 日亜化学工業株式会社
第二部門営業本部第二グループ車載営業課長 黒田 浩章 氏
第二部門バックライト事業統括部バックライト企画部主任研究員 山本 敦司 氏
- テーマ等 海外勤務
- 目的
 - ・グローバル人材として必要なものが何かを考える。
 - ・理系人材のグローバル社会との関わり方を知る。

(b) 実施計画

- 実施前：日亜化学工業の歴史・製品・企業理念等について事前学習を実施。
- 実施後：講演内容をまとめ、感想を書いて提出する。生徒アンケート実施。

(c) 実施概要

○黒田氏の講演：

Global Skill というのは Hard Skill (学習によって得られる知識) と Soft Skill (体験・経験に基づく個性・魅力) を合わせたものであるというお話をいただいた。また LED とレーザーの強みと、それを生かしたデザインの高機能化などの説明をしていただいた。

○山本氏の講演：

「好意的な姿勢」「専門性」「アイデンティティ」「人種・国家・宗教の尊重」が大切だということをお話いただいた。また外国との交渉で必要な技術などの、実際の経験に基づく貴重な話をいただいた。

(d) 実施結果

□生徒感想文 (抜粋)

- ・ソフトスキルとハードスキルについて話を聞き、必要なのは言語能力だけではないのだということや、私達には圧倒的にソフトスキルが足りないということがわかった。「経験」というのは本当に大きな力だと思う。これから自分がどのような方向に努力して、何の力を身に付けるべきかを考えたい。
- ・外国での赴任の経験についてお話を聞くことができよかったです。私は今まで「海外で働く」ということは自分にとってあまり関係のないことだと考えていました。英語が得意ではないので、将来も日本でいるつもりでしたが、グローバル化が進んだ現代では、英語や海外との関わりは避けて通れないと思いました。これからは海外のことにも目を向けて、広い視野を持ちたいです。
- ・今回のお話を聞いて、私はこれから自分がどのような経験を積んでいくべきなのか、またこれから世界で活躍していくためには自分がどのようにならなければいけないかを理解することができました。私には多少の Hard Skill はあっても、まだ交渉力やリーダー力などの Soft Skill は足りません。今後自分が世界で活躍できるグローバル人材となるためには、より積極的に様々な経験を積み、能動的で責任のある行動を心がけたいと思いました。



□生徒アンケート (平成29年12月実施 対象：1年生出席者317名)

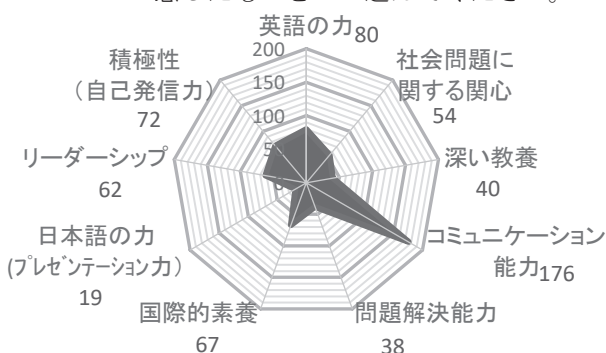
Q. 今回の講座で、国際課題や社会問題に対する興味・関心が増しましたか。

肯定的意見の割合 (増した+どちらかという増した)
80.8%

Q. 今回の講座で、異文化や外国語に対する興味・関心が増しましたか。

肯定的意見の割合 (増した+どちらかという増した)
76.0%

Q. 今回の講座で、あなたが特に必要だと感じたものを2つ選んでください。



(e) 検証と考察

□取組の成果について

日亜化学工業株式会社が徳島発のグローバル企業ということで、多くの生徒が、世界で活躍することを身近に感じたようであった。また Global Skill というのは、Hard Skill (学習によって得られる知識) だけでなく Soft Skill (体験・経験に基づく個性・魅力) も大切であるという話を聞き、「自分自身も積極的に様々なことに取り組みたい」、「グローバル人材になりたい」という生徒の意欲が高まったように思われる。

□次年度への改善点等

例年、異なる視点でお話しいただけるよう、講師先生を2名依頼させていただいている。生徒にとっては、理系とグローバルの関係がより身近に感じられ、自分が想像しなかったようなお話を聞くことができるメリットがあるため、今後も継続していただくことを希望する。

④企業研修・国際機関訪問

(a) 実施実績

- 実施対象 第1学年 全員
- 実施日時 平成29年9月22日(金)
- 実施場所 神戸税関・WHO神戸センター・JICA関西(神戸市)
カバヤ食品・ベネッセコーポレーション(岡山市)
京セラ本社・島津製作所(京都市)・JT生命誌研究館(高槻市)
シャープ歴史・技術ホール(天理市)
積水ハウス総合住宅研究所(木津川市)
武田薬品工業・大阪ガス・日本生命・よみうりテレビ・大阪取引所・
住友商事(大阪市)
- 指導講師 各企業・機関の担当者
- テーマ等 各企業・機関による研修
- 目的 研修を通して、グローバルな企業活動や世界トップレベルの技術を目にし、より広い視野での職業観や高い目的意識を育成する。

(b) 実施計画

- 実施前： 4月 各企業への依頼 6月 生徒希望予備登録
 7月 受け入れ企業決定 夏休み レポート作成・質問内容検討
 9月 事前研修
- 実施後： 9月 レポート作成 10月 報告会の実施

(c) 実施概要

1年生320名が9つのコースに分かれて、県外の17の企業や機関を訪問し、研修を受けた。





(d) 実施結果

□生徒感想文（抜粋）

- ・今回の研修で、特に印象に残っているのはグローバル展開の考え方についてです。近年はいろいろなものが変化しており、その中で人のニーズや興味も変化していることを知りました。「十人十色という言葉があるけれど、一人がたくさんのものに興味を持ち始めて、一人で十色つまり十人百色になってきている」とおっしゃっているのをお聞きして、グローバル化していくこの時代にビジネスをしていくことの難しさをひしひしと感じました。（住友商事）
- ・質疑応答のコーナーでは、「世界との関係で気をつけていることは？」という質問に対して「それぞれの国の現在の株価、状況を意識しながら、対等に話すようにしている」と答えてもらい、色々な国の状況を常に知らなければいけないので大変だなと思いました。また、「この仕事に必要なこと」について「メールの問い合わせは英語がほとんどであり、英語力が必須」と聞いてこれから英語の勉強にもっと力を入れようと思いました。（大阪取引所）
- ・発展途上国内でも貧富の差があることや国際協力を行う理由、国や地域の特色を生かしたプロジェクト作りなどたくさんを知り学ぶことができました。また、実際にアイスブレイク活動を通して、世界の貧富の差を痛感することができました。そしてその差をなくすためには貧しい人々の援助だけでなく、裕福な人の意識改革なども必要であることがわかりました。また、「どうして日本が大変なときに、世界に目を向けなければならないのか」というお話を聞いて私なりに考えました。私は世界に目を向けることがひいては日本に目を向けること、日本を見つめ直すことにつながっていくからだと思います。（JICA関西）

(e) 検証と考察

□取組の成果について

国際社会の第一線で活躍している方のお話や、世界トップレベルの技術に触れることは、徳島ではなかなか経験できないことであり、生徒には大きな刺激となった。国際社会では今どのような人材が求められているのか、そのような人材となるためには今何をすべきなのか、日々の高校生活で何を学ぶべきなのか。改めて自分自身を見直すきっかけになり、国際社会の一員としての自覚が芽生えたように感じられる。

□次年度への改善点等

日程の調整や受け入れ人数の制限等の条件を考慮しながら、企業を選定するにはかなりの時間がかかる。さらに、できるだけ生徒のニーズに沿った企業を選定するとなるとますます困難である。今までのノウハウや企業とのつながりをうまくつないでいくことが大切だと感じた。

本年度についても企業研修報告会の時間を設定した。各コースの代表者の発表を、他コースに参加した生徒も興味深く聞きながら、熱心にメモをとっていた。

1. 3 グローバル育成メソッド I *in school*

1. 3. 1) 学校設定教科・科目

① 21世紀を生きる(公民科)

(a) 実施実績

- 実施対象 第1学年 人文社会コース26名
- 実施日時 平成29年4月～平成30年3月, 1単位
- 実施場所 徳島県立城東高等学校 校内(101HR教室・被服室・会議室)
- 指導講師 本校教諭(檜原・山本・紺谷)
大阪大学大学院国際公共政策研究科教員
比較公共政策対策講座 松繁 寿和 教授 松野 明久 教授
システム統合講座 中内 政貴 准教授
日本ファイナンシャルプランナーズ協会 大江 崇子 氏
- 目的 現代社会は急速なグローバル化のなかにある。また、核への脅威、人口減少、地球温暖化など、眼前に広がる問題を前にして、国際社会はもちろん、日本の政治、経済、法、文化など、現代社会を多様な角度から理解することが求められている。学校設定科目「21世紀に生きる」においては、これら現代社会の基本的課題について、知識のみならず、自ら課題を見だし周囲と協力して解決する力を育成する。さらに思考力・判断力・表現力を身に付け、21世紀に生きる公民としての資質を磨くことを目的とする。

(b) 実施計画

- ・通年 時事問題から21世紀の日本と世界を考える。1ヶ月ごとのニュース教材を読み、感想や問題点を各自がまとめて発表し、ホームルームで意見交換を行う。
- ・1学期 大阪大学大学院国際公共政策研究科比較公共政策対策講座 松繁 寿和 教授の講義『英語教育と日本の文化』と座談会(5月)
- ・2学期 大阪大学大学院国際公共政策研究科比較公共政策対策講座 松野 明久 教授の講義『インドネシア社会のダイナミズム』と座談会(11月)
日本ファイナンシャルプランナーズ協会 大江 崇子 氏による消費者教育講座(山本家庭科教諭とのチームティーチング)(11月)
- ・3学期 大阪大学大学院国際公共政策研究科システム統合講座 中内 政貴 准教授を交えてのポスターセッションと講座、座談会(2月)
(紺谷 101HR担任とのチームティーチング)

(c) 実施概要

- ・通年 徳島県内、国内政治、国内経済、国内の社会問題、国際関係の5分野にわたり、時事問題を学ぶ。また、最も興味を持ったニュースを挙げ、その感想や意見をホームルームで交換する。
- ・1学期 大阪大学大学院 松繁教授との座談会では、『「英語教育と日本の文化」』をテーマに生徒から活発な意見が出された。一例を挙げると、「韓国と中国と日本を比較すると、発言力の比が6:3:1であることに驚いた。韓国には独自性の強い文化があると同時に、グローバル化が進行していることを思うと、日本も頑張らなくてはいけないと思う」「赤ちゃんの頃から外国語教育、と先生が言われていたことが印象に残った。私もグローバル化の輪に入れるようにコミュニケーション能力を高めたい」といった内容である。また、松繁先生からは「言葉はあくまで道具。母国文化の衰退とは別問題」とのご指摘があり、生徒からも「母国文化の衰退=伝統文化を継承する職人さんが減少している現実問題と混同しているところがある」というレスポンスがあった。また、本校の卒業生でもある教育実習生2名(音楽・書道)を招き、芸術を学ぶことの楽しさを聞いたことも意義深か

った。

・ 2 学期

大阪大学大学院 松野教授との座談会の前には、インドネシアの地理や近年史、政治体制や経済状況について、生徒は調べ学習を行い講座に臨んだ。松野先生はインドネシアへの留学経験があり、東南アジア諸国の事情にも精通されている。なかでも、かつての開発独裁時代や現政権の状況についての講義は生徒の興味を引くものであった。インドネシアがヨーロッパ列強および日本の植民地であったという歴史は、生徒はもちろん知るところである。しかし、インドネシアの豊富な天然資源や特産の香辛料は、かつての支配国との共存共栄にもつながっていたことは、今回初めて知り得たことであった。また、日本ファイナンシャルプランナーズ協会の大江氏を講師にお招きしての講座では、大学生活で必要な経費についてお話を伺い、ライフプランを作成することの意義を学んだ。徳島県は現在、消費者庁移転に向けて取組を進めており、消費者問題は県民のホットワードのひとつであることから生徒の関心も高かった。

・ 3 学期

平和構築と民族間紛争、国際機構論をご専門にされている大阪大学大学院 中内准教授をお招きしての講座を行った。生徒は、「シリア・イラク」「コロンビア」「スーダン・南スーダン」「ナイジェリア」「イエメン」「ロヒンギャ族」「クルド人難民」の 7 グループに分かれてポスターセッションを行った。生徒は、自分たちが調べたことの要旨をいかに効果的に図示し、結果や考察をまとめるかということに難しさを感じたようであった。また、発表の仕方についても工夫を凝らしていた。しかし、全般的にインターネットの資料に頼る傾向があり、その点については継続して指導が必要になると感じた。中内先生からは、「紛争の解決方法として軍事力はどのような役割を果たすのか」ということを中心に講義をしていただき、トランプ米政権の動向を踏まえた国際情勢についても興味深いお話を伺った。

(d) 検証と考察

□取組の成果について

101HRは26人という少人数クラスであり、3年間クラス替えない。よって機動力に富み、「全員の顔が見られる」授業が展開できる。また活発な生徒が多く、校外から講師の先生をお招きしての座談会でも率先して質問や意見を発することができる。こういった環境に触発されて、夏休みに大阪大学で行われた「Future Global Leaders Camp」や、「エコノミクス甲子園徳島県大会」、愛媛県で開催された「第2回中四国SGH高校生会議」に参加する生徒も複数名出てきたことは成果のひとつであると考えられる。しかし、スマートフォンを日常的に使用していることからインターネットでの検索や資料に頼りすぎる傾向がある。ネット記事やデータは取り扱いについて十二分な注意が必要とは言わずもがなである。今後は、メディアリテラシーの必要性はもちろんのこと、日々の新聞記事、書籍等の紙の資料にも慣れ親しむことが望まれる。

□次年度への改善点等

1年間の学習をとおして、コミュニケーション能力の醸成には一定の成果があったと考えられる。しかしながら、少子高齢化、環境問題、消費者問題、平和主義と安全保障などの国内課題と、難民問題やグローバル社会、宗教紛争などの国際問題が、さらに地球規模の問題が相互に関連しあっていることを理解することは、限られた時間数からも難しいように感じられた。今後は、物事を「俯瞰してとらえる」ような視点を持たせていくことが重要である。また、21世紀に生きる公民として、幸福、正義、公正といった公共のテーマについて、自らが主体的に考え、問題解決に向けてどのように取り組むかという姿勢を、いかに育てていくかが課題として考えられる。

②Current English(外国語科)

(a) 実施実績

- 実施対象 第1学年 人文社会コース26名
- 実施日時 平成29年4月～平成30年3月, 1単位
- 実施場所 徳島県立城東高等学校 校内(101HR教室, 講義室A)
- 指導講師 本校教員(紺谷, 服部, Bradich, Bach)
- テーマ等
 - ・英字新聞や英語雑誌, インターネットなどの時事問題。
 - ・人口問題・環境問題・食糧問題・健康問題などの世界の諸問題。
- 目的
 - ・英字新聞や英語雑誌, インターネットなどを通じて得られる時事的な情報を読み取る能力と知識を育成する。
 - ・世界の諸問題について, 自分の考えや意見などを英語で発表する態度や文章で表現する力を育成する。

(b) 実施計画

- 実施後 生徒アンケート実施。

(c) 実施概要

原則としてALT1名, JTE1名, 生徒(14名/12名)の2クラス編成とする

- 1学期 コミュニケーションのとりかたや英語で自分の考えを表現する技法を学ぶ
 - ・対話に必要な基本的な要素を身に付け, Yes-no questions ではなく Open-ended questions を使って相手とコミュニケーションをとる方法を習得し, 対話の幅を広げる。
 - ・決められたテーマや, 学んだことについての感想や意見をグループやペアで話す。
 - ・自分の興味のあることについて Show & Tell 形式で発表する。
- 2学期 英語圏の様々な英語を知り, 環境問題について知る。
 - ・英語圏の様々な英語を聞き, 国によって, あるいは地方によって使われる英語が違うことを知る。
 - ・動物を取り巻く環境問題について考える。
 - ・英語圏の国から1つ選び, その文化や英語について調べ, クラスで発表する。
- 3学期 世界の抱える諸問題について知る。
 - ・貧困や紛争, 環境, 資源など地球規模の課題解決に向けて, 自分たちにできることを考える。ペアやグループで意見を交換し, 自分の意見を英語で書く。

(d) 実施結果(授業を通して)

- 生徒感想文(抜粋)
 - ・皆の発表を聞き, とても刺激を受けた。語彙力, 表現力をさらに身に付けるとともに発表の力(原稿を覚え, 聞き手を見て話す)もつけていきたい。
 - ・日本語では自分の意見をうまく伝えることができるのに, 英語で話すとなると容易ではなかった。自分の話す英語を聞き手が理解できるように伝えることの難しさ, 大切さを感じた。伝える努力をする必要があると思った。
 - ・英語で話す機会が多くあり, 人前で話すことへの抵抗はなくなった。2年生では準1級を取得したい。
 - ・他国の文化に触れることができ, 異文化理解の大切さを感じた。
 - ・日本にいても, 世界の時事問題に興味関心を持ち調べることが大事だと思った。
 - ・英語でコミュニケーションをとることの楽しさを学んだ。思っていることを伝えるのは難しいけれど, 伝わったときはとても嬉しい。

生徒アンケート（対象 人文社会コース26名）

Q. CEの授業はどうでしたか。

肯定的意見の割合（とても良かった・良かった） 100%

Q. CEの授業を通して、国際課題や社会課題に対する興味・関心が増しましたか。

肯定的意見の割合（増した・どちらかという増した）85%

Q. CEの授業を通して、異文化や外国語に対する興味・関心が増しましたか。

肯定的意見の割合（増した・どちらかという増した）92%

Q. CEの授業を終えて、あなたが特に必要だと感じたものを2つ選んでください。

英語の力 22名 社会問題に対する関心 1名 深い教養 1名

コミュニケーション力 19名 国際的素養 1名 積極性 6名

プレゼンテーション能力 2名

(e) 検証と考察

取組の成果について

26名の生徒を原則2クラスに分けて授業を行ったが、生徒のアンケート結果から全員がその授業形式を肯定的にとらえていた。また、「聞くこと・話すこと」「読むこと・書くこと」の視点からの授業形式生徒にとってはよかったようである。

日本の文化や習慣、課題だけでなく世界の諸問題に目を向けることで、自分たちは何ができるかを考える機会となり、その解決する姿勢がいかに大切であるかを感じ取っていた。ペアやグループで自分の意見を発表すること、プレゼンテーションをすることの難しさを知るとともに、何が不足していたのか、今後どうすべきかなど自分の目標を決めており、前向きな姿勢が見られる。

次年度への改善点等

プレゼンテーション後の感想の中に、「発表のテーマを決め、調べ学習を進める中で新しい発見があり、さらに深く学びたいという意欲がわき楽しかった」という生徒が複数名いた。各自が課題を見つけ、調べ、自分の考えや意見を伝える楽しさとともに、その難しさも体験し、よりよい発表にするために自分自身の課題に気付いている。「CE」を通して、各自が今後の目標を明確にすることで、来年度の「グローバルリーダー論Ⅰ」や課題研究につなげていくことができると期待する。

③Global Health (保健体育科)

(a) 実施実績

実施対象 1学年 全員

実施日時 平成29年4月～平成30年3月, 1単位

実施場所 徳島県立城東高等学校 校内 (各教室)

指導講師 本校教員 (望月, ほか保健体育科教員), 外部講師

テーマ等 グローバルな健康問題を考える

目的 世界の人々の健康と環境に関する諸課題に対する興味・関心を喚起し、グローバルな視点をもって学習に取り組むことにより、人類の健康と環境に貢献するグローバルリーダーの在り方を考える機会とする。

(b) 実施計画

1. 「社会生活と健康」

- ・人間の生活や産業活動と自然環境汚染についての地球規模での考察
- ・健康の保持増進と環境の関係, 環境と食品の関係, 保健労働と健康についての考察
- ・感染症について世界的視野からの考察
- ・人類の健康と環境に貢献する日本の役割についての考察

○上記のような、世界の人々に共通する健康課題に対する社会的な取組と、労働と健康につい

て学ぶと共に、世界の人々の健康を実現させるために、高校生として、その日から始められる取組について学習する。

2. 「生涯を通じる健康」

明るく豊かで充実した人生を送るためには、生涯のそれぞれの段階における健康の課題に適切に対処する必要がある。とくに思春期は、将来の社会生活での健康をつくるために大切な時期である。また、このような生涯の健康の課題に応じて、保健・医療活動がおこなわれているので、それらを学んで、適切に活用できるようにする。

(c) 実施概要

1. 「社会生活と健康」

- ・食品の安全を守るために、行政や企業がどのような役割を果たしているのかを知り、食品保健活動のしくみと取組について理解を深め、消費者の役割や食中毒の防止について学習した。
- ・職業生活を健康で豊かに送るためにどのような活動があるのかを知り、職場の安全管理や職場環境が健康に与える影響、職業病の予防対策、余暇の有効活用について学習した。

【9/22 (金) 1年生 34名がWHO神戸センターを訪問 (企業研修)】

- ・大気汚染・水質汚濁・土壌汚染などの原因とその健康影響について学習した。また、環境汚染の防止と改善、産業廃棄物の処理、さらにごみの処理、上下水道の整備、し尿の処理などの課題を実際に取り上げ、それらを調査・研究しながら私たちができることについて学習した。また、「グローバルな健康問題」についての調べ学習を、グループ毎に小テーマを決めて行い、ポスター発表を実施した。

【11/24 (金) 第1回グローバルヘルス講座「アジアの人々の飲み水と健康」を実施】

2. 「生涯を通じる健康」

- ・思春期特有の健康課題について理解を深め、性意識に関する正しい知識や性行動に関する責任ある意志決定ができるように学習した。
- ・妊娠・出産と健康、避妊法や人工妊娠中絶、さらには結婚と健康についての正しい知識を身に付け理解するとともに、家族計画の意義や実践について学習した。
- ・加齢にともなう心身の変化や中高年期の健康について保健・医療・福祉の連携から具体例を挙げて学習した。
- ・保健行政の役割としくみ、保健サービスの活用について学習した。さらに医療の供給や医療保障、医療費についても、それぞれの医療機関また、地域の保健・医療機関で適切な医療サービスの活用が実践できるように学習した。
- ・民間機関・国際機関などの活動や対策について学習した。

【2/19 (月) 第2回グローバルヘルス講座「地域の所得格差は健康を損なうか」を実施】

(d) 検証と考察

□取組の成果について

「社会生活と健康」の内容に重点を置き、環境と健康、食の安全、保健衛生活動についてグローバルな視点をもって学習活動に取り組んだ。関連機関を訪問しての学習や、外部講師を招いての特別講座、「グローバルな健康問題」についての調べ学習（ポスター発表）を実施することにより、世界の人々の健康と環境に関する諸課題に対する見識を深めることができた。

□次年度への改善点等

昨年度に引き続き、実施した外部講師によるグローバルヘルス講座は、グローバルな視点から専門性の高い話を聴かせていただき、非常に有用であった。実施形式については、本年度も講演会形式での実施となったので、次年度はアクティブラーニング形式で実施できるように検討していきたい。また、1学期に実施した「グローバルな健康問題」についての調べ学習（ポスター発表）と2学期に実施したグローバルヘルス講座の実施時期や順序について、さらに効果が上がるように検討していきたい

い。

④クエスト（1学年）

（a）実施実績

- 実施対象 第1学年 全員
- 実施日時 通年（9月：企業研修・1月：職業ガイダンス），1単位
- 実施場所 徳島県立城東高等学校 校内
- 指導講師 本校教員，外部講師
- テーマ等 自己を知る。世の中を知る。将来を考える。
- 目的
 - ・自己と自己を取り巻く社会を見つめ，卒業後の進路を主体的に選択できる力を身に付けさせる。
 - ・現在の社会問題に深い関心を持つとともに，将来のあるべき姿について真剣に考え，グローバルリーダーとして活躍する意欲と力を培う。

（b）実施計画

クエスト（総合的な学習の時間）の時間を使い，次のような計画で進めた。

- 4～5月 自己を知る（シンキングツールの活用）
- 6～7月 社会を知る①（SG講座）
- 8～9月 社会を知る②（企業研修）
- 10～11月 社会を知る③（各種講演）
- 12～1月 将来を考える①（職業ガイダンス）
- 2～3月 将来を考える②（課題研究に向けて）

（c）実施概要

「自己を知る」では各クラス単位，「企業研修」「職業ガイダンス」は興味・関心によって分けられたグループ単位，「SG講座」等は学年単位，それぞれの内容に合わせた形態で実施した。

- 4月20日 クエストの目標と年間計画
- 4月27日 自分を知ろう～マインドマップを使って
- 5月11日 グローバル化について考える～KJ法を使って
- 5月22日 SG講座 academic 講演「グローバル化する社会で高校生に求められる力とは？」
- 6月1日 グローバル化する社会で求められる力～フィッシュボーンを使って
- 6月8日 2年生による企業研修報告会
- 6月15日 企業研修グループ登録
- 6月22日 SG講座 professional 講演「大塚製薬のグローバル化」
- 6月29日 企業の社会的役割について考える～K-W-Lチャートを使って
- 7月19日 企業研修事前学習①～研究テーマの決定
- 8月31日 企業研修事前学習②～研究内容の共有
- 9月14日 企業研修事前学習③～質問内容の精査・係分担
- 9月21日 企業研修事前学習④～日程確認等直前指導
- 9月22日 企業研修
- 9月28日 企業研修実施報告書提出・職業ガイダンスグループ登録
- 10月5日 企業研修報告会
- 10月19日 SG講座 professional 講演「大塚の海外におけるCSR活動について」
- 10月25日 外務省「高校講座」
- 10月26日 職業ガイダンス事前学習①～事前研究内容の共有
- 11月10日 EUがあなたの学校にやってくる
- 11月16日 小論文ガイダンス

- 1 1月27日 SG講座 academic 講演「インドネシア～見果てぬ夢を追う～」
- 1 1月30日 職業ガイダンス事前学習②～講師の先生について知る
- 1 2月11日 職業ガイダンス事前学習③～調査内容の共有・質問内容の精査
- 1 2月14日 SG講座 professional 講演「日亜化学工業株式会社 海外勤務経験を聞く」
- 1 1月11日 職業ガイダンス事前学習④～冬休みの課題提出・係分担
- 1 1月18日 職業ガイダンス

(e) 検証と考察

取組の成果について

グループ活動をする中で、自分の考えを伝える力、仲間の意見を理解する力が身に付いた。また、仲間と協力して、シンキングツール等を活用しながら考えを深めることができた。

企業や職業についての調査・研究や様々な講演を通して、自己を取り巻く環境や現代社会が抱える問題についての興味関心を深め、課題解決への意欲が高まった。

次年度への改善点等

先に行事ありきの状態になってしまい、何のための行事や講演であるのかを生徒に理解させる時間の確保が難しかった。行事を精選して事前事後の指導だけでなく、それぞれの行事・講演の関連性について生徒に意識させることが重要である。

クエスト（2学年）

2 課題研究の実施 と同じ

クエスト（3学年）

(a) 実施実績

- 実施対象 第3学年 文理コース・数理コース
- 実施日時 通年，1単位
- 実施場所 徳島県立城東高等学校内
- 指導講師 本校教員
- テーマ等 現代的課題に向き合う。課題解決能力の育成。
- 目的 急速なグローバル化，情報化が進む社会の中で，現代的課題に向かう姿勢を育成する。環境・国際・主権者教育・生活といった個別的課題に取り組むことにより，現実の問題に対する論理的思考や表現の実践的な力を身に付ける。

(b) 実施計画

クエスト（総合的な学習の時間）の時間を使い，次のような計画で進めた。

- 4月～ 5月 志望理由書について
- 5月～ 9月 テーマ別学習1（小論文・ディスカッション）
- 10月～12月 テーマ別学習2（「現代を知る」ワークブック演習）

(c) 実施概要

すべての講座は，各クラス単位で行った。

- 4月14日 オリエンテーション（志望理由について）
- 5月11日 志望理由書について
- 5月25日 テーマ別学習1「環境について」①
- 6月 1日 テーマ別学習1「環境について」②

- 6月 8日 テーマ別学習1 「異文化理解について」①
- 6月15日 テーマ別学習1 「異文化理解について」②
- 6月29日 テーマ別学習1 「主権者教育について」
- 8月31日 テーマ別学習1 「生活（貧困問題）について」①
- 9月14日 テーマ別学習1 「生活（貧困問題）について」②
- 9月28日 テーマ別学習2 「現代を知るワークブック演習①」
- 10月 5日 テーマ別学習2 「現代を知るワークブック演習②」
- 10月19日 テーマ別学習2 「現代を知るワークブック演習③」
- 10月26日 テーマ別学習2 「現代を知るワークブック演習④」
- 11月 2日 テーマ別学習2 「現代を知るワークブック演習⑤」
- 11月 9日 テーマ別学習2 「現代を知るワークブック演習⑥」
- 11月16日 テーマ別学習2 「現代を知るワークブック演習⑦」
- 11月30日 テーマ別学習2 「現代を知るワークブック演習⑧」
- 12月21日 テーマ別学習2 「現代を知るワークブック演習⑨」

(e) 検証と考察

取組の成果について

現代的課題を、大学入試の過去問を用いて考察し、グループディスカッションや小論文演習を通して、表現力や考察を深めることができた。特に、ディスカッションでは、対立意見の立場を変えながら、お互いの意見を理解し、より深い議論に進めることができた。生徒は普段接触することが少ない諸課題について意欲的に取り組み、その後の小論文作成では、他者の意見を取り入れながら、自分の意見形成を行うことができた。

ワークブック演習では、現代的課題におけるキーワードや、そのポイントなどの知識を深めることができた。

次年度への改善点等

具体的な個別テーマの選定や、そのワークシート作りが授業の大きなポイントとなるため、複数の教員で連携をとりながら、独善的な課題設定にならないように注意する。また、生徒の思考をどのように深めていくかを具体的にプランニングすることが重要である。

⑤グローバルリーダー論 I

(a) 実施実績

- 実施対象 第2学年 人文社会コース37名
- 実施時期 平成29年4月～平成30年3月, 2単位
- 実施場所 徳島県立城東高等学校 校内(201HR)
- 指導講師 本校教員, 外部講師
- 目的
 - ・国際的な社会問題に取り組む意欲・関心を深める。
 - ・日本・徳島の伝統や文化について知る。
 - ・英語で分かりやすくまとめたり発表したりする能力を身に付ける。
 - ・トピックについて英語で意見を述べたり, 議論ができる基礎的な知識を身に付ける。
 - ・外国語や外国の文化に関する興味・関心を深める。

(b) 実施計画

週時程2時間のうち、知識技能を高める時間を1時間、課題研究にむけての時間を1時間として展開する。

シラバス

- (1) 知識・技能を高める時間

- ①「日本・徳島を紹介しよう」
- ②「英語でプレゼンテーションをしよう」
- ③「英語でディベートをしよう」
- ④「英語論文の書き方・英語プレゼンテーションの仕方」
- ⑤「英語で論文を書こう」

(2) 課題研究にむけての時間

- ① 課題研究の進め方
- ② 課題研究及び発表
- ③ 研究紀要『叡智の扉』用論文作成

□実施後：プレゼンテーションやディベート，レポートなどについて評価する。

(c) 実施概要

生徒の実情及び実施時数にあわせて，年間計画とは多少内容・順番を変えて行った。

(1) 知識・技能を高める時間

- ①「日本・徳島を紹介しよう」②「英語でプレゼンテーションをしよう」
(ペア活動：クラスメイトたちに日本・徳島の観光地や名産品について英語によるプレゼンテーション)
- ③「英語でディベートをしよう」
(講義及びグループ：6人ほどのグループに分かれ，グループ内でディベートを実施
テーマは「Japan should stop using cash.」，「Social Media makes the world better.」，
「We should stop eating meat.」の3つ)
- ④「英語論文の書き方・英語プレゼンテーションの仕方」
(講義：徳島大学総合科学部 田久保 浩先生から英語による研究発表の仕方を学ぶ)
- ⑤「英語で論文を書こう」
(グループまたは個人：課題研究で完成した日本語論文をALTのサポートで英語論文にする)

(2) 課題研究にむけての時間

- ① 課題研究の進め方
 - ・ マインドマップの作成
 - ・ 徳島大学の教授による講演・論文作成指導など
- ② 課題研究及び発表
 - ・ 研究グループ及びテーマ決定
 - ・ 研究
 - ・ 中間発表（ポスターセッション）
 - ・ グループ内発表会（プレゼンテーション）
- ③ 研究紀要『叡智の扉』用論文作成
 - ・ 代表班に選ばれたグループは1・2年生の前でプレゼンテーション発表
 - ・ 全研究グループによる論文作成

(d) 実施結果

プレゼンテーションは，クラス内で無作為にペアを作り，2人でテーマを自由に設定して行った。生徒たちが選んだテーマは，渦潮や眉山，剣山などの観光地，竹ちくわ，徳島ラーメンなど徳島の名産品，さらには地元企業の大塚製薬株式会社や伝統文化である人形浄瑠璃，美波町のウミガメやLED，すだちくんや阿波弁などについて，多岐にわたる様々なトピックについてプレゼンテーションをすることができた。

ディベートはクラスを6人×6チームに分け，3つのトピック，「日本は現金をやめるべきか」，「SNSが世界を良くしているか」，「ベジタリアンになるべきか」を選んだところ，「健康」「環

境」「文化」「経済」などの視点を含むグローバルな議論を展開することができた。ディベートを行う際の準備の大切さ、即興のやりとりの難しさについて学ぶことができただけでなく、聞き手にジャッジをさせることで、論理的に思考・判断をする機会を作ることができた。

課題研究に関してもグループで協力しながら、アンケートをとる、外部機関にインタビューに出かけるなど、積極的に働きかけることができた。

(e) 検証と考察

□取組と成果について

今年度は、昨年のように外国からの高校生の来校がなく、英語で交流するという目標がなかったことから、生徒のモチベーションを不安視していた。しかし、特にプレゼンテーションに関しては昨年度で慣れてきたためか、生徒たちは前向きに準備と練習をすることで、プレゼンテーションやディスカッション・ディベートにもすぐに慣れ、意欲的に取り組み、英語による発信力を向上させることができた。

また、地元の徳島大学の先生の援助を得て、英語による論文作成やプレゼンの基本、英語における論理の展開を学ぶことができたおかげで、その後の英語論文作成の指導がしやすくなった。外部講師に来ていただいたことは、生徒だけでなく教員にとっても得るところが多かった。

□次年度への改善点等

ディベートは、チーム対抗で盛り上がる上、一人一人の役割ややるべき事ははっきりして取り組みやすく、英語による発信力を高めるのに有効である。また、物事を両面から捉え、論理的に考える力を伸ばすことができ、「コミュニケーション英語」や「英語表現」の授業にも導入したいと思う。もっと早い時期から準備時間をかけずに行う、マイクロディベートなどを導入してもよいと思う。

次年度も引き続き、外部講師の援助を積極的に利用することで、教師も指導力を改善していきたい。

⑥グローバルリーダー論Ⅱ

(a) 実施実績

- 実施対象 第3学年 人文社会コース39名
- 実施日時 平成29年4月～平成30年1月、1単位
- 実施場所 徳島県立城東高等学校 校内(306HR・多目的教室2)
- 指導講師 英語科教員・ALT
- テーマ等 研究の紹介(プレゼンテーション・サマリー)をする
- 目的
 - ・課題研究を英語でプレゼンテーションしたり、英語のサマリーを作成したりするための手法を学ぶ。
 - ・効果的なプレゼンテーションやわかりやすいサマリーを作成するために必要なスキルや態度を学ぶ。
 - ・プレゼンテーションやサマリーを作成しながら、新たな視点で課題研究を振り返る。

(b) 実施計画

- 実施前：オリエンテーション、グループ分け
- 実施後：感想アンケート

(c) 実施概要

- (1) 2年次に徳島大学の田久保教授から教わった英語の論文やサマリーの書き方と効果的なプレゼンテーションの仕方について復習をする。
- (2) 班ごとに全体の流れ(序論・本論・結論)をどのようにするかを話し合う。

- (3)プレゼンテーション班（4班）もサマリー班（15班）も、タブレットを使って原稿やパワーポイントのスライドを作成する。2名のALTから英語の正確さと構成面からのアドバイスを受け、よりわかりやすい内容になるよう工夫する。
- (4)他のSGH校の英語によるプレゼンテーションをビデオ視聴し、スキルや態度を学ぶ。また、*Speaking of Speech Level 2* (2015, Charles LeBeau) のDVDを視聴し、効果的なグループ・プレゼンテーションや質疑応答の仕方についても学ぶ。
- (5)プレゼンテーション班は、クラス内で発表し、質疑応答を行う。クラスメートからコメントをもらい、改善点を話し合う（3回）。
- (6)SGH発表会で、プレゼンテーションをする。サマリーは冊子にして出席者に配布する。
- (7)発表会終了後は、さらにデータ分析をするとともに、わかりやすい英文の書き方について学習する。

(d) 実施結果

生徒の感想によると、学んだこととして「英語の論文作成のしかた」「英語で考える視点」「日本語の意味合いを自然な英語で伝える力」「英語でのスライドの作り方」「大勢の前で発表し質疑応答する力」などがあげられている。また、よかった点として「長期間一つの課題に取り組み、深まったこと」「先生やクラスメートと議論し合えたこと」「クラス全体として成果を挙げられたこと」などがあげられている。

(e) 検証と考察

□取組の成果について

毎時間、班ごとに個別に2名のALTから直接指導を受けることになり、生徒にとってライティングのみならずスピーキングのよい機会となった。

サマリー班は、英文要約のスキルを学習しながら、研究を論理的に再考察することができ、結論が変わった班もあった。

プレゼンテーション班は、プレゼンテーションだけでなく質疑応答のスキルと態度を学ぶことができた。また、改めて論理的に構成し直すこと、ALTに説明すること、また「AI」や「外国人労働者問題」など時々刻々と状況が変化するトピックを扱っていることなどから研究を再考察する結果となり、結論が変わった班もあった。他校の取組を撮影したビデオやDVDの視聴は、目標を明確にするのに効果的であった。クラスでのプレゼンテーションも3回実施することで最終的にすべてのグループが原稿をすべて暗記し、予想される質疑に対する応答まで準備することができた。クラスメートも聴衆として、積極的に質疑に参加し、英語で質問することができた。

□次年度への改善点等

班員が一人しかいないグループは、相談したり、役割分担したりする仲間がいないため、苦勞をしていた。課題研究を始める際に、英語で論文作成することを見越して班編成をする方がよい。

1. 3. 2) 講演等

①第1回 Global Health 講座（講演会）

(a) 実施実績

- 実施対象 第1学年 全員
- 実施日時 平成29年11月24日（金）13:20～15:10
- 実施場所 徳島県立城東高等学校 多目的ホール
- 指導講師 徳島文理大学 薬学部教授 姫野 誠一郎 氏
- テーマ等 アジアの人々の飲み水と健康
- 目的 グローバルな視点から人類の健康と環境について考える。

(b) 実施計画

- 実施前：グローバルヘルスの授業で「グローバルな健康問題」について調べ学習を実施する。
- 実施後：講演内容をまとめ、感想を書いて提出する。生徒アンケート実施。

(c) 実施概要

「グローバルヘルス（保健体育科）」の授業の一環として、昨年に引き続き徳島文理大学薬学部の姫野誠一郎教授を迎え、講演会を行った。

テーマは「アジアの人々の飲み水と健康」とし、アジアの飲み水のヒ素汚染問題を中心にお話を伺った。このヒ素汚染問題は、WHOも「世界の最も重要な環境問題」と言及するほど、世界的に大きな課題となっている。講演では、発生経緯や現状、この問題に取り組む姫野教授が、実際に現地で撮影した動画や写真を通じて、今現在行われている調査や対策などについてお話いただいた。単なる健康・環境問題のみならず、海外ボランティアの問題や、現地の人に危険を理解してもらう難しさなどにも触れられた。

また、ヒ素は毒にも薬にもなり（薬毒同源）、白血病の薬に含まれているというお話から、何をするにも先入観を持たずに柔軟な思考力を持たなければならないと語られた。

質疑応答では、水の洗浄剤は、人体にどのような害があるのか、地下水にはヒ素の他にどのような毒物が含まれているのか、など多数の質問が出た。



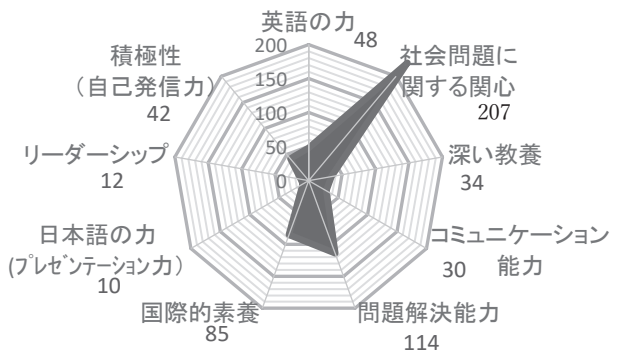
(d) 実施結果

□生徒アンケート（平成29年11月実施 対象：1年生出席者311名）

Q. 今回の講座で、国際課題や社会問題に対する興味・関心が増しましたか。

肯定的意見の割合（増した+どちらかという増した）
94.2%

Q. 今回の講座で、あなたが特に必要だと感じたものを2つ選んでください。



Q. 今回の講座で、異文化や外国語に対する興味・関心が増しましたか。

肯定的意見の割合（増した+どちらかという増した）
92.0%

□生徒感想文（抜粋）

- ・「自分が良いこととやってやっていることは、本当に良いことなのだろうか」今日の講演で何度も姫野先生がおっしゃっていたこの言葉がとても心に残り、様々なことを考える良いきっかけとなりました。良いと思って掘った井戸もヒ素が含まれる悪魔の水だった。フィルターを設置しただけで満足して放置など、一見良いことをしたように思われることでも本当に相手のためになっているのか、考えてから行動することの大切さを改めて感じました。普段何気なく使っているきれいな水を、簡単に得ることができない国がたくさんあるという悲しい現実を解消することが、これからの社会の課題であると思いました。今日、見せていただいたヒ素による皮膚がんや切り傷の痛々しい写真はとても印象深く、環境問題を他人事として考えるはいけなないと思いました。
- ・ヒ素には免疫力を低下させたり発がんの作用がある一方で、白血病を治す効果もあります。私たちが今、悪いイメージを持っている物質も、上手く活用すれば何かの病気を治す効果があるのではないかと希望を持ちました。
- ・水は生きていくために絶対不可欠なものです。しかし、そんな大切なものがバングラデシュやカンボジアの人々にとっては毒なのだということを知り、私たちがいかに恵まれた環境の中で暮らして

いるかがわかりました。

- ・今、私たちが直面している問題として、最も重大なのは地球温暖化だと思っていたけれど、アジアのヒ素問題だということに衝撃を受けました。この問題解決のために私たちができることは、高度で難しい技術を提供することではなく、彼らと寄り添い、使いやすいものや、生活の手段を提供することであると知りました。

(e) 検証と考察

□取組の成果について

「世界の最も重要な環境問題」と位置づけられているアジアの人々の飲み水のヒ素汚染問題について、実際に現地で撮影した動画や写真を目の当たりにすることにより、身近で深刻な問題であると捉えるとともに、国際的な健康問題への認識を新たにすることができた。さらには、健康問題のみならず、海外ボランティアのあり方についても多くの示唆が与えられ、環境問題への関わり方や、自分たちができる支援についても、多くのことを考えさせられた。また、ヒ素のがん治療薬としての有用性について等、「薬毒同源」という考え方を聞き、薬学についての興味・関心が高まったという感想も多く見られた。

□次年度への改善点等

本年度の講座についても昨年度と同様に1学年320名一斉参加の講演会形式での実施となったので、次年度は、実施時期や場所についてさらに検討を加え、アクティブラーニング形式での実施とすることができるようにしたい。

第2回 Global Health 講座（講演会）

(a) 実施実績

- 実施対象 第1学年 全員
- 実施日時 平成30年2月19日（月）13：20～15：10
- 実施場所 徳島県立城東高等学校 多目的ホール
- 指導講師 徳島大学 総合科学部教授 豊田 哲也 氏
- テーマ等 地域の所得格差は健康を損なうか
- 目的 健康が生物的条件だけでなく、社会的環境によって影響されるという観点からグローバルな健康問題を考える。

(b) 実施計画

- 実施前：グローバルヘルスの授業で「所得格差と健康」の関連性を考えさせる。
- 実施後：講演内容をまとめ、感想を書いて提出する。生徒アンケート実施。

(c) 実施概要

「グローバルヘルス（保健体育科）」の授業の一環として、昨年に引き続き徳島大学総合科学部 豊田 哲也 教授を迎え、「地域の所得格差は健康を損なうか」というテーマで講演会を行った。

TED Talks の動画（Richard Wilkinson 氏による"How Economic Inequality Harms Societies"）視聴や講師自身の研究の紹介を通して、所得格差という観点から、社会環境がもたらす健康への影響について説明いただいた。

地域間を比較し、豊かな社会ほど健康であるとする「絶対所得効果」と、地域内の経済格差が大きな社会ほど不健康であるとする「相対所得仮説」の2つの視点から統計資料をもとにした分析が紹介された。

(d) 実施結果

□生徒アンケート (平成30年2月実施 対象：1年生出席者307名)

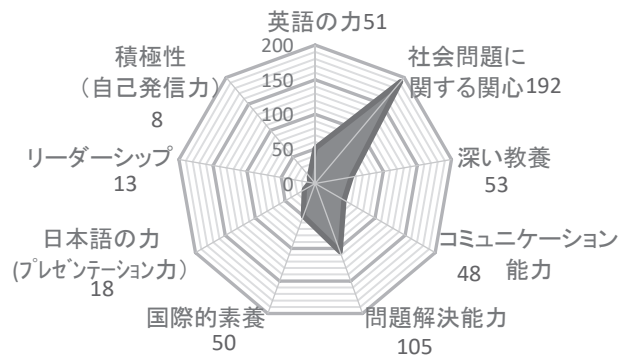
Q. 今回の講座で、国際課題や社会問題に対する興味・関心が増しましたか。

肯定的意見の割合 (増した+どちらかという増した)
72.3%

Q. 今回の講座で、異文化や外国語に対する興味・関心が増しましたか。

肯定的意見の割合 (増した+どちらかという増した)
70.4%

Q. 今回の講座で、あなたが特に必要だと感じたものを2つ選んでください。



□生徒感想文 (抜粋)

- ・私は、今までは健康問題について考えるとき、肉体面や精神面の原因しか考えていませんでした。しかし、今回のお話から経済的な側面の「所得」に注目することで、社会の様々な要素が結びついていると分かりました。特に驚いたのは、犯罪率などの社会関係、中退率などの人的資本との因果関係です。私たち高校生にできることは、所得に関係なく心理面、肉体面で健康を促進することだと思います。地域全体・社会ぐるみでの政策の必要性も感じさせられました。
- ・今回の講演で最も印象的だったことは、アメリカの富裕層はスウェーデンの貧困層よりも乳児死亡率が高いということと、地域間格差と平均寿命のグラフデータより、男性は所得格差による健康被害が大きくなっているが、女性に関しては相関関係がなかったということです。この講演を聞いて、女性にはなぜ女性は相関関係がないかということ进行研究したいと思いました。社会について考えるよい機会となりました。
- ・他国間の所得格差による健康被害や社会問題についてはあまり影響していませんが、国内での所得格差について見たときに、すごく影響していたことに驚きました。日本は世界で見ると現状はいい感じですが、国内で見るとやはり格差はあって、そういった問題について考えていかなければいけないなと思いました。「人は一人では生きていけない」この言葉を忘れず、皆と協力しながら生きていきたいです。
- ・所得格差が大きくなればなるほど、様々な理由から人々は不健康になり、平均寿命が短くなるなど、たくさんの悪影響を及ぼすということが分かりました。このことから、自分だけが良ければそれでいいという利己的な考えではなく、地域をこえて皆がよりよくなるような、グローバル化の現代だからこそできる考え方をしていきたいです。
- ・社会格差が小さいほど健康格差が小さいということは驚きでした。今まで社会格差と健康格差について関係性があるとは思っていませんでした。これからは、あらゆる視点で物事をみていきたいと思います。



(e) 検証と考察

□取組の成果について

今回で3回目となる本講座は、所得格差という社会的環境が健康にどのような影響を及ぼすかという、今年を受講生徒にとってとても斬新なテーマであった。最初は、所得水準が高い集団ほどより健康で、所得水準が低い集団ではより多くの健康問題を抱えているといった間違った先入観を持ちがちであったが、現実には、それぞれの地域における所得格差の存在こそが様々な健康問題の原因になっているということがわかった。このように、社会生活において私たちは間違った先入観を持って物事を理解している場合も多いことに気付くとともに、グローバルな健康問題を考える上でも、間違った先入観を払拭して物事を考えることの大切さを学ぶことができた。また、物事を違った視点から考えることの重要性や楽しさ

を再認識できたことは、今後の学習活動に大きな収穫となった。

□次年度への改善点等

本年度は3学期での実施となったが、1学期に行ったポスター発表、2学期に「アジアの人々の飲み水と健康」というテーマで実施した。第1回グローバルヘルス講座の実施時期や実施順について、グローバルな健康問題についての興味関心をより高めることができるように検討していきたい。

②職業ガイダンス

(a) 実施実績

- 実施対象 第1学年 全員
- 実施日時 平成30年1月18日(木) 13:35~16:10
- 実施場所 本校各教室, 新聞放送会館
- 指導講師 徳島県立近代美術館学芸調査課 吉原 美恵子 氏
株式会社あわわ 山本 正代 氏
徳島新聞編集局NIE推進室 井上 雅史 氏
四国放送総務部 井上 彰夫 氏
日本貿易振興機構徳島貿易情報センター 佐川 将平 氏
徳島大学大学院医歯薬学研究部 増矢 幸子 氏
うずしお法律事務所 瀧 誠司 氏
徳島地方家庭裁判所総務課 藤本 文子 氏
阿波銀行経営統括部経営品質推進課 本庄 宙 氏
株式会社あわわ 岩佐 乃介 氏
徳島県教育委員会教育文化課 三井 敏之 氏
サムライスタビリティ 稲垣 宗員 氏
QOL+ 南部 真也 氏
博愛記念病院 藤川 和也 氏
博愛記念病院 竹内 永子 氏
博愛記念病院 久米 美弥子 氏
大塚製薬株式会社 中村 和也 氏
徳島大学大学院社会産業理工学研究部 安野 卓 氏
日本システム開発株式会社管理部 白川 孝枝 氏
野口建築事務所 野口 路万 氏
野口建築事務所 野口 麗音 氏
徳島大学生物資源産業学部 辻 明彦 氏



- テーマ等 各グループの内容
- 目的 ・自らの進路や生き方を考える機会を持たせ、職業間の育成を図る。
・様々な分野において求められる能力や適性について認識を深める。

(b) 実施計画

- 事前学習 9月 ・希望に基づき分野別にグループ登録
10月 ・レポート①②希望する職業分野について調べる
11月 ・講師依頼・講師決定
・レポート③各グループの講師の職業について調べる
12月 ・レポート④質問内容をまとめる・理想の職業人について考える
1月 ・生徒役割分担
- 事後学習 1月 ・レポート⑤⑥講義要約・学んだこと・感想

(c) 実施概要

1年生320名が、文化／社会・マスメディア／国際／法律／経済／教育／福祉・健康／医学・歯学／看護／薬学／技術／建設・自然・環境のグループに分かれ、各グループ1～3名の講師から講演を聴いた。



(d) 実施結果

□生徒感想文（抜粋）

- ・自分の力で仕事をし、目標に向かうのが大切だと思っていたが、人の協力も大切であり、たくさんの人が支援や援助をしてくれることを大切にすることを忘れないようにしたいと思った。
- ・「成功の3倍は失敗した」という言葉が印象に残っている。成功ばかりにとらわれがちだが、失敗にこそ成功へのヒントがあり、トライしていくことが大切だと教えられた気がした。
- ・「人間力」は人間がAIに負けることのない最大の武器であると思う。将来、自信を持って「人間力」が自分の最大の武器であると誇れるように、日頃からいろいろなことに積極的に挑戦して、たくさんの経験を積みたい。
- ・ヒューマンスキルや教養など、学校の学習だけでは身に付かないことも必要だと言うことを知り、社会性を身に付けることも意識して生活しようと思った。
- ・「弁護士の魅力は、仕事の深みが人生経験にも比例するところだ」という言葉が印象に残っている。勉強も大切だが、勉強も含めて様々なことを経験していきたいと思った。
- ・徳島は大きな企業も多く、都市に近いので、徳島で就職して地域を元気づける様な人がもっと増えてほしいし、自分も社会に貢献できる人になりたいと思った。
- ・今、社会でどんな人材が求められているかがよく分かり、自分はどうしたらよいか考えるきっかけとなった。

(e) 検証と考察

□取組の成果について

各分野において活躍されている方々を講師としてお招きしたことで、実際の経験に基づく貴重なお話を聞くことができた。生徒の感想からは、「相手の求めていることを理解することが大切」「世の中の出来事に対する関心を深めていきたい」「熱意や好奇心、オープンマインドが大切」「やりたいことにチャレンジし、感謝の気持ちを持って生活したい」など、社会で働く意義や心構えを学び取ったことがうかがえた。

講師の方々からは、「意欲的に参加してくれ、楽しく講義を進めることができた」「メモをしっかりとってくれ感動した」「講師紹介、司会進行、お礼の言葉を生徒が担当してくれ、一人ひとりがしっかりしていると感じた」「笑顔で挨拶してくれて気持ちがよかった」などのお褒めの言葉をいただいた。

□次年度への改善点等

全ての会場で、プロジェクター・スクリーンを使用した講演となった。幸い必要な数の会場と機器を確保できたが、2年生の課題研究の発表練習との兼ね合いなど、不足することも考えられる。また、学校のパソコンを使用した場合には、バージョンの違い等による不具合、パソコンを持参された場合には、学校のプロジェクターとの接続がうまくいかないといったことが起こりうる。そのため、講師の先生のご都合に合わせる必要があるが、パソコンとプロジェクターのケーブルの両方を持参してもらうのが一番いいように感じた。

グループの編成に関しても、生徒の希望を尊重しようとした結果、グループ数が増え、ほとんどのグループで教員1人体制になってしまい、複数の講師に来ていただくことなどを考えると、負担が大きかったようだ。また、複数の講師に来ていただいた場合、待ち時間ができてしまう点に関しても、考える必要があると思う。

③模擬授業「英語コミュニケーション論」

(a) 実施実績

- 実施対象 第1・2学年 人文社会コース63名
- 実施日時 平成30年2月23日(金) 13:20~14:10
- 実施場所 徳島県立城東高等学校 多目的教室1
- 指導講師 津田塾大学学芸学部英文学科 教授 青沼 智 氏
- テーマ等 **Communication as civic responsibility:
Forensics as leadership education in the United States**
- 目 的
 - ・アメリカにおける Forensics の重要性を知ること、授業等で取り組んでいるスピーチやディベートが将来どのように役に立つかを認識する。
 - ・リーダーシップとは何であるかを考える機会とする。

(b) 実施計画

- 実施前：講師と内容について打ち合わせをする。
- 実施後：感想を提出。

(c) 実施概要

- ・講師自身の留学体験や映画を通じて、アメリカにおけるスピーチやディベートの重要性を学ぶ。
- ・ディベートをする上で何が重要であるかを知る。
- ・さまざまな場面でリーダーシップを発揮するために、なぜスピーチやディベートができる力が必要であるかを考える。
- ・講義終了後、質疑応答をする。

(d) 実施結果

- 生徒感想文(抜粋)
 - ・ディベートをすることは将来リーダーとなっていく人間には自分の意見を主張し、周りを巻き込むという点で必要不可欠なものであるということを知った。また、日本ではアメリカほどディベートが身近でないで、自らそのチャンスを探し、挑んでいくことが大切であると実感した。刺激と学びの多い有意義な時間だった。
 - ・ディベート力はこれから生きていく上でもとても大切な力なのだと分かりました。映像で紹介されていたように、ディベートには準備が大切になってくるので、しっかりと準備をしてディベートに臨み、互いにディベート力を伸ばせるようにしていきたいと思いました。

(e) 検証と考察

- 取組の成果について
これまで知らなかった Forensics について学ぶことができ、さらに、グローバルリーダーになるために必要な資質について考えることもできた。
- 次年度への改善点等
さまざまな大学が実施している出張講義の中から、本校のSGH目標に合うものを選び、効果的に実施したい。

④講義「青年海外協力隊」

(a) 実施実績

- 実施対象 第1学年 人文社会コース26名
- 実施日時 平成29年12月15日(金) 14:35~15:25
- 実施場所 徳島県立城東高等学校 図書館

- 指導講師 本校司書 奈木
- テーマ等 青年海外協力隊・発展途上国
- 目 的
 - ・青年海外協力隊について知る。
 - ・発展途上国の実状を理解する。

(b) 実施計画

- 実施前：本校司書と内容について打ち合わせをする。
- 実施後：生徒から感想を聴取する。

(c) 実施概要

- ・青年海外協力隊になるための条件や事前の研修内容についての説明
- ・グアテマラでの語学研修についての説明
- ・ドミニカ共和国での仕事や生活の様子についての説明

(d) 実施結果

- 生徒の感想（抜粋）
 - ・青年海外協力隊についての本を読み、インターネットで調べていたが、実際に経験した方の話を聞くことによってリアリティーが伝わり、将来参加したいという気持ちが強くなった。
 - ・青年海外協力隊になるための条件があることや、様々な研修を受けた後派遣されることを初めて知りました。発展途上国の人たちの役にたつことができる職業は、やりがいや達成感を感じると思うので、将来目指したいです。
 - ・ドミニカ共和国の人々はおしゃべりをして働かないことや、職場ではメレンゲという曲がかかっている、仕事中でも踊り出すことや、ピストルを使用することなど、実際に現地に行かなければわからないような話を聞くことができおもしろかったです。

(e) 検証と考察

- 取組の成果について

青年海外協力隊になるための条件や派遣前の研修内容、また現地と日本の違いを学ぶことができ、生徒たちの興味・関心が深まった。
- 次年度への改善点等

青年海外協力隊について事前学習をし、自分が参加するならどの分野で参加したいかを考えてから講演を受けるとより理解が深まると思う。

⑤講義・ポスターセッション「不寛容時代の民主主義」

(a) 実施実績

- 実施対象 第1学年 人文社会コース26名
- 実施日時 平成30年2月9日（金）（ポスターセッション） 13：20～14：10
 （講義） 14：20～15：30
- 実施場所 徳島県立城東高等学校 会議室
- 指導講師 大阪大学大学院 国際公共政策研究科准教授 中内 政貴 氏
- テーマ等 難民・避難民問題から見るグローバル化
- 目 的
 - ・グローバル化する世界について理解する。
 - ・難民・避難民問題から見えてくる世界の動向を把握する。

(b) 実施計画

□実施前：ポスターセッションの準備

□実施後：講演内容をまとめ、感想を書いて提出する。生徒アンケート実施。

(c) 実施概要

第1学年人文社会コース26名の生徒を対象とし、大阪大学大学院国際公共政策研究科准教授で、国際政治学や平和構築論をご専門とされている中内政貴先生を招き、ポスターセッションと講義を行った。前半のミニポスターセッションでは、共通テーマを「難民問題」とし、7つの班に分かれ、調べ学習に基づく5分程度の発表をした。

各グループのテーマは以下の通りである。

- 1班 「国をもたない民族, クルド人」
- 2班 「イエメンの未来」
- 3班 「今もなお続く内戦」
- 4班 「スーダン・南スーダンの今」
- 5班 「知られざるコロンビアの今」
- 6班 「ロヒンギャの今」
- 7班 「知っていますか, ナイジェリアの現状を」

その後、中内先生を囲んでのティータイムをはさみ、後半は中内先生による講義を受けた。難民・難民問題の解決方法と難民・難民問題の受け入れの民主主義という二つのテーマについて、非常に具体的で詳しい説明をしていただいた。講義を聴くだけでなく、「難民・避難民問題は国際社会が武力介入することで解決できると思いますか」「日本はもっと難民を受け入れるべきだと思いますか。もしそうなら、どのぐらいの規模で受け入れるべきでしょうか」「衆議院選挙で年間1万人の難民受け入れを訴える党の候補と、難民や移民の排除を訴える党の候補がいる場合、どちらを支持しますか」という問いかけに対し、各生徒が正解のない問題に対して必死に考え、自分なりの考えをグループで述べていた。今回の講座により、難民問題だけでなく、解決困難な数多くの社会問題に対する意識も高まったように思われる。

(d) 実施結果

□生徒アンケート (平成30年2月実施 対象：101HR26名)

Q. 今回の講座で、国際課題や社会問題に対する興味・関心が増しましたか。

肯定的意見の割合 (増した+どちらかという増した)
85.2%

Q. 今回の講座で、異文化や外国語に対する興味・関心が増しましたか。

肯定的意見の割合 (増した+どちらかという増した)
77.8%



□生徒感想文 (抜粋)

- ・私たちは近年あらゆる物事に対してますます「不寛容」になってきているように感じています。今回研究して発表した、世界の難民問題についても同じように思います。調べてみてわかったことですが、世界の国々は、難民に対して実に様々な対応をとっています。ヨーロッパでは、難民が流入してくる頻度が高いので難民問題に真摯に取り組んでいますが、日本では難民自体、なじみがないので、どうしてもそれについて考える機会がありません。今回、難民問題について深く考えることができ、とても貴重な時間であったと思います。
- ・講義を聴く前に、自分たちで調べ学習をし、自分たちなりに「難民の人たちのために自分たちができることは何か」を考えていましたが、講義を受け、理解と考えを深めることができたと思います。

最後に日本の難民受け入れについて考えましたが、何人が受け入れるのに妥当な数であるかなど細かいところまで考えることができ、良い機会になりました。今回教えていただいたことや考えたこと、感じたことを忘れず、紛争・難民問題を他人事として捉えず、自分たちの問題として考えていきたいです。本当にありがとうございました。

(e) 検証と考察

□取組の成果について

難民や国内避難民について、国際的に大きな問題となっているが、自分たちからは遠い世界で起きていると感じている生徒も多い。そのような生徒にとって、今回の取組は、自分たちで調べたことを発表した後、専門的に研究されている中内先生の講義を受けることで、より理解が深まり、また調べ学習の際、感じた疑問点を質問することのできる、よい機会であったと思われる。グローバル化が進む社会で直面する問題に対し、どのように対処すべきであるのか、その姿勢を学ぶことができる取組であった。

□次年度への改善点等

生徒自身が実践的に取り組むことができるような意識付けを行うことの重要性を再認識し、さらに意識付けたものを流れのなかで育てていくことが大切であると考えます。

⑥セミナー Overseas Experience and Career Development

(a) 実施実績

- 実施対象 第1・2学年 外語部員・希望者15名
- 実施日時 平成29年5月29日(月) 15:20~16:20
- 実施場所 徳島県立城東高等学校 204HR教室
- 指導講師 徳島大学国際センター特任助教 福岡 佑子 氏
- テーマ等 海外留学・日本語教師
- 目的
 - ・海外留学がどのように自身の生き方に影響するかを知る。
 - ・日本語教師という仕事について知る。
 - ・英語の講義を聴き、英語学習への意欲を高める。

(b) 実施計画

- 実施前：講師と内容について打ち合わせをする。
- 実施後：生徒から感想を聴取する。

(c) 実施概要

- ・講師から、海外留学や日本語教師として働いた中国での体験談を聴く。
- ・講義終了後、質疑応答をする。

(d) 実施結果

□生徒感想文(抜粋)

- ・将来は日本で働きたいと考えていますが、今日話を聞いて、海外で自分の可能性を広げられるような経験がしたいと強く思いました。
- ・「留学すればその国の言語が話せる」と思っていたが、決してそうではなく、本人の気持ちと努力次第だということがわかりました。
- ・海外留学で異文化のことを学ぶだけでなく、日本国内でも様々なグローバルイベントに参加したいと思いました。また、外国人と話す機会にそなえて日本のことも知っておこうと思いました。

(e) 検証と考察

□取組の成果について

講義はすべて英語で行われたが、講師の先生は、生徒に問いかけたり、反応を見ながらわかりやすい英語で話したりしてくださったので、生徒は終始一生懸命聞いていた。講義後の質疑応答でも次々と質問が出た。感想からは、漠然と描いていた海外留学のイメージが具体的になり、「一度は海外へ出てみよう」と思ったことがうかがえる。

□次年度への改善点等

参加者のほとんどが1年生だった。海外留学だけでなく、職業選択のヒントになる話もあったので、2, 3年生にも参加を推奨したい。

1. 3. 3) 英語運用能力の育成

①TOEIC Bridge IP テスト及びTOEIC IP テストの実施

(a) 実施実績

- 実施対象 TOEIC Bridge IP 1学年全員
TOEIC L&R IP 2学年全員・3学年希望者
- 実施日時 TOEIC Bridge IP 平成29年12月18日(月)
TOEIC L&R IP 平成29年12月19日(火)
- 実施場所 徳島県立城東高等学校 校内(各教室, 講義室B)
- 目的 語学力育成

(b) 実施計画

- 7月… 生徒全員にプログラムガイドを配布し、目的・目標及びテストの概要について説明
- 10～11月… サンプルテストを実施
- 12月… 実施及び評価

(c) 実施概要

TOEIC Bridge IPはCommunication I(1時間)と英語表現I(1時間)で実施。TOEIC L&R IPはCommunication II(2時間)と英語表現II(1時間)で実施。リスニングは、CDデッキを用いて実施した。

(d) 実施結果

<TOEIC Bridge IPテストについて>

平均スコアが128.6点(Listening 64.9点/Reading 63.7点)と昨年(127.1点(Listening 63.9点/Reading 63.3点))にくらべ、1.5点(Listening 1.0点/ Reading 0.4点)アップした。最高点は178点(Listening 90点/Reading 90点)であった。

<TOEIC L&R IPテスト>

平均スコアが359.2点(Listening 210.1点/Reading 149.1点)と昨年(338.2点(Listening 202.1点/Reading 136.1点))にくらべ、21.0点(Listening 8.1点/ Reading 13.0点)アップした。最高点は、780点(Listening 390点/Reading 390点)であった。

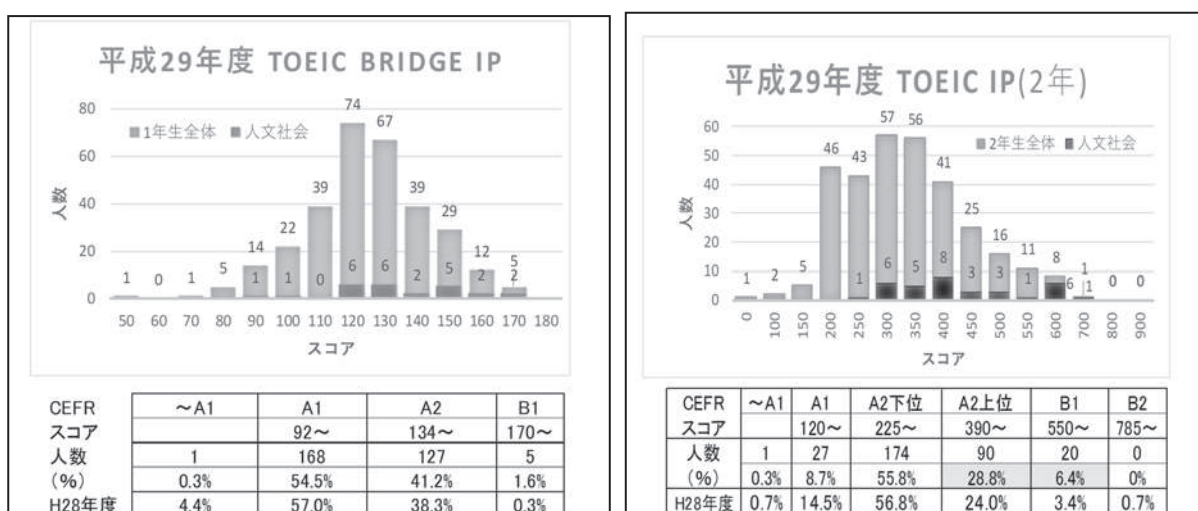
(e) 検証と考察

<TOEIC Bridge IP テストについて>

3年間の平均スコアは130点を推移している。全国高校1年生の平均スコア116.8点(Listening 60.1点/Reading 56.7点)を大きく上回っている。またTOEIC L&R テストへの移行目安(Total 140点~150点)を達成している生徒は、昨年同様75名(約25%)である。Totalで満点の生徒はいなかったが、Listening, Readingのセクションそれぞれに満点の生徒はいた。

<TOEIC L&R IP テスト>

平均スコアは過去3年間の中で、最も高い結果となっている。最頻値も上昇している。TOEIC S&W のチャレンジ目安 (TOEIC 500点以上) を35名(約12%)が達成。昨年に比べ15名増となっている。強い目的意識を持って英語学習に取り組む生徒が確実に増えているように思われる。



□取組の成果について

現1・2年生は、SGH指定3・4期生にあたるが、普段の授業においても社会に出てから通用する英語の習得に対する意識の高まりが確実に感じられる。現3年生の実用英語検定準2級合格者も249名(昨年度231名)と増えている。

□次年度への改善点等

1年生全員で実施したTOEIC Bridgeは、レベル的にも妥当であった。2年生は、TOEIC Bridge 受験目安(TOEIC L&R 400点未満)が、約220名(約70%)という結果もあるので、TOEIC Bridge IPとTOEIC L&R IPの併用が望ましい。また、英語4技能評価試験の導入に向けてTOEIC S&W IPテストの導入も検討を要する。

②英語科の取組

(a) 実施実績

- テーマ等 国際課題を探究する態度、課題研究を進める上で不可欠な英語運用能力を育成する。
- 目的 将来グローバルに活躍するために必要な語学力を身に付けさせ、異文化理解について考えさせる。英語を通じて、社会生活での幅広い話題について理解し、自分の意思とその理由を適切に伝えることができる能力を伸ばす。

(b) 実施計画

- ① CAN-DO リストの活用
- ② CAN-DO リストに基づいたパフォーマンステストの実施
- ③ TOEIC Bridge, TOEIC L&R, 英検などの受験対策指導
- ④ Essay Contest の実施
- ⑤ ALT との授業
- ⑥ 3 年生の英語論文作成指導
- ⑦ 生徒からの授業評価, 研修, 研究授業に基づいた授業改善

(c) 実施概要

① CAN-DO リストの活用

前年度に, 生徒達に城東高校で身に付けて欲しい英語の力を, CAN-DO リストとして設定したが, CAN-DO リストの目標が達成されるような手段が様々な活動の実施において検討され, 決定された。

② CAN-DO リストに基づいたパフォーマンステストの実施

上記 CAN-DO リストに基づいて, 必要とされる英語力, 特にスピーキング力を伸ばすために, 1 年生は毎学期に, 2 年生は 2・3 学期と, 各学期に 1 回パフォーマンステストを実施した。年度当初に生徒達には実施について知らせておき, 毎回の授業にはアウトプットを意識して参加するよう動機付けた。1 年生は 1 学期には Reading Aloud (音読) Test, 2 学期には Picture (状況描写) Test, 3 学期は Interview (英問英答) Test という形式で, ALT とともに実施した。2 年生は 2 学期に Picture (状況描写) Test, 3 学期は, 先に生徒に英作文を書かせてその内容に基づいたグループでの Interview (英問英答) Test を ALT とともに実施した。

③ TOEIC Bridge, TOEIC L&R, 英検などの受験対策指導

TOEIC Bridge は 1 年生, TOEIC L&R は 2 年生全員が受験した。受験に際しては補習の時間などを利用して, サンプル問題などを用いて受験のコツや準備の仕方を指導した。英検については, 校内での実施はしなかったものの, 校内で申込みを受け付け, 2 次試験の面接のために機会を設けて面接指導を行った。

④ Essay Contest の実施

英語での発信力をより強化するために, 1 月中旬から下旬にかけて 2 学年の生徒に対して「My highlight of 2017」というテーマで英文のエッセイを書かせ, 内容が優秀だった生徒を各クラス 3 名選んで表彰した。

⑤ ALT との授業

ALT との授業を, 1 年生は毎週 1 回, 2 年生は月 1~2 回の頻度で実施した。内容はリスニング, スピーキング, ライティングを中心とし, 外国の文化等にも触れながら授業が展開された。

⑥ 3 年生の英語論文作成指導

「グローバルリーダー論Ⅱ」の授業の中で, 前年度に徳島大学の先生を招いて指導していただいた英語論文の書き方に従って, 生徒自身が日本語で作成した論文を英語の形式に書き直していった。ALT 2 人も毎回授業の中で生徒を助け, 指導した。このような指導は「グローバルリーダー論Ⅰ」の中でも先取りして行われた。

⑦ 生徒からの授業評価, 研修, 研究授業に基づいた授業改善

日々の授業の改善点を知るために, 生徒に授業アンケートを実施しその結果を英語科教員全員で話し合い, 改善点の共通認識を図った。また, 教育委員会が実施する研修の報告会や, 校内で実施された研究授業の研究協議などから今後の授業の改善や方向性について話し合った。そして, 授業では活動を多く取り入れたり, できるだけ英語のみで読解指導を行ったりした。

(d) 実施結果

CAN-DO リストによって, 達成されるべき目標が具体化されたことで, 英語に関するあらゆる指

導の成果が見直され、授業改善のよいきっかけとなっている。また、前述のTOEIC L&Rの結果については成果の追跡が難しいものの、英検の結果においては2次試験の合格率がほぼ9割以上という顕著な成果が現れた。準一級受験者についても、2年ほど前は数名だった受験者が今年は毎回20名を超え、合格者が2年ほど前は2～3名だったが、今年は5名が合格した。外部試験に対して全体的に以前よりも意欲的に取り組む姿勢も見られている。授業実践については、授業アンケートにおいて、「先生は生徒が理解しやすいように授業や指導方法を工夫している」「あなたは、学習の内容に関して興味関心が持てますか」という問いに対し、8割以上の生徒が、「そう思う」「だいたいそう思う」と答えている。

(e) 検証と考察

□取組の成果について

SGHの指定を受けて4年が過ぎたが、授業では、活動を増やし、英語を使う授業を取り入れることにより、生徒の活動に対する心理的バリアが下がったようで、意欲的に英語を理解したり話したりする生徒が以前より多く見られるようになった。例えばリスニング活動がうまく活用され、意欲を喚起することがあったり、ペアワークの導入により、生徒はペアワークに積極的に取り組み、お互いに助け合って英語を理解しようとする機会が増えたりした。また、授業の内容にアウトプットの活動が多く取り入れられることで、プレゼンテーション能力の向上につながり、英語で発表ができる生徒が増えている。他にも、パフォーマンステストが英語を使う実践の場になって、生徒の心理的モチベーションを上げている。その結果、英検を受験しようとする生徒が増えているし、単語テストへの良い動機付けにもなっている。

□次年度への改善点等

授業においては、アウトプット・活動を強調するあまり、文法指導が十分にできないこともあった。文法も重要な要素であるので、バランスに注意する必要がある。評価においては、現在、どちらかというとな筆記試験に重点が置かれる傾向にあるので、4技能を均等に評価できる体制に変えていくべきだと思われる。また、英検・TOEICなどの外部試験に意欲的に取り組む生徒も増えているので、今後はこれらの指導についても方法や内容を考えていきたい。

1. 4 グローバルリーダー育成メソッドⅡ home

①日本 UNESCO 国内委員会・FAO 駐日連絡事務所訪問

(a) 実施実績

- 実施対象 希望者 第1学年6名, 第2学年2名
- 実施日時 平成29年8月2日(水)～8月4日(金)
- 実施場所 文部科学省日本 UNESCO 国内委員会
国際連合食糧農業機関駐日連絡事務所
- 指導講師 文部科学省国際統括官付ユネスコ第一係長 高橋 佑輔 氏
文部科学省国際統括官付ユネスコ第一係 氏師 大貴 氏
FAO 駐日連絡事務所所長 ボリコM. チャールズ 氏
FAO 駐日連絡事務所副所長 三原 香恵 氏
- テーマ等
 - ・ユネスコ活動・ユネスコスクールについて学ぶ
 - ・世界の食糧事情と共に、グローバルリーダーとしての生き方を学ぶ
- 目的
 - ・ユネスコ活動から世界の諸問題を考える。
 - ・世界の食糧事情を知り、自分が世界にできることは何かを考える。



(b) 実施計画

- 実施前：国際機関について関心のある生徒を校内で募り、事前学習をさせる。その中で出てきた疑問点を集約して訪問先に送付し、訪問当日の学びを深める。
- 実施後：学習成果をまとめてレポート提出し、その内容を集約してポスターセッションにて文化祭で展示・公開する。

(c) 実施概要

日本ユネスコ国内委員会では、ユネスコの世界的な組織について学ぶと共に、ユネスコ憲章の精神について講義を受けた。日本は、教育・科学及び文化を通じ、諸国民の間の協力を促進することで平和と安全に貢献することに賛同し、国内のユネスコ活動を支援したり助言したりする機関として機能している現状の説明を受けた。国連開発計画 (SDGs) へと繋げる「持続的な開発のための教育 (ESD)」について講義を受けた。そして、ESD の推進拠点としてユネスコスクールがあり、国際社会をリードする生徒を育成していることを学んだ。

FAO 駐日連絡事務所では「世界の食糧事情」「食糧安全保障のための FAO の役割」「SDGs について」を学び、FAO の活動を知ると共に、自分たちに何ができるかを考えた。また、ポリコ所長からは「グローバルリーダーへのささやかな教訓」と題して、これからのグローバル社会を生きていく中での世界情勢の見方や生き方を教えていただいた。自らの考え方や、日常生活の中で疑問に思っていることを直接質問する機会を得ることができた。

今回の訪問には、世界の国際機関では平和と安全を実現するために、SDGs に掲げられている 17 の目標の達成に向けて様々な活動が行われていることを学んだ。



(d) 実施結果

□生徒感想文 (抜粋)

- ・ユネスコ活動の科学分野では、自然と人間の調和を目的としてエコパークを設置したり、地学的な観点から自然を保護する目的でジオパークを設置したりしていることを初めて知った。
- ・ユネスコでは文化遺産・自然遺産・複合遺産を保護しているが、紛争で破壊されたり、ゴミ問題などにより景観を損なわれたりしている遺産もあり、次世代に伝えていく遺産を守る活動の大切さをあらためて感じた。
- ・ユネスコという名前はよく耳にするが、具体的にどのような活動をしているのかは今回初めて知ることができた。教育・科学・文化を通じて国民間の協力を促進させ、平和と安全に貢献しているユネスコ活動は素晴らしいと感じた。
- ・日本のユネスコスクールは 1,044 校で世界一の数を誇っているが、私たちにとってその知名度は高くなく、今回学んだユネスコ活動をもっと周囲に伝えて、その活動の理解を深めていくことも大切だと思った。
- ・FAO では世界中で飢餓に苦しんでいる人々が 7.95 億人もいるということに驚愕した。世界の食糧問題はテレビ報道で聞いたことがある程度の認識しか持っていなかった自分を恥ずかしく思い、あらためて私たちにできることは何かを考えるようになった。
- ・グローバルリーダーに求められている能力の一つに「自分の能力を生かして社会にアウトプットできる能力」だと聞いて共感を持った。ポリコ所長の生き方と照らし合わせて考えると、これからの社会で求められる人物とは「成長するために努力することを厭わず、まず第一に社会全体のことを考え、培ってきたスキルで人を助けることのできる人物」であると考えられることができる。

(e) 検証と考察

□取組の成果について

今回の研修を通じて、世界へ出て行くことに躊躇を感じていた生徒たちが、一歩踏み出すことの

勇気を持つようになった。また、コミュニケーションをとるとは、言語を使いこなすということではなく、自らの考え方を伝えることであることが理解できたようである。したがって、生徒たちは、自らが何を考え、自らの能力を生かして何ができ、社会にどのように貢献できるかを考えるようになった。そして、世界の国々が抱える諸課題について、自らの考えでアプローチしようとする姿勢を持つように変容している。

□次年度への改善点等

事前指導の期間がやや不十分であったと考えられる。また、学習した成果をアウトプットする方法についても今後検討が必要だと考える。実施時期については、現行のままでよいと思うが、訪問先の決定時期が早いと、生徒の希望から企画を立てることが難しい点が大きな課題として挙げられると思う。

②外務省「高校講座」

(a) 実施実績

- 実施対象 (講演) 第1学年 全員 (座談会) 第1, 2学年 希望者42名
- 実施日時 平成29年10月25日(水) (講演) 14:35~15:50
(座談会) 15:55~16:55
- 実施場所 徳島県立城東高等学校 多目的ホール, 会議室
- 指導講師 外務省国際法局国際法課課長補佐 柏口 温子 氏
- テーマ等 「外務省の仕事と役割を知る」
- 目的
 - ・外務省の仕事や役割について学ぶ。
 - ・貧困問題, 国際情勢, 外交問題, ODAについて関心や理解を深める。
 - ・国際理解, 異文化理解について理解を深める。

(b) 実施計画

- 実施前: 外務省関連資料を渡し, 外務省の概略や講師先生の略歴について指導・周知する。講師先生への質問事項を考える。
- 実施後: 講演内容をまとめ, 感想を書いて提出する。生徒アンケート実施。

(c) 実施概要

「高校講座」は外務省職員が高校を訪問し, 国際理解や外交官の仕事について講義を行う外務省の事業である。外務省国際法局国際法課課長補佐 柏口温子氏を迎え, 講演会と希望者による座談会を開催した。柏口氏は徳島県出身で, 平成27年度「高校講座」に続き2回目の講演会となった(平成28年度は希望が通らず実施できていない)。

講演内容は, 外務省の仕事と役割, 働く意義, 貧困問題, 国際情勢, 外交問題, ODAなどについてであった。赴任国であるケニアでの勤務経験を中心に, 国際ボランティア活動や留学経験について紹介し, 国際理解, 異文化理解の重要性にも触れた。講演後には, 講演内容についての質疑応答を行った。

講演終了後の希望者生徒との座談会は42名が参加した。1学年と2学年に分け, それぞれ30分ずつ質疑応答の形で進行した。講演内容を踏まえたもの, 英語学習, 海外留学, 高校生活など様々なことについて質問があった。



(d) 実施結果

□生徒感想文 (抜粋)

- ・特に印象に残った話は、東日本大震災のときにとっても貧しい国々が様々な支援をしてくれたという話です。日本がしている ODA や他の支援、他の国と築いてきた関係によって助けてくれたことを知って、外務省の仕事は重要だと思ったし、国と国だけではなく、人と人との関係も大切だとわかりました。
- ・柏口先生の体験談を聞いていて、実際に自分が現地に行き、見るのがどれほど大切かよく分かりました。以前に増して、海外への興味を持つことができました。
- ・アメリカの大学に留学された時のお話や、海外出張での体験などを聞いて、日本と外国との様々な面での違いを知ることができました。
- ・柏口先生が言った「自分で限界を作ってはいけない」の言葉には、とても感銘を受けました。何事にもチャレンジし、あきらめることなく、努力をし続けることが大切なのだと改めて思いました。
- ・途上国と貧困の話を知り、明日生きられるか分からない人が世界にはたくさんいることを知り、今の私がとても恵まれていると感じました。インドで「貧困」を目のあたりした体験など、深く考えさせられました。

□生徒アンケート (平成29年10月実施 対象：1年生出席者計312名)

Q. 今回の講座で、国際課題や社会問題に対する興味・関心が増しましたか。

肯定的意見の割合 (増した+どちらかという増した)
85.6%

Q. 今回の講座で、異文化や外国語に対する興味・関心が増しましたか。

肯定的意見の割合 (増した+どちらかという増した)
90.7%

Q. 今回の講座で、あなたが特に必要だと感じたものを2つ選んでください。



(e) 検証と考察

□取組の成果について

徳島県出身の講師が世界で活躍していることを知り、生徒の日々の学習に対する意欲や進路実現へ向けての志気があがったように感じた。印象に残る具体的な話や心に響くメッセージがたくさんあり、外務省が国内外で果たす役割について理解を深めることができた。将来、自分が世の中のために果たすべき役割とは何か、そのために今何をすべきか、どのように生きていくべきか等、自己の在り方や生き方について考えるよい機会となった。また、生徒にスライドと同じものを資料として配付したことは非常に好評であった。

□次年度への改善点等

幸い今年度は希望が通り、「高校講座」が実施できたが、毎年必ず実施できるという確約がないので、実施できない年度はどうするのか検討していきたい。

③講演・座談会「EUがあなたの学校にやってくる」

(a) 実施実績

- 実施対象 (講演) 第1・2学年 全員 (座談会) 希望者25名
- 実施日時 平成29年11月10日(金) (講演) 13:25~14:45 (座談会) 14:50~15:10

- 実施場所 徳島県立城東高等学校 大アリーナ, 会議室
- 指導講師 駐日ドイツ連邦共和国大使館 経済科学部副部長 マルコ・シュルト 氏
- テーマ等 EUの仕組み, ドイツの歴史・文化, 国際協調, 国際問題
- 目的
 - ・EUの仕組みやドイツの歴史や文化に触れ, 理解を深める。
 - ・国際問題に関心を持ち, 考える力を付ける。

(b) 実施計画

- 実施前: EUの仕組み・地理・歴史に関する冊子を事前配布。
- 実施後: 講演内容をまとめ, 感想を書いて提出する。生徒アンケート実施。

(c) 実施概要

在日EU加盟国大使館の大使や外交官が学校を訪問し, EUや出身国について説明するプロジェクト「EUがあなたの学校にやってくる」に昨年, 一昨年に引き続き応募し, 駐日ドイツ連邦共和国大使館 経済・科学部副部長のマルコ・シュルト氏を招聘して, 講演会と希望者による少人数の座談会を行った (※参考・・・平成27年度は, 駐日リトアニア大使館 メールーニエネ 大使夫人を招聘。平成28年度は, 駐日ポーランド大使館 オスミツカ・ウルシュラ氏を招聘)。

講演は通訳を介して日本語で行われ, ①EUとは, ②世界の中のEU, ③EUと日本, ④ドイツと日本というテーマで講話をいただいた。生徒たちは講話の中で, EUの「多様性の中の統合」や「対立ではなく協力」といった基本的な姿勢を学んだ。

また, 講演終了後の希望者生徒との座談会には40名が参加した。質疑応答の形で進行し, 生徒からの質問は今後のEUがどうなっていくのか等の質問や, ドイツでの労働環境は日本に比べてどのようなものなのかといった質問, EUにアメリカ大統領が変わってからどのような変化があったかなど, 昨今の社会情勢を踏まえた質問が大半であった。また, 日本, 中国, 韓国などの東アジアの国々でEUのような共同体を作ることについてはどう思うかといった質問もあり, 今回の講演から自分たちの身の回りのことをしっかりと考え始めている生徒も見受けられた。

(d) 実施結果

□生徒アンケート (平成29年11月実施 対象: 1・2年生出席者計630名)

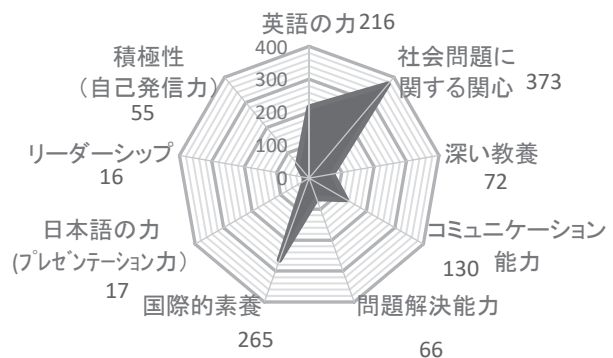
Q. 今回の講座で, 国際課題や社会問題に対する興味・関心が増しましたか。

肯定的意見の割合 (増した+どちらかという増した)	
1年: 93.0%	2年: 88.3%

Q. 今回の講座で, 異文化や外国語に対する興味・関心が増しましたか。

肯定的意見の割合 (増した+どちらかという増した)	
1年: 94.3%	2年: 90.5%

Q. 今回の講座で, あなたが特に必要だと感じたものを2つ選んでください。



□生徒感想文 (抜粋)

- ・EUは経済の発展をすすめるものだと思っていたが, 2000年間起こっていた戦争に区切りをつけたとても重要な役割を担っていたことを知り感銘を受けた。
- ・文化の交流, 人と人との交流, 他人を理解することが大切ということを知り, これは普段の私たちにも重要なことで, 国と国との間でも大切であるということがわかった。
- ・EUが世界のために, 30もの平和維持活動を行い, 難民の保護や地球温暖化対策など, 様々な役割を担っていることを知った。「平和は当たり前のことではなく, 日々の努力の積み重ね」という言葉が非常に印象に残っている。
- ・ドイツには400の大学があり, 44の世界トップレベルの大学があることに驚いた。一番驚いた

ことは、その授業料がほとんど無料であるということだ。日本では経済的な理由から大学の進学ができない生徒が少なからずいるので、参考にしてほしい。

- ・EUの「対立ではなく協力」という原則が印象に残っている。日本を含め東アジアでは最近対立が激化しているので、日本も中国や韓国などと過去の歴史を超えてよりよい協力関係を築き、平和な世界を作っていかなければいけないと思った。
- ・もっと色々自分で調べてEUやドイツのことを知りたい、さらに、ヨーロッパに行って、EUやドイツのことを実際に自分の目で見て、体感したいと思った。
- ・今回の講演を通してEUについて知ることができ、海外のことについて興味が増した。EUだけでなく、他の国際組織などについても調べてみたいと思った。
- ・2020年の東京オリンピックの開催により、ドイツの選手が徳島で過ごすというので、私も休日活動に積極的に参加したいと思った。

(e) 検証と考察

□取組の成果について

記憶に新しいイギリスのEU離脱や国際情勢の不安定さなどが連日のニュースでも取り上げられ続けていることもあり、今年度もEUに対する生徒の興味・関心は高かったようである。ドイツはEUの中でも経済大国であり、日本との歴史的・文化的交流も他のEU諸国に比べて盛んであることも、今回の講演に生徒たちが高い関心を示した一因であったかもしれない。

生徒たちからの質問や感想文からは、日本や自分たちを主体にして質問をしたり感想を書いたりしている生徒が多くいることが見受けられた。「EUが大切にしていることは実は私たちの実生活でも大切なことであると分かった」、「EUから学べる東アジアのあるべき姿とは？日本の東アジアでの役割とは？」、「ドイツの労働環境から学べる日本の労働環境とは？」など、今の日本が抱える課題についても、自分たちの日常とリンクさせて考えることができた。

□次年度への改善点等

一昨年度は英語での講演に同時通訳というスタイル、昨年度は講師が日本語に堪能なこともあり日本語での講演、今回はドイツ語での講演に同時通訳というスタイルでの講演であった。生のドイツ語に触れるということは生徒たちにとって貴重な経験になったと思うが、本校の生徒のレベルを考えれば、講演の一部分だけでも、英語のみの講演にすることも可能であるかもしれない。今後、使用言語のバランスを柔軟に持たせたスタイルの講演が可能かどうか、その内容も含めて検討していきたい。

1. 5 グローバル育成メソッドⅢ *abroad*

①姉妹校交流（派遣）・フランス研修

(a) 実施実績

- 実施対象 第1・2学年 選考により選抜された21名
(1年生：男子3名・女子7名 2年生：男子1名・女子10名)
- 実施日時 平成29年3月18日(土)～30日(木)
- 実施場所 ル・アーヴル市(3月18日～26日)とパリ(3月27日～29日)
- 指導講師 本校教員(山根・田中・徳永・藤永・横山・Brdic) *引率 藤永, 横山
- テーマ等 姉妹校交流を通じて国際的感覚を身に付ける
- 目的 ホームステイ体験や各訪問地の研修等を通じて、フランスの文化や歴史、人々の生活に触れ、異文化理解をする。また、現地の高校生や留学中の大学生とディスカッション及びプレゼンテーションをすることで、グローバル社会に必要とされる資質や能力を養う。

(b) 実施計画

- 実施前：1 1月 派遣生徒募集
1月 校内選考・研修会
2月 研修会（フランス語・英語・環境問題・フランスの歴史）
3月 出発式
- 実施後：研修記録及び生徒の感想文

(c) 実施概要

- 研修の概要
- | | |
|----------|---|
| 3月18日（土） | フランス到着 |
| 3月19日（日） | ホストファミリーと各自研修 |
| 3月20日（月） | 歓迎会、歌・農業の授業、ル・アーヴル市内研修、市庁舎訪問（健康・環境についてのインタビュー） |
| 3月21日（火） | 歌・農業の授業、パリ政治学院で留学中の日本人大学生との交流会 |
| 3月22日（水） | エトルタ研修、ルーアンでのディベート大会参加（一部生徒） |
| 3月23日（木） | ホスト生及び本校生徒のプレゼンテーション、書道・折り紙の授業、懇親会 |
| 3月24日（金） | オンフルール研修、農業・日本語・歌の授業、マルロー美術館研修、歌のコンサート |
| 3月25日（土） | ボクシング体験 |
| 3月26日（日） | ホストファミリーと各自研修 |
| 3月27日（月） | パリへ出発、ユネスコ訪問、パリ市内研修（エッフェル塔見学） |
| 3月28日（火） | パリ市内研修（サクレール教会・ヴェルサイユ宮殿見学） |
| 3月29日（水） | パリ市内研修（ノートルダム大聖堂・凱旋門・シャンゼリゼ通り・ルーブル美術館見学、セーヌ川クルーズ） |
| 3月30日（木） | フランス出発、日本到着 |

(d) 実施結果

□研修記録

ア 健康・環境に関すること

大気汚染による喘息やアレルギーを防ぐために、自動車の規制や公共交通機関の無料化を進めている。喫煙に関しては、10代からの喫煙が多いためタバコの値上げをしたり、パッケージに恐ろしい絵を描いて健康被害の様子を表現したり、室内全面が喫煙禁止になったりしている。吸い殻や犬の糞の放置が多いことに対して、ごみ箱を多数設置している。

イ ユネスコに関すること

多国籍の方が勤務しているため、語学力（特に英語）が重要である。活動として、ESD（持続可能な開発のための教育）・ユネスコスクール・世界寺子屋活動などの推進を行っている。文化に関する面では、世界遺産条約や無形遺産保護条約を通じた取組を行っている。

ウ パリ政治学院に関すること

大学入学以前から海外で生活していた人が多く、日常生活で英語力を身に付けている。政治・経済、金融のことについて深く学ぶことができる。他の大学に比べて少人数のため、先生や学生同士のコミュニケーションがとりやすい。

□生徒感想文（抜粋）

- ア 異国の地での生活に不安と期待を抱えていたが、ホストファミリーの手厚いおもてなしにより、徐々に打ち解けて楽しい研修となった。
- イ 両校生徒及びホストファミリーによるパーティーで、ホスト生以外の生徒ともたくさんコミュニケーションをとることができ、より親密度が増した。
- ウ 書道・折り紙体験を非常に喜んでくれ、日本文化を少し理解してもらえたような気がしてうれし

かった。

エ さまざまな場所を見学したが、すべてが新鮮に感じて心を奪われた。

オ 日を経るごとに英語・フランス語が少しずつ理解できるようになり、会話が弾むようになった。

カ 日本とは異なる生活様式に戸惑いが多くあったが、その環境を楽しむことができた。

キ 自分の意思をきちんと言葉にして伝え、相手の考えも聞くことの大切さを学んだ。

ク 語学力、特に話すことができる英語を身に付けることの大切さ、さまざまなことに挑戦する大切さを再認識した。

ケ 学校の敷地内に、皆で協力して日本庭園を造ったことが印象的であった。

コ 日本との文化や価値観の違いを実感した。

サ 歴史ある建造物や美術館等を訪れ、異文化や芸術に触れることができた。

(e) 検証と考察

□前項3「検証データ」に基づく検証・考察

1) 研修記録より

環境については、見習うべき問題に対する他国の解決策、一人一人が自分の行動に責任を持つことの大切さについてなど、それぞれ深く考察していた。ユネスコ訪問では、グローバル化に伴う語学力の重要性を再確認し、各国の諸課題に対応するためにユネスコが行っている役割について知るよい機会となった。パリ政治学院訪問については、大学生との対話を通じて、日本の大学とのカリキュラムや生活環境の違い、充実した学生生活についてなど、学ぶべき点が多くあった。

2) 生徒の感想文より

まず、語学力が大切だということを痛感する研修であった。それを補うために、ジェスチャーを交えて、積極的にコミュニケーションをとろうという姿勢を生徒たちは学んだ。また、異文化に直接触れることによって見聞を広め、さまざまなことにチャレンジする精神を養うことができたようであった。

□取組の成果について

生徒たちを観察していると、最初ぎこちなかった言動が日を経るごとに落ち着き、少しずつ自信を付けている様子がかがわれた。ホスト生やそのご家族と共に生活することで異文化を体感し、価値観や視野を大きく広げる機会ができたと感じる。

学校生活では、フランス語の歌のレッスンを受けてコンサートを行ったり、農業体験として日本庭園を造る作業をしたり、フランスや日本の文化を互いに紹介するプレゼンテーションを行ったりした。また、有名選手を輩出したボクシングジムでトレーニング体験を行ったりし、日本ではあまり経験することのできない貴重な経験をすることができた。また、市庁舎を訪問して、市長に健康・環境対策についてのインタビューをしたり、パリ政治学院で留学生と交流会を行ったりしたことで、フランス人のものの考え方や生活スタイルを学ぶことができた。

パリでは、ユネスコを訪問して、さまざまな問題に対する取組や活動状況を学習することができた。また、有名なヴェルサイユ宮殿やノートルダム寺院、エッフェル塔の見学をし、日本とは違う美的感覚や建築方式を知ることができた。これらの経験をこれからの学校生活や卒業後の進路に、大いに活かして行ってほしい。

□次年度への改善点等

初めの一週間のホームステイでは、サン・ジョセフ校のご厚意で、前年度までとは異なり、城東生のための特別なプログラムが組まれていた。ホスト生が選択している授業に同席するスタイルはほとんどなく、生徒はさまざまな経験ができてよかったと思うが、朝8時から夕方6時ぐらいまでの長時間にわたる学習スタイルは慣れないこともあり、負担になることがあったのではないかと考える。今後は、もう少し余裕あるスケジュールの調整が必要だと感じる。

②インドネシア海外研修

(a) 実施実績

- 実施対象 第2学年 選考により選抜された14名
- 実施日時 平成29年7月31日(月)～8月5日(土)
- 実施場所 インドネシア ジャカルタ市
- 指導講師 本校教員(乾, 山根, 田中, 徳永, 栗飯原, 横山, Bradic, Bach)
アメルタインダ大塚(AIO) 中田 梢 氏
徳島大学インドネシア人留学生 Rahadian Arief 氏
*引率教員: 田中 栗飯原
- テーマ等 グローバルリーダーの育成
- 目的 ①大塚製薬がインドネシアにおいてグローバル企業としてどのような戦略や目的, 意図のもと事業展開をしているのか, 現地でのインタビューやインターンシップ等を通じて理解を深める。また, 現地でのCSR活動にも参加し, 地域に根ざした活動のあり方について模索する。
②世界最大のイスラム教国でありながら数百の民族が混在する多民族国家インドネシアで研修することで, 異なる文化への理解・関心を深める。
③ASEAN諸国連合の中心であるインドネシアと日本の関係について, 経済・社会・文化・教育など様々な分野の課題を考察する。
④現地の高校生との交流を通じて外国語への関心を高め, コミュニケーション能力の向上をはかる。海外留学がどのように自身の生き方に影響するかを知る。

(b) 実施計画

- 実施前: 3月 校内選考
4月～7月 事前研修
- 実施後: 文化祭での展示 校内外での成果発表 研修記録の作成

(c) 実施概要

- 事前研修
 - 4月19日(水) 自己紹介・パスポートの取得等説明
 - 5月29日(月) 研修① インドネシアについて
 - 5月30日(火) 研修② 中田氏によるレクチャー
 - 6月 9日(金) テレビ会議 Stella Maris 生とオンライン会議①
 - 6月14日(水) 研修③ 日本・徳島・学校の紹介の仕方+第1回保護者説明会
 - 6月15日(木) クエスト(課題研究)
 - 6月16日(金) 研修④(課題研究)
 - 6月19日(月) インタビューの仕方
 - 6月29日(木) クエスト 課題研究
 - 6月30日(金) 研修⑤(課題研究)
 - 7月 7日(金) 大塚製薬板野工場見学
 - 7月11日(火) テレビ会議 Stella Maris 生とオンライン会議②
 - 7月19日(水) 第2回保護者説明会
 - 7月22日(土) 研修⑥Rahadian Arief氏によるインドネシア語とインドネシア文化についての研修
- 7月24日(月)～7月29日(土)
啓発活動, 日本紹介プレゼンテーションの準備
テレビ会議にて Stella Maris 生とオンライン会議

□海外研修の概要

7月31日(月) 出発

徳島空港を7時40分に出発、羽田空港へ移動したのち、羽田発11時45分の国際線でジャカルタへ向かいました。現地時間の17時15分(時差はマイナス2時間)にスカルノハッタ空港に到着しました。

8月1日(火) 午前 アメルタインダ大塚(AIO)訪問

大塚グループの現地法人であるアメルタインダ大塚(以下AIO)の本社を訪問しました。板東義弘社長、中田梢マーケティングリサーチマネージャーからお話をうかがいました。“What only ○○ can do?”, 強みを生かし、自分にしか、大塚にしか、あなたにしかできないことは何かという板東社長のお話をはじめとして、グローバル社会を生きるうえでの示唆に富んだ内容でした。また昼食の際、社員の皆さんと交流の場も設けていただきました。

8月1日(火) 午後 Stella Maris 校訪問

今回で3年目の交流となる Stella Maris 校を訪問し、自己紹介や校内見学ののち、2日後に Manggis 小学校で実施する環境啓発教育についての打ち合わせやリサイクル工作の事前準備などの活動を行いました。

8月2日(水) 午前 ASEAN日本政府代表部訪問

ASEAN日本政府代表部(日本大使館)を訪問しました。河原卓書記官からASEANの現状と日本との関係について、また山口敬一書記官からはインドネシアと日本の交流についてお話をいただいたのち質疑を行いました。急成長を続けるインドネシアとASEAN諸国について、実体験に基づく具体的なお話は大変興味深く貴重なものでした。

8月2日(水) 午後 ポカリスエット啓発・サンプリング活動参加

午後は、AIOの社員の皆さんに同行させていただき、ポカリスエットの啓発・サンプリング活動のお手伝いをさせていただきました。医療関係グループは現地の2つの病院にて、スポーツ関係グループはフィットネスジムと現地国立高校フットサルチームにて活動を行いました。

8月3日(木) 午前 Manggis 小学校訪問

バスでジャカルタ中心部より2時間あまりかけて、スカブミまで移動しました。現地の Manggis 小学校を訪問し、Stella Maris 校生14名とともに、5・6年生を対象に日本文化の紹介と環境に関する啓発活動を実践しました。日本の夏の文化を紹介し、一緒に願いを込めて七夕飾りを作りました。また環境啓発活動では、ペットボトルを活用したリサイクル工作を行ったり、ゴミ拾い競争やミニほうきを活用したりして、環境意識を向上する取組を行いました。子どもたちの純真で一息懸命な姿に私たちがパワーをもらい、充実した活動となりました。

8月3日(木) 午後 スカブミ工場見学

AIOのスカブミ工場では、世界に通じる規格を目標に最先端の技術を取り入れた生産ラインを見学させていただきました。また、タブレット端末を活用したクイズやデジタル技術を駆使した映像による体験型アトラクションで、楽しみながら学ぶことができる仕掛けに大興奮の研修となりました。

8月4日(金) 午前 Al Azhar 校 Kelapa Gading 支校訪問

イスラム系の高校である Al Azhar 校 Kelapa Gading 支校を訪問しました。到着するなり歌と踊りの熱烈なお出迎えて歓待されました。歓迎セレモニーののち、ゴム跳びやメンコのようなインドネシアの子どもの遊びに興じたりしました。こちらからは日本文化や城東高校での生活、クイズを交えたアニメなどのポップカルチャーの説明を行いました。徳島の紹介は何といっても阿波踊り!最後は Al Azhar の生徒の皆さんを巻き込んだ総踊りで盛り上がることができました。交流活動の後は、普

段は滅多に見ることができない金曜日の昼の礼拝を特別に見学させていただくことができ、敬虔な祈りの雰囲気には圧倒され、イスラム文化の一端に触れることができました。

8月4日(金) 午後 ジャカルタ市内見学

今回の研修で、大変お世話になったA I Oの中田さんと最後の昼食をご一緒させていただきました。興味深いお話に名残は尽きませんでしたが、別れを惜しみつつのお別れとなりました。

午後は、独立記念塔・国立博物館・ショッピングモール等を観光し、インドネシアの歴史や文化に触れることができました。そしていよいよ帰路へ。23時35分ジャカルタ発羽田行きの便で日本へと無事帰ってきました。



A I O事務所内で



板東社長の講話

(d) 実施結果

□生徒感想文(抜粋)

- ・今回の研修では、私の学びへの姿勢が変わったように思います。やはりグローバル化が進むこの時代に、世界へ飛び出すことは大切だと強く感じるようになりました。そして、世界を知るためには、世界を肌で感じなければならないと思いました。だから一度は留学してみたいと思います。
- ・実際にインドネシアに行くことで見えてくる部分も多くあった。まず、発展途上国とは思えないような数々の高層ビルに驚かされた。人口の多さも含めると、インドネシアには日本をも超える大きな力が秘められているように感じた。しかし、一步都市部から出ると、そこには暑さもしのげないような小さな家々があり、道路や道端にもごみが散乱していた。インドネシアは現在急速に発展しているが、その一方で発展に伴う経済不平等やごみに関する問題が山積していることも忘れてはいけない。現実から目を背けず、考えていくことが今求められていることだと思った。
- ・私は、インドネシアでは日本よりも宗教が生活に根付いているということがよくわかりました。大塚の現地のオフィスを見させていただいた時、会社内にお祈りをする場所がありました。インドネシア人の約9割を占めるイスラム教では、1日5回メッカがある方向にお祈りをする習慣があり、特に毎週金曜日には必ずお祈りをしなければならないというルールがあるそうです。そのため大塚の工場では、同じ従業員が2週続けて金曜日にお祈りができないようなことを避けるよう工夫をしているそうです。このように、インドネシアでは、日本よりも宗教を信仰している人が多いので、より相手の宗教に対する理解と配慮が必要なのだとわかりました。インドネシアだけでなく、これから世界でビジネスをする時には、大塚製薬のように、相手のことをよく考えなければならないことを学びました。こんなにグローバルな企業が私たちの地元徳島から始まったということが信じられませんでした。
- ・宗教面でも日常の生活面でも、インドネシアに対するイメージは大きく私の中で変わりました。インドネシアには、イスラム教の人もキリスト教の人もいますが、どちらの宗教の人もお互いを尊重し、思いやりの気持ちを持って生活していました。普段私の周りにはいないイスラム教の人とたくさん関わって宗教への理解を深めることができたし、テレビやインターネットで調べるよりも、実際に会って肌で感じるということが一番理解を深められるなと思いました。

- ・私たちが普段耳にするニュースで取り上げられるのはイスラムのほんの一部である過激派のことばかりである。しかし、本当のイスラムはそうではなく、思いやりに溢れている。世界一のイスラム大国に行くことでこの素敵な部分に触れられたことを本当に嬉しく思う。今後は、このイスラムの良さを皆で共有していきたい。
- ・「参加出来て良かった」これが私の一番の感想です。何事にも積極的で、自分の夢に向かって努力を続けているインドネシアの高校生からは、日本でも私たちの世代が努力をしてこれからの社会を支えていかなければならないという事を教えてもらった気がしました。
- ・なんといっても私がこの研修旅行で最も印象的だったのは、「どのようにしたらグローバルリーダーになれるか」を具体的に思い描けたことである。活動初日にA I Oの社長でいらっしゃる板東さんから直接講話を聞き質疑応答をする機会があったが、その講話の中で板東さんは「ナンバーワンではなくオンリーワンになることが大事」とおっしゃっていた。そして、成功する人というのは①他人の気持ちに入ることができ、それを知ったうえで役立てられる人、②他人にはできないこと、他人はしないことをする人であるとおっしゃっていた。成功する人というのはナンバーワンなのではなくその人にしかできない、その人だからできるといったオンリーワンであるという言葉聞いたとき、今まで「グローバルリーダー」という言葉に対してぼんやりとしたイメージしかもっていなかったが、オンリーワンになることで成功する人、つまりグローバルリーダーに結び付くのだと確信を持つことができた。そしてまた、多くのインドネシアでの日々をともにしてくれた中田さんは私の一番身近なグローバルリーダーだと感じた。中田さんは常に笑顔を絶やさず私たちをリードしてくれ、とても寛容であった。そして自身の体験を踏まえて、宗教を理解することで相手と分かり合え、心配りをすることで信頼関係を築くことができるということを教えてくれた。現在インドネシアで多くの宗教を信仰している人とともに生活をしている中田さんの心配りやオープンな姿をみると、中田さんは真のグローバルリーダーだと感じた。なかなかできない貴重な体験をたくさんすることができ、本当に多くのことを学ぶことができた。異なる環境に身を置くことで適材適所を肌で感じる事の大切さ、他人と違うことをすることで人から飛びぬけること、一期一会を大切にすること、そしてなによりオンリーワンになること。今回の経験を自分のものにして世界で羽ばたけるようなグローバルリーダーになれるよう、まずは何事にもチャレンジして貴重な機会を逃さないように積極的に挑戦することから始めたい。
- ・この研修の中で、私が一番すごいと思ったのは、大塚の社員の方で、私たちにインドネシア語の通訳や小学校の啓発で色々お手助けをして下さった方でした。日本人の方なのですが、主にインドネシアなどの東南アジアで長い間働いていらっしゃる、まさにグローバルな人でした。研修の間、朝早くから夜遅くまで、忙しい中、私たちのために色々力になって下さって、本当に感謝しかありません。その方にお話をうかがうと、宗教の違いから苦労した話やインドネシアの現在の状況について話をして下さいました。その中で、一番印象的だったのは、「若い頃の経験は絶対マイナスにはならないから、何でも経験を重ねるべき」という私たちへのメッセージです。このことを聞いて、グローバルに活躍するために今回の研修に参加して本当に良かったと思いました。また、これからもさまざまな経験に自らが主体となって参加していきたいと思いました。



Manggis 小学校での啓発活動



小学生と記念写真

(e) 検証と考察

□取組の成果について

今回の研修で最も大きなプロジェクトとなったのは、第1回研修以来、交流のある **Stella Maris** 校生とともに行った現地の小学校における環境・衛生についての啓発活動である。出発前は、**Stella Maris** 校生とテレビ会議やSNSを活用して、事前準備を進め、現地到着後も入念な打ち合わせをした上で、当日を迎えた。城東生のみで取り組むのと違い、相手とうまくコミュニケーションを取りながら進めなければならないので、自分たちの言いたいことがうまく伝わらず、苦勞することも多かった。当日は、小学校の電力不足のせいで準備したパワーポイントが使えないという想定外の事態も発生した。海外で活動していく際には、このような苦勞やハプニングはつきものであるもので、順調に進まなかったからこそ学んだことは大きかったと考えられる。パワーポイントが使えないとわかって動揺することなく、スマホを使って子供たちに画像を見せて回り、乗り越えることができた。このような経験を通じて、生徒たちは大きく成長したと確信している。さらに、インドネシアの将来を真剣に考えながら真摯に取り組む高校生や希望に満ちた元気な小学生の姿にも大いに刺激を受けたようだ。また、A I Oの板東社長や中田マーケティングリサーチャー、ASEAN日本政府代表部の二人の書記官など海外で活躍する日本人からのお話は、グローバルリーダーの資質について考える良い機会となった。

今年度は、総合的な学習の時間の「クエスト」の中で、研修参加者を文系・理系の2班に分け、課題研究に取り組んだので、研修で学んだことをさらに深めることができた。その内、1班は校内の課題研究発表会で発表し、もう1班はSGH全国高校生フォーラムとSGH甲子園にポスターセッションで参加し、校内外へ発信した。プレゼンテーションスキルの向上を図ることができた。

□次年度への改善点等

小学校での啓発活動が、ただのイベントで終わらないように、活動を継続することが大切である。実際、大塚製菓の協力により、その後、**Manggis** 小学校がどのように変容しているか報告してもらっており、**Stella Maris** 高校とともに、今後どのような支援が必要であるかを検討しているところである。この継続活動により、新たな課題を見つけ、次回のインドネシア研修に引き継ぎ、さらに発展させていきたい。



スカブミ工場前で **Stella Maris** 生とともに



Al Azhar 校 **Kelapa Gading** 支校での交流会

2 課題研究の取組

2. 1 課題研究の実践

(a) 実施実績

- 実施対象 第2学年 全員
- 実施日時 通年（課題研究発表会：平成30年2月14日（水））
- 実施場所 指導：城東高等学校内，課題研究発表会：あわぎんホール
- 指導講師 徳島大学大学院社会産業理工学研究部教授 豊田 哲也 氏
 徳島大学教養教育院教授 渡部 稔 氏
 徳島大学教養教育院教授 南川 慶二 氏
 徳島大学理工学部教授 安野 卓 氏
 徳島大学国際センター特任教授 内藤 毅 氏
 徳島大学医歯薬学研究部准教授 岡久 玲子 氏
 徳島大学総合科学部社会総合科学科教授 村上 敬一 氏
 徳島大学総合科学部社会総合科学科准教授 矢部 拓也 氏
 徳島大学総合科学部教職教育センター教授 中川 隆彦 氏
 徳島大学国際センター特任教授 福岡 佑子 氏
- テーマ等 9分野（自然科学，工学，医療，人文科学，社会科学，教育，芸術，生活科学，国際における課題研究）
- 目的 研究内容をまとめて整理するとともに，その成果を広く発信するための知識・技術を身に付けさせる。また，本校の取組について学校関係者に広報し，理解・協力を得る。

(b) 実施計画

クエスト（総合的な学習の時間）の時間を使い，次のような計画で進めた。

- 4月 研究紀要『叡智の扉』第8号を配布，課題研究グループ決定，マインドマップの作成
- 5月 テーマ決定，探究マップ作成
- 6月 論題設定について大学教授から指導（講演会），探究マップ作成，ポスター作成
- 7月 ポスターによる課題研究グループ別発表会（徳島大学教授による課題研究の指導）
- 8月 研究資料収集，進捗状況報告
- 9月 研究の進め方について大学教授から指導，発表資料作成
- 10月 発表資料作成
- 11月 課題研究グループ別発表会（徳島大学教授による課題研究の指導，代表10班選出），研究紀要『叡智の扉』第9号原稿作成，課題研究発表会準備（代表班）
- 12月 研究紀要『叡智の扉』第9号原稿作成，課題研究発表会準備（代表班）
- 1月 研究紀要『叡智の扉』第9号原稿作成（全班），課題研究発表会準備（代表班）
- 2月 課題研究発表会，研究紀要『叡智の扉』第9号原稿作成（全班），取組の振り返り




(c) 実施概要

生徒の進路や興味・関心がある分野に，環境または健康及びグローバル戦略・グローバルブランド・世界の潮流・CSR活動のいずれかを含めた研究を行った。その集大成として，大学と連携し，発表会及び研究紀要『叡智の扉』第9号の発刊に至るまでを次のように進めた。

日時	内容
平成29年 4月	<ul style="list-style-type: none"> ・研究紀要『叡智の扉』第8号配布 ・課題研究グループ登録 ・発表班決定（各班3～8人・全57班） ・新書レポート提出 ・「論題設定の技」学習，論理的に考える技学習 ・マインドマップ作成

平成29年 5月	<ul style="list-style-type: none"> ・課題研究テーマ検討 ・探究マップ作成
平成29年 6月	<ul style="list-style-type: none"> ・論題の設定についての指導（6月1日・木） <p>講演：「『覚えること』から『問いかけること』へ」 講師：徳島大学大学院教授 豊田 哲也 氏</p> <p>作文・レポート・論文の違い，研究 テーマの立て方，実際に仮説を立てる演習，検証・データ分析のしかた，図書の検索方法や読書案内などを説明。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・探究マップ作成 ・ポスター作成 ・課題研究調査レポート計画
平成29年 7月	<ul style="list-style-type: none"> ・課題研究グループ別発表会（7月13日・木） <p>徳島大学より8名の先生が来校。各班のポスターによる中間発表実施後，助言指導。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「情報収集の技」学習 ・夏休みの課題である，課題研究調査レポートの進め方学習及び分担の検討
平成29年 8月	<ul style="list-style-type: none"> ・課題研究調査レポートの情報共及び提出 ・課題研究評価基準の確認 ・「発表の技」学習
平成29年 9月	<ul style="list-style-type: none"> ・課題研究テーマの研究手法や資料収集についての指導（9月22日・金） <p>講演：「『情報リテラシー』を身につけよう」 講師：徳島大学教養教育院教授 渡部 稔 氏</p> <p>テーマ設定のしかた，研究方法やまとめ方，インターネット利用上の注意，著作権，インタビュー・アンケート調査・フィールドワークのしかた，発表方法などを説明。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・絵コンテ作成（グループ別発表用スライド作成の下書き） ・グループ別発表用スライド及び発表原稿作成
平成29年 10月	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ別発表用スライド及び発表原稿作成
平成29年 11月	<ul style="list-style-type: none"> ・課題研究グループ別発表会（11月2日・木） <p>徳島大学より8名の先生が来校。各班のスライドによる発表実施後，評価及び助言指導。代表班10班の選出。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「論文の技」学習 ・研究紀要『叡智の扉』第9号原稿作成，課題研究発表会準備（代表班）
平成29年 12月	<ul style="list-style-type: none"> ・代表班及び論文作成についての指導（12月11日・月）



	<p>徳島大学 渡部 稔 教授・村上 敬一 教授による校内での代表班（計10班）の発表指導（発表内容の指導，参考文献の紹介等）。</p> <p>・代表班以外は，研究紀要『叡智の扉』第9号原稿作成</p> <p>・研究紀要『叡智の扉』第9号原稿作成，課題研究発表会準備（代表班）</p> 
平成30年 1月	<p>・研究紀要『叡智の扉』第9号原稿作成，課題研究発表会準備（代表班）</p>
平成30年 2月	<p>・課題研究発表会を実施<2月14日，あわぎんホールにて></p> <p>第2学年代表班（計10班）が研究の成果を発表。</p> <p>*発表対象は第1・2学年生徒，保護者，教育関係者</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 仮設住宅としてプレハブ式仮設住宅は最善の建築方法なのか？ 2. オオカミの遠吠えは緑をよぶか 3. “笑い・人との繋がり”によって病状は緩和されるのか 4. 君の記憶にレボ☆リューション！～意図的に記憶力を高めることはできるのか…？～ 5. 私たちは空気をよむべきか～心理学からみる人間関係～ 6. そば米，食べてる？～そば米を広めることはできるのか？～ 7. 徳島の藍産業を活性化させることはできるのか 8. 日本の英語教育は正しいのか？～中国の英語教育と比較して～ 9. インドネシアのゴミ問題は改善できるのか 10. 働き方改革！～日本はJAPONになれるのか～   <p>併せて，海外交流体験発表で，オーストラリア留学を終えた森脇聡哉による徳島の誇りについての発表，インドネシア研修・フランス研修をした生徒による英語の発表が行われた。</p> <p>その後，指導に当たった徳島大学 豊田 哲也 教授，渡部 稔 教授に講評をしていただいた。</p> <p>投票の結果，最優秀賞と優秀賞は次のとおりとなった。</p> <p>最優秀賞：「君の記憶にレボ☆リューション！ ～意図的に記憶力を高めることはできるのか…？～」</p> <p>優秀賞：「オオカミの遠吠えは緑をよぶか 「仮設住宅としてプレハブ式仮設住宅は最善の建築方法なのか？」</p> <p>・代表班の事前指導</p> <p>・研究紀要『叡智の扉』第9号原稿完成</p>

平成30年 3月	研究紀要『叡智の扉』第9号作成 全研究班の研究内容を再考してまとめ、冊子の形で研究紀要を作成する。
-------------	---

(d) 実施結果

生徒感想文（抜粋）

- ・正解のない問いに対する答えを自分たちなりに考え、導き出していくのは大変だったが、学べたことは多く、自分自身を成長させるよい機会になった。
- ・実際に大勢の前で発表してみると、もっと論理的で聴く人がわかりやすい興味の持てるものにした方がよかったと感じた。
- ・ただの情報収集に終始せず、アンケート等も行い客観的データ分析を行った研究をし、大変おもしろかった。もう少し研究対象をしばればよかった。

(e) 検証と考察

取組の成果について

- ・本年度も徳島大学の豊田先生、渡部先生から、個々の班についての感想、今後の研究課題への取組方の方法、テーマ設定のしかた等について講評をいただいた。
- ・発表会では、内容を暗記せずに行っている班が多くあったが、発表のしかたについてはチームワークが良く、非常に効果的に行っていた。
- ・毎年のことであるが、週1時間のクエストでは時間が少なすぎるのが現状である。そのため、生徒のみならず、指導する教員の負担も大きくなっている。
- ・本年度は、班ごとの活動時間を昨年度より多く設定したが、それが充分機能していなかった。

次年度への改善点等

- ・昨年度より研究テーマの早期決定はできたが、夏季休業等や放課後等の空き時間を利用して活動する生徒は少なかった。生徒間での情報収集の時間の確保が難しいようであるが、積極的に活動するようさらに促す必要がある。
- ・本年度と同様の予定時間で進めていくのであれば、生徒・教員とももっと積極的にクエストの時間を充実させて取り組む方がよい。そうすれば、放課後の研究や指導の負担も少なくなり、さらに高レベルな研究ができると思われる。

2. 2 成果発表

①「SGH発表会」

(a) 実施実績

- 実施対象 第1～3学年 人文社会コース・希望者
- 実施日時 平成29年7月22日（土）13:00～15:40
- 実施場所 とくぎんトモニプラザ
- テーマ等 研究の紹介や研修の報告を英語で行う
- 目的 研究内容や海外研修のレポートを英語でプレゼンテーションし、成果を校内外へ発信する。質疑応答を通して、それぞれのプレゼンテーションに対して更に理解を深める。

(b) 実施計画

- 実施前：プレゼンテーション準備
- 実施後：感想アンケート

(c) 実施概要

- 13:00 Check-in
- 13:30 Opening Speech from the Principal
Speech from the Manager of School Education

- 1 3 : 4 5 Research Presentation
 ‘Should Japan Accept Foreign Workers?’
 ‘Exposing World Culture at an Early Age’
 ‘Can AI Be a Teacher?’
 It’s Show Time in Developing Countries!! ～Finding a Way Out from a Developing Country through the Show Business～
- 1 4 : 5 0 Report on the Study Tour to Indonesia
 Report on the Study Tour to France
- 1 5 : 1 5 General Evaluation
- 1 5 : 3 0 Closing

(d) 実施結果

発表班は、かなりの準備をして英語プレゼンテーションに臨んでいた。フロアからも様々な質問や意見があったが、発表班は、質問を想定してそれらに英語で答えることができるように資料等の準備もしており、更に理解を深めることができた。アンケートの一部を紹介する。

一般の観客のアンケート

- ・考え、まとめ、発表し、それからまた新たな価値を創造していくとても良い機会だと思った。
- ・生徒たちが英語をツールとして使いこなしていることに驚いた。大変良い刺激になった。

1・2年生のアンケート

- ・発表していた先輩のような英語力を付けたい。
- ・何かを伝えたいという気持ちを持って発表していることが感じられた。
- ・一つのテーマについて様々な面からアプローチしていて勉強になった。
- ・様々な問題があることに気が付いた。

発表者のアンケート

- ・1年以上課題研究を続けて、大変だったこともあったが、本当にいろいろなことを考える機会を得ることができて良かった。
- ・未熟な発表であり、“伝える”という根本的な意味をもう一度考えようと思った。

(e) 検証と考察

取組の成果について

発表班は、パワーポイントを効果的に使用し、しっかりと準備し、何度も練習することで、英語力やプレゼンテーションの力を高めることができたように思う。

1・2年生にとっては、全体的に非常に良い刺激になったという生徒が多かったようである。自分たちの周りには様々な問題があることに気付き、それらに対するアプローチの仕方を考えるきっかけとなったと感じたようである。

次年度への改善点等

より多くの生徒や保護者の前で発表する機会を設けることができないか。

② 「課題研究発表会」

課題研究の実践 に記載

③ 「第3回大阪大学国際公共政策コンファレンス・待兼山会議」

(a) 実施実績

- 実施対象 第3学年4名（前年度の課題研究発表会における最優秀チーム）
- 実施日時 平成29年4月22日（土）、23日（日）
- 実施場所 大阪大学大学院国際公共政策研究科
- 目的 大阪大学公共政策コンファレンスは、高校生が優れた問題解決能力並びに発信力を身に付けることを目的に、2日間にわたり全国の高校生が集い各チームの研究発表の場であ

る。プレゼンテーションを通じて全国の高校生が意見を交わし、大学生や教授等の先進的な研究に触れることで、自分の視野を広げ今後の様々な選択に主体的に取り組む姿勢を養う。

(b) 実施概要

1日目は、大学院生によるモデルプレゼンテーションと、5会場に分かれての高校生による研究発表を行った。本校は『日本は外国人労働者を受け入れるべきか～経済・文化的側面から考える～』をテーマに発表した。2日目は、代表チームによる研究発表と、『ナショナリズムの台頭～国家とは何か～』をテーマに公共政策学部教授と大学院生によるパネルディスカッションが行われた。今大会に参加した生徒は、「着眼点や構成、発表方法など非常にハイレベルな内容に触れ、私たちが今学んでいることは本当に基礎の基礎なのだと実感した」と述べ、大いに刺激を受けていた。

④「第53回 徳島県国際教育振興弁論大会」

(a) 実施実績

- 実施対象 第2学年8名（フランス研修参加生徒）
- 実施日時 平成29年11月25日（土）9：15～16：00
- 実施場所 徳島県立総合教育センター
- 目的
 - ・課題研究で探究した内容を日本語でグループ発表する。
 - ・元青年海外協力隊員の講演や他校の発表を聞き、視野を広げる。

(b) 実施計画

- 実施前：スライド作成・発表練習
- 実施後：感想聴取

(c) 実施概要

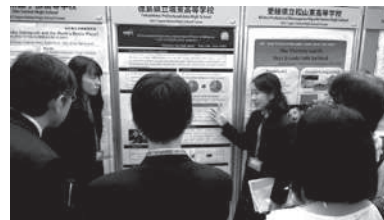
- (1) 日本語による意見発表
- (2) 英語による意見発表
- (3) グループによる意見発表
- (4) 元青年海外協力隊員の講演 「バングラディッシュとバヌアツから学ぶこと」
- (5) 成績発表・表彰・講評

フランス研修の際、現地で疑問に感じたことや新聞やテレビの「過労死」報道をきっかけに日本とフランスの労働システム、働き方に対する意識の違いなどを書籍やインターネットで調べたり、フランス人へインタビューしたりして、比較した上で、新たな働き方を提案するというレベルの高い発表を行った。入賞は逃したが、海外研修での体験を帰国後も継続して深く探究するという意味で、海外研修の成果が大きく現れた取組となった。

⑤「SGH全国高校生フォーラム」

(a) 実施実績

- 実施対象 第2学年2名（インドネシア研修生徒）
- 実施日時 平成29年11月25日（土）10：00～17：00
- 実施場所 神奈川県横浜市 パシフィコ横浜
- 目的
 - ・課題研究で探究した内容を英語でポスター発表を行う
 - ・SGH指定の全国の高校生と交流する



(b) 実施計画

- 実施前：ポスター作成「Environmental Awareness Improvement Project in Indonesia –with local high school students–」（添付資料⑦）
- 実施後：感想・生徒アンケート提出

(c) 実施概要

第1部 基調講演 河合 江理子 氏 (京都大学教授)

第2部 生徒によるポスターセッション8分(発表4分・質疑応答4分) 2回, 生徒交流会

第3部 SGH指定校生徒ディスカッション

第4部 優秀校による英語での口頭発表・表彰式・講評・閉会式

全国のSGH校から133のポスター発表が行われた。短期間での準備と初めての英語発表, とても緊張した様子であったが, とてもパフォーマンスのよい発表ができた。全国レベルのプレゼンテーションや代表生徒による英語でのディスカッションも聞き, 全国の高校生たちからとても刺激を受けた。

⑥「SGH甲子園」

(a) 実施実績

実施対象 第2学年7名 (インドネシア研修生徒)

実施日時 平成30年3月24日(土) 10:00~17:00

実施場所 関西学院大学 上ヶ原キャンパス

目的

- ・課題研究で探究した内容をポスター発表する。
- ・ラウンドテーブル型ディスカッションで「CO₂削減の必要性」を議論する。
- ・SGH指定の全国の高校生と交流する。

(b) 実施計画

実施前: ポスター作成, 校内選考(ディスカッション)

実施後: 感想・生徒アンケート提出

(c) 実施概要

①研究成果プレゼンテーション 25チーム(5チーム×5会場)

②研究成果ポスタープレゼンテーション 97チーム

(本校発表)「環境意識改善プロジェクト in Indonesia~現地の高校生とともに~」

③ラウンドテーブル型ディスカッション 3テーマ

(本校参加)「CO₂削減は本当に必要か?」

④高校生交流会/企業・団体によるセミナー・資料配付・個人相談ブース

徳島サマースクール by HLAB

平成29年8月16日(水)~22日(火)

参加生徒: 1年生2名 2年生1名

県南牟岐町で開催された徳島サマースクールに, 本校の3名の生徒が参加しました。このサマースクールは, 「ボーダーを越えたりベラル・アーツ」をコンセプトに設立されたHLABが主催しています。HLABのホームページにはこのプログラムを次のように紹介しています。「ハーバード大生をはじめとする海外大学生による少人数授業, 魅力的な大人に出会い対話する場, 徳島が育んできた豊かな文化体験, 今まで向き合うことのなかった『ほんもの』自分に出会う夏が, 参加者の皆さんを待っています。祭りの熱気と穏やかな波音に包まれながら, 新しい世界への第一歩を踏み出してみませんか。」

6泊7日の合宿生活を体験し, 学校外の世界に目を向け, 参加生徒はたくましく成長します。校内では英語に自信があった生徒が, その自信を打ちのめされ, 世界に飛び出して自分を鍛え直そうと海外留学や海外研修のプログラムに応募したり, サマースクールでの体験を英語弁論大会で発表し, 上位入賞したりするなど実際に行動を起こしています。まさに, グローバルリーダーになる素地を作ってくれるプログラムである。

3 その他の取組

3. 1 各種大会・参加記録

1-d	13名	公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数	
	2年	第7回徳島県高等学校英語弁論大会	第5位
	1年	第7回徳島県高等学校英語弁論大会	佳良賞
	2年	第5回徳島県高等学校英作文コンテスト	第5位
	2年	第5回徳島県国際教育振興弁論大会	徳島県国際教育研究協議会賞 グループによる意見発表の部 奨励賞
	2年	平成29年度「私と年金」エッセイ	優秀賞
	1年	税の作文	徳島税務署署長賞
2-f	46名	グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数	
	3年	大阪大学国際公共政策コンファレンス	4名
	1年	高校生「ジュニア観光ガイド」	3名
	1・2年	日本語教室ボランティア	9名
	1年	「Future Global Leaders Camp」参加	1名
	1・2年	徳島サマースクール	3名
	2年	第7回徳島県高等学校英語弁論大会	1名
	1年	第7回徳島県高等学校英語弁論大会	1名
	2年	第5回徳島県高等学校英作文コンテスト	1名
	2年	第5回徳島県国際教育振興弁論大会	8名
	2年	SGH全国高校生フォーラム	2名
	1年	あわ(OUR)教育発表会	1名
	1・2年	第2回中四国SGH高校生会議	5名
	2年	SGH甲子園	7名
2-j	92名	(その他本構想における取組の具体的指標) 英語または日本語での弁論大会・ディベート大会やエッセイ等のコンテスト参加者数	
	2年	第15回高校生福祉文化賞エッセイコンテスト	2名
	2年	第8回絵本翻訳コンクール	6名
	2年	第17回高校生地球環境論文賞	2名
	2年	JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2017	1名
	2年	第9回「私の志」小論文・スピーチコンテスト	2名
	2年	第1回思わず笑顔になる文章コンテスト	2名
	2年	第8回「言の葉大賞」	3名
	1・2年	第19回高校生小論文コンクール	5名
	2年	第50回産経「高校生文化大賞」	3名
	2年	平成29年度「私と年金」エッセイ	38名
	1年	税の作文	28名
その他			
	外語部	英語劇鑑賞と交流会(ホワイトホースシアター上演実行委員会主催)	2名
	外語部	グローバル語り部の講演会(徳島県教委主催)	2名
	外語部	いつかは留学! The One Day Course(徳島県教委主催)	8名
	2年	鳴門市姉妹都市親善使節団青少年派遣事業(鳴門市)	1名
	2年	トビタテ! 留学JAPAN帰国報告会(徳島県勝浦町勝浦中学校)	1名
	教諭	国際教育・開発教育インフォメーション寄稿(全国国際教育研究協議会)	1名

国際プログラム体験記

徳島サマースクール 2017 by HLAB

ひと夏の世界

101HR 瀧川 凜

水平線に臨む牟岐の町で九日間、私は高校生と大学生と共に共同生活を送った。そこに集った人々は私の狭い色眼鏡の世界を割りにかかってきた。英語話せて当たり前、高校生で起業、カナダの高校からのトリリンガル学生や教授と共同で実験する東京の高校生、日本の大学を中退して海外へ飛んだ人。そうだけでなく、なんらかの特技があったり、人間的に成熟した人ばかり。そんな彼らとの日々は、初めこそどろどろしたものの、同じ釜の飯を食べ寝て、机に向かう中で私は、新しく至極刺激的な世界を目の当たりにした。

HLABはリベラルアーツに基づい

たテキストカウション形式の授業を展開している。リベラルアーツとは文系理系などに限らない学問の事。ここでは大学の授業を少しかじったようなものを選ぶことができる。文系人間の私であるが物理をとつてみたりした。他には法律、経済、音楽、心理学、情報講義まであった。小難しくないよう噛み砕いてくれているので学問そのものを純粋に楽しむことが出来た。しかし、それらは海外大学生による進行なので基本英語で進められた。バイリンガルの大学生や同じメンバーの人に助けってもらいながらやこの思いで行くことができた。

そんな中、一人の大学生が昔の前でこんな事を言っていた。「なんでもやってみよう！でしよばつてからかう奴はここにはいない。この空気を活用し

る」と。すると、私はしがらみから解き放たれた。そんな気がして少し自分本位に動いてみた。他の人を待たせてでも自分一人で英語で伝えようとしてみたり、同級生の会話に入り込んでみたり、と。そうしてみると、その時間が何倍も充実し濃厚なものとなった気がしたのだ。視界を狭めていたのは自分自身だった。少し何かが変わるだけでこんな楽しい世界があったのか、と今更ながら気がついた。今までずっと決めてつけていた進路を、もう一度、他の可能性を探ってみたくなくなった。

そして、人間関係も驚く程深くなる。過ごした時間や年齢など関係ない。悩みを打ち明け、夢や希望を分かち合つて、星が輝く夜空を共に眺める。そんな素敵な関係があることを知った。

世界は広い、友達は大切だ等。そんな言葉は使われすぎて聞き流してきていた。しかしこの夏、その言葉の本当の意味を初めて知った。いかに自分が「知つたつもり」でいたかに体感するものが私を成長させた。

素晴らしい人たちと会った夏

104HR 小川 暖

今までにこんな素晴らしい人たちと会ったことはない！一言でサマースクールの感想を述べるとこうなります。

自分が想像していたサマースクールと実際に参加したサマースクールは全く異なるものでした。参加する前には、自分はこのサマースクールのことを単なるイングリッシュキャンプだろうと想像し、英語の力を伸ばせたいなら軽く思っていただけでした。しかし、実際はそんなものではありませんでした。自分が得られたものは英語の力ではなく、多様な人と出会い、会話し、関わりながら得た自分を見つめなおすきっかけです。

サマースクールで出会った人には、驚かされることばかりでした。高校生には、自分の考えをしつかりと持っている人、英語を完璧に操れる人、とても短い時間で考えをまとめスピーチができる人などがいました。高校生との仲間には本当に刺激を受けました。もしも、彼らに会わなければ、自分は井の中の蛙になっていたかもしれません。この出会いを通して、新しい世界を知

ることができました。また、もつと努力をしてあんな風になりたいという目標が見つかることができました。

HLABを運営する大学生も素晴らしい人ばかりです。自分はこのように真剣に自分たちの悩みや将来のことについて考えてくれる人に出会ったことになりました。こんな人たちに会えるのはHLABしかありません。

自分が大きく影響を受けた、信じられないほどポジティブな一人の大学生の方について書きます。彼女が言っていたことで心に残つたのは「自分に見えているものが百パーセントじゃない」ということです。自分がしんどくつらい時はいいようになった時自分に見えていないところで頑張ってくれている人のことを意識すると、イライラした気持ちも減ると言っていました。自分はこの人から、自分の考えについてのヒントを得ることができ、少し考え方が変わりました。

最後に、サマースクールに参加しようと思っている人に伝えたいことを書きます。まず、期間中にノートを持ち、夜には日記を書くべきだと思えます。大学生から話を聞いても、メモを取らず、内容を忘れてしまうと本当にもつたないからです。また、日記は一生の思い出になると思います。自分

を見つめなおし、変えることができるサマースクールにぜひ、参加してください。

人生をかえた九日間

1101HR 柳澤明旨

八月十六日から二十四日までの九日間HLAB主催のサマースクールに参加した。ここでは、全国各地から選ばれた高校生五十人と、外国人を含む運営委員である大学生四十二人が牟岐町に集まり様々なセミナーやワークショップを行う。セミナーという授業をはじめ、行事は基本すべて英語で行われる。過去に参加した友達からとても楽しかったと聞いていたため胸をふくらませながら挑んだ。しかし、初めの二、三日は正直あまり楽しめなかった。英語は他教科と比べると得意だと思っていたのに周りの友達自分より比にならないほど英語が出来ていくのが大変、知らない単語が多すぎて初めは気が潰れてしまふ、など色々な衝撃的な事がありすぎて楽しむというより一つ一つのことをこなしていくのが精一杯だった。自分の難易度を何度か感じ、逃げ出して帰ろうかと思つたことさえあった。でも日ごとに慣れていくうちに友達もたくさん増え、みんな

に追いつけるようにもつと英語がなればもうと前向きな気持ちになることができた。これはまさかなく仲間ののおかげだ。セミナー中分らないことがあったら丁寧に教えてくれ、フリータイムでは誰目も話をして盛り上げてくれる大学生。一緒につらい事や楽しい事を乗り越えていける高校生の友達。初めは顔も名前も知らなかった人達ばかりだがいつの間にか私にとつてなくてはならない存在になっていた。

このサマースクールに参加しようと思つた最初の動機は、自分の英語力を伸ばしたかったから。もちろん英語の勉強もたくさんできたがそれよりもかけがえのない仲間に出会えたことの方が私にとつてとても貴重な経験となつ

た。初日は帰りたいとまで思っていたのに最終日にはメンバー全員と離れるのが辛すぎてみんなを肩を抱き合せて泣いた。たつた九日間一纏めに生活しただけなのにまるで家族のように感じられるこのメンバーが私は大好きだ。今でも時々集まつたり連絡をとりあつたりしている。サマースクール中、みんなのモットーになっていた「Be your role」という言葉。これは「昨日の自分に出来なかったことを今日できるようにする」という意味だ。これからも人との出会いを大切に、日々「Be your role」していけるように頑張りたいと思う。このかけがえのない仲間と共に過ごした九日間を私は一生忘れない。

平成29年度 **高校生「シユニア観光ガイド」養成講座**

「地元再発見！」

101HR 安野 理央

私は、「観光ガイド」と聞いたとき、外国人の方に観光地などを案内し、とても忙しいものだと思っていました。また、事前に行ういろいろなシチュエーシ

ョンを想定して勉強していたので、その成果を絶対に活かせるものだと思つていました。しかし、いざ案内しようとして阿波踊りやラフティング世界大会などのイベント会場の所に行つても、観光ガイドを必要とする外国人の方はあまりいませんでした。「どうして外国人の方は徳島に来て困ることがなま

りないだろう？」と不思議に思いました。そこで、自分が旅行に行きたいことを思い出してみました。私は、旅行の前にインターネットで有名な観光地や食べ物などを調べます。私に限らず、ほとんどの人が旅行の前にいろいろと調べるでしょう。徳島に来た外国人の方もスマートフォンやタブレットを持っていて、ある程度徳島のことを調べてきているようで、観光ガイドをあまり必要としない様子でした。少し残念でした。しかし、私もせっかくなのでいろいろと準備してきたのだから、積極的に声を掛けてみました。そうすると、明るく話をしてくれたり、不安なことや心配なことを聞いてくれたりしました。観光ガイドには、積極的に声を掛ける力が必要なのだと思います。

今回、観光ガイドをして気づいたことは、徳島のすばらしさです。これまでは、「徳島は田舎だ」「何もいいところがない」と思っていました。しかし、実際にお滞路体験をしたとき、今まで気付かなかった徳島の魅力に気付くことができました。また、三好市で開催されたラフティングの世界大会では、三好市の川の美しさや自分と近い世代の人の活躍を実際に目撃することが、多くの刺激を受けました。これ

らの体験から、徳島には実際に体験してみないと分からないすばらしいものがあると実感することに気付きました。観光ガイドということで、英語で話すことはかなり気になっていましたが、英語そのものよりも、英語で話す内容の方がいかに大事か、また、徳島のことをよく知っていないと、徳島の魅力をうまく伝えられないということに気づきました。そして、地元の人こそ徳島の観光地を巡り、徳島の魅力を再発見してもらいたいと思いました。

シニア観光ガイドに参加して

10月18日 福田 杏

シニア観光ガイドは、高校生が県内の観光地など数々の名所や歴史を学び、外国人のガイドをするという活動です。私が、活動を通して学んだことは二つあります。

一つ目は、やはり「英語力」です。大きく感じたのは、夏の阿波踊り期間に、駅前で行っている外国人の手助けをした時です。私は、ドイツから来た親子に対応しました。その日に宿泊するホテルを探してほしいという要望でした。そこで、観光案内所や外国人客

内所で尋ねましたが、もうホテルは空きがないと言われました。どうしようもないのですが、親子の残念な気持ちと、暑い中歩かされた疲労感が伝わると、私は申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。もともと英語が話せたらスムーズに案内が出来て、親子の役に立てたかもしれないのに、と力不足を感じました。しかし同時に、阿波踊り期間のホテル不足問題や外国人への対応や配慮など、行政の課題も感じました。ガイドとして活動するためには、継続性だけでなく、あらゆる事を想定したシミュレーションをし、事前に準備をしたり、相手が分かりやすい英語を話したりすることも大事だと思いました。

二つ目は、「徳島の文化を体験する機会」です。活動の一つにお滞路体験があり、お滞路に興味のある外国人と共に礼所を巡りました。訪れた礼所に関するクイズを出したり、実際にお清め、鐘うち、参拝を体験したり



しました。一緒に歩いて巡ったので、タイやフィジー、アメリカの人と、その国の文化や有名な物について会話を弾みました。意外と外国人お滞路さんが多かったことにも驚きました。やはり、徳島の有名な場所、文化は知っているだけよりも、実際に自分が訪れて体験すると、より知識が得られて新たな魅力の発見に繋がると思いました。

観光ガイドとして活動する上では、ただコミュニケーションをとるのではなく、情報を集めて、その情報を発信する、そして要望に応えるという三段階のサイクルが重要だと分かりました。また、初めてお滞路体験をしたように、徳島の文化をより身近に感じることができました。私の今後の課題は、単語力と即興のスピーキングです。シニア観光ガイドのように、英語に興味のある同年代の人や外国人と関わることのできる貴重な体験を生かして、このような力を身につけていこうと思います。



鳴門市姉妹都市親善使節団青少年派遣事業

「ドイツでの発見」

12月5日 近藤 真緒

私は鳴門市のプログラムで姉妹都市のリエーネブルク市を訪問し、貴重な文化体験をさせていただきました。その中でも、私が特に心に残った経験を三つ挙げたいと思います。

一つ目は、学校の雰囲気です。私が訪問した学校は二十人ほどのクラスで、それぞれが興味のある学問を学べるよう、分野ごとにクラスが分けられていました。ディスカッション中心の授業で、メモはほとんど取りません。「なぜ」「この公式が導かれるのか」「どうして」との事件は起こったのか



を議論します。日本は丸暗記を基礎において学習しますが、ドイツの授業では事象の原因と結果のプロセスを辿ることにより、学びの奥深さを知ることができ、知識だけでなく考える力やコミュニケーション力、創造能力などの向上が期待できます。

二つ目は、人です。ドイツの皆さんは知的で優しくフレンドリーでした。目が合うと、挨拶をしてくれたり、優しく微笑んだりしてくれました。

三つ目は、遺産物と自然です。リエーネブルク市内は赤煉瓦の建物がほとんどで、青い空と赤い家に植物の緑が映えて、どこかの映画の中に飛び込んだような気分になりました。歩いているだけで楽しかったです。空気が澄んで



いて、心が洗われました。異文化を異文化だと決めつけて探求しないままに終わらせることは非常に勿体無いことで

す。互いの文化を理解しようと努力する姿勢こそが世界平和や人種差別解消に繋がります。私の場合、異文化に触れることで物事の新しい見方や考え方を学べることができました。

2020年のオリンピック開催国に決まり、近年、日本の文化や技術に注目が集まっています。確かに日本には誇るべき点が多々ありますが、世界は広いのです。時に日本を客観的に見ることも大切です。世界から見ると日本から見る日本は当然全くの別物です。客観的に自国を見ることは色んな気づきがあつてとても面白いです。特にドイツはヨーロッパの中でも先進国



で今回の訪問で学んだことは多かったです。

皆さんも、ドイツに行ってみませんか。

トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラム

オーストラリア長期留学

12月1日 森脇 聡

私は「トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラム」に参加しました。これは、文部科学省と企業が協働して、日本の高校生・大学生を世界中に送り出すという国家プロジェクト

です。留学先や期間、そして留学内容を含め自分で決められることもあり、「トビタテ生」は100か国以上に留学しています。

高校生コース第一期生として私が



SGH 第3回インドネシア研修

2017年7月31日(月)～8月5日(土) 計4泊6日
 引率教諭/田中 千寿、栗飯原俊輔 ●生徒/男子6 女子8 計14名

今年度も、大塚製薬徳島本部やインドネシアの現地法人アメルタインダ大塚、ASEAN 日本政府代表部の全面的な協力のもと、第3回インドネシア研修を実施しました。

今回の研修で最も大きなプロジェクトとなったのは、現地の小学校における環境・衛生についての啓発活動です。6月に、アメルタインダ大塚の中田さんより、発展著しいインドネシアでゴミ問題が深刻化しているというお話がありました。問題に対する人々の認識が高くないということも事態の悪化に拍車をかけていることも知りまりました。そこで、子供の頃の認識が大切であると考え、今回、現地の小学校で啓発活動をするようになりました。活動は、第1回研修から交流を続けている Stella Maris 校生と共同で実施しました。テレビ電話や SNS を活用して、早い段階から相談しながら、事前準備を進めました。当日は、子供たちが生き生きと活動に参加してくれ、自分たちの目標を達成することができました。この活動を一適性のものでも終わらせないように、今後も追跡調査をし、Stella Maris 校生とともに活動を継続する予定です。

お世話になった皆様 (■は現地に)

- 大塚製薬徳島本部
- アメルタインダ大塚 (スカブミ工場・ジャカルタ事務所)
- ASEAN 日本政府代表部・日本大使館
- Stella Maris 高校、Al Azhar 高校 Kelapa Gading 支校



社員のみなさんと昼食

※※※

AIO 内にて記念写真

板東社長のお話

啓発員さんにお礼

高校でサンブリング

スカブミ工場前で

約十か月間留学したのは、オーストラリア・クィーンズランド州の Mitchell State High School です。初めての海外、初めての留学は私にとって新しい経験や発見の連続で、留学を終えた今、心から「留学して良かった」と言えます。

しかし、留学中ずっと楽しく充実した生活を送っていたわけではありません。むしろ、挫折の連続だった期間の方が何倍も多いと思います。ミスや忘れて英語を話すことそれ自体が怖くなつてしまったこと。自信を失つて無気力になってしまったこと。言われなき差別を受けたこともあり。それらで、留学出来たことに感謝し、またいつか留学したいと思うのはもちろん、これらの挫折を乗り越えられたという自信が生まれたからだと思えます。



留学当初
 How are
 You Hate,
 さえ聞き取
 ることが出
 来なかつた
 私は、まご
 もに話せな
 い自分が恥
 ずかしく、
 英語を話す

ことから逃げ
 てしまうこと
 がありました。
 た。しかし、
 留学に来てま
 でそんな自分
 であることの
 方が恥ずかし
 いと思い、毎
 日自分にノルマを課して生徒に話しかけるようにしました。やがてその中から一人二人と友達が出来、学校に行くのが楽しいと思えるようになりまし
 た。最後まで流暢に話すことは出来な
 かつたけれど、帰国前、友達が私のこ
 とをベストフレンドと呼んでくれたと
 きは、一人胸が震えました。

トビタテ生として、また地元勝浦町のふるさと大使として活動しようとする中でも、最初は上手く交渉が出来ませんでした。私は城東高校で邦楽部に所属していたため、現地で琴を弾いたり、勝浦町の雛人形を紹介する機会を得ようとしていましたが、何度も断られ続けました。けれど、諦めずに伝え方を考えていく中で想いははまり、アシアンショップや学校で琴を弾いたり、また現地カレッジの日本語を学ぶクラスに呼んで頂いたりしました。休日はアシスタントとして現地の日本語学校



で一か月半ほどボランティア活動をしていましたが、それらは、何度も断られる中で得たチャンスだったと思います。

「留学」には、メリットがあります。それは、自分の努力や挑戦を後押ししてくれて、さらに未来の自分の可能性をもっと広げてくれることです。もちろん、眠るべき人がいない異国の地で、挫折したり、辛いことがあつたりするかもしれませんが、しかし、自分以



外を頼ることができない環境だからこそ、自分をより成長させてくれるのかも」れません。

「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」では、十四日間以上の留学計画から応募することができます。語学力は一切関係ありません。必要なのは、ただ「熱意」だけです。城東高校から、徳島から、トビタテください。今まで知りえなかった世界もそこには広がっています。



第3回SGHインドネシア研修

出発 2017年7月31日 6日間
帰国 2017年8月5日

日次	日	曜	地名	現地時刻	交通機関	旅 程 (宿泊地)
1	7月31日	月	徳島空港発 羽田空港着 羽田空港発 ジャカルタ空港着 ホテル着	7:40 8:55 11:45 17:15 19:00	JAL452 GA875 専用バス	国内線で羽田空港へ 空路：ガルーダ航空直行便にて、ジャカルタへ ホテルにて夕食 (ジャカルタ)
2	8月1日	火	ホテル発 ホテル着	7:30 9:00 11:00 14:00 19:00	JTBバス ボカリバス	朝食後、ホテル出発 板東社長によるアメルタインダ大塚 (AIO) インドネシア における企業進出についての講話と質疑応答 AIO 紹介プレゼンテーション 昼食：AIO インドネシア人幹部の方々と懇親会 Stella Maris 高校訪問 授業参加 ワークショップ・翌々日の準備・リハーサル 大塚製菓社員と夕食 ホテルへ (ジャカルタ)
3	8月2日	水	ホテル発 ホテル着	8:30 9:30 13:30	JTBバス	朝食後、ホテル出発 ASEAN日本政府代表部 (日本大使館) にて書記官2名にイ ンタビュー (事前準備して送付している質問を基に、質疑応答) 市内レストランにて昼食 Pocari 啓発活動に参加 (2手に分かれてサンプリング活 動等) ①フットネットスラム・国立高校フットサルチーム 市内で夕食 ホテルへ (ジャカルタ)
4	8月3日	木	ホテル発 ホテル着	6:30 9:00 12:30	ボカリバス	朝食後、ホテル出発 スカブミ工場周辺の Manggis 小学校へ 日本文化を紹介した後、Stella Maris 校生とともに環境・ 衛生について啓発 AIO スカブミ工場へ 工場スタッフの方々と交えて昼食 工場見学・体験アトラクション・Stella Maris 校生と歌 の交換をしてお別れ ホテルにて夕食 (ジャカルタ)
5	8月4日	金	ホテル発 ジャカルタ空港発 羽田空港着	7:00 8:00 11:30 14:00 20:00 23:35	JTBバス GA888	朝食後、ホテル出発 AI Azhar 高校 Kelapa Gading 支校 (イスラム系私立高校) 訪問 校内のモスクにて金曜礼拝を見学 市内レストランにて昼食 市内見学 (国立博物館、独立記念塔、モスク、大統領官邸) ショッピングなど 市内レストランにて夕食 夕食後、ジャカルタ空港へ 空路：ガルーダ航空直行便にて羽田へ (機内泊)
6	8月5日	土	羽田空港発 羽田空港着	8:50 11:50 13:00	JAL457	国内線で徳島へ

生徒の感想

インドネシア研修を終えて

二〇一七 中村三樹那

「経済があまり発展していない国」「情勢が不安定な国」……。研修に参加する前の私は、事前学習をすればするほど、期待よりも不安な気持ちが強くなっていました。しかし、現地の人々と通じていくうちに、私が持っていた不安やマイナスのイメージはいつの間にか消えていました。むしろ、予想外の事や驚かされる事が多く、もつとインドネシアに関する色々なことが知りたい、という好奇心が生まれました。

インドネシア研修中、最も感じた事は自分の英語の稚さでした。多くの場面で英語でのコミュニケーションが必要だったのですが、私はすぐに返事をする事が出来ませんでした。伝えたい気持ちはあったのですが、私の英語力ではなかなか伝えられずもどかしい気持ちになり、いかに語学力が必要かという事に改めて気づかされました。最近「グローバル化」という言葉がよく

目にするようになりましたが、まずコミュニケーションをとることができるだけの語学力がないと、得るものも少なくなってしまうと思えました。

私は今まで英語や海外に興味はあっても、新しい一歩を踏み出すことが怖く、一度も海外研修に参加したことはありませんでした。しかし研修を終えてから、日本だけではなく他国の様々な出来事に関心が向くようになり、視野を広げてみようと思える気持ちが強くなりました。今回の研修によって自分の一歩で視野が広がり、見えてくる世界も変わる事、そして、世界から日本を見ることで今まで見えていなかった事に気付くことができました。

バスの車窓から見たジャカルタの町には、想像を遙かに超える高層ビルがたくさん建ち並び、多くの車が行き交っていました。しかし、高速道路を走っている時、車窓からはスラム街らしき街並みが見え、またまた大きな経済格差があることを実感しました。このような社会の中で、私が出会ったインドネシアの子ども達からは大きな力を感しました。そして、何事にも積極的に、自分の夢に向かって努力を続けているインドネシアの高校生からは、私



小学生にプレゼン



七夕を紹介



小学生に啓発活動



Stella Maris 生と啓発活動



掃除員をもらって大書ひの小学生



現地メディアのインタビューを受けました

たちの世代が努力してこれからの社会を作っていくかなければならないという事を教えてもらった気がしました。

現地の高校生と交流して

二〇六HR 豊橋 佑佳

私がインドネシア研修で一番印象に残っているのは、現地の高校生と交流したことです。今回、現地の小学校と一緒に啓発活動をしたのですが、その中で私は彼らからたくさんことを学びました。

まず、自分の英語力の低さを実感しました。私たちはインドネシアに行く前からSNSで連絡をとっていました。文章だと少し考える時間があったので、何とか伝えることができていました。しかし、実際に会って話すと、相手と話すスピードが速くて何だか聞き返してしまい、なかなか言いたいことがお互い伝わりませんでした。そのせいで、自分から話しかけるのをためらってしまった時があつたのを、とても後悔しています。英語の先生が、「受験英語の勉強だけでは実際に英語が使えているとは言えない」とおっしゃっ

ていたことを痛感しました。現地の高校生はどうして英語が上手なのか聞いてみると、普段から使っているのが慣れていると答えました。私も英語の新聞を読んだり、現地の高校生とSNSで会話を続けたりして、普段から英語を使おうと思いました。そして、次に外国人と話す時には、スムーズに相手とコミュニケーションを取りたいです。

また、視野が狭いことも実感しました。現地にはインドネシア語、英語、日本語を話せる高校生が数人いてとても驚きました。私はまだ英語も十分に話せないのに、高校生の中から第三外国語を習得することなら考えたこともありませんでした。早く英語を習得して、自分の武器にしたいと心から思いました。

さらに、啓発活動の時の、現地の高校生のプレゼン能力に驚きました。私たちは原稿を読むことや覚えることに必死なのに対して、彼らは一切原稿を見ず、相手の目を見てショークを交えながら話をしていました。作っていた資料もわかりやすく、高校生が作ったとは思えませんでした。私も、今回見たプレゼンを参考に、人を惹きつ

けられるようなプレゼンをしたいです。

私は、啓発活動は彼らがいたからこそ成功したのだと思っています。私も速やかに大人っぽくて、まさにグローバルリーダーだと思いました。私も今回一緒に活動して得たものを生かして、将来世界で活躍するグローバルリーダーになりたいです。

インドネシア研修に参加して

二〇八HR 河野 敦人

研修に参加する前にインドネシアについて知っていることは「イスラム」「ジャカルタ」「バリ島」くらいだった。東南アジアの国々に対してあまりよいイメージをもっていなかった。研修前に現地でテロが起こり、正直不安な気持ちもあった。しかし、現地での六日間私のイメージは変わった。首都ジャカルタには高層の建物が建ち並び、セキユリティシステムも整備されていた。また出会った人々は皆優しかった。一方、ホテルの部屋からの景色は経済格差の著しさを表しているようだった。高層ビルやホテルの隣にト

タン屋根の平屋が所狭しと並んでいた。

研修に参加して、自分が変わったと思うことが二つある。まず、何事にも挑戦することの大切さを実感した。今までは、初めてのことに對して、躊躇して消極的になってしまいがらだったのが、今回さまざまなことに挑戦してみ、実際に体験して分かることがたくさんあると感じた。もう一つは、英語の大切さを再認識したところである。現地の人たちは、英語がとても上手で驚いた。これからグローバル化が進む中で、外国人とのコミュニケーションは英語が主となるだろう。コミュニケーションを取るために、英語をしっかりと勉強し、スムーズに不自由なく外国人と関わることができるようになりたい。

今回の研修で最も心に残ったのは、A I Oの板東社長の「成功する人は、他人の気持ちが介かり、他人のために動ける人」という言葉だ。この言葉を常に意識して生きていこうと思った。この研修には新しい発見がたくさんあった。関わってくれた人に感謝したい。



社員食堂で昼食



スカプ三工場の説明



体験型アトラクション



スカプ三工場内で



Stella Maris 生とお別れ



AI Azhar 高校で大歓迎を受け



中田さんを囲んで



AI Azhar 校生とともに



ヘジャブをいただきました



一緒にゲームをしました



別れを惜しみました



国立博物館

君の記憶にレボ☆リユーション！

— 意図的に記憶力を高めることはできるのか…？ —

20501 青木 一真

20514 川西 雄大

20525 武田 悠雅

20532 西谷 汐織

20841 三原 菜那

20845 吉成 遥香

1. 基本知識・問題の背景と仮説，研究手順

(1) 基本知識・問題の背景

そもそも記憶とは、「物事を忘れずに覚えておくこと」で、人生において欠くことのできない機能である。しかし、記憶は時間とともに消えていってしまうもので、そのことは人が必要なことを忘れてしまう原因となる。

図1・図2は、城東高校生を対象としたアンケート（916人が回答）の結果をまとめたものである。この結果からもわかるように、多くの人たちが記憶の保持に悩み、より能率的な記憶法を求めているのだ。

さらに、このような状態が、城東高校生のみならず世界中の人々に当てはまることを考慮すると、「意図的に記憶力を高めることができるのか」という課題はグローバルな課題であると見ることができるだろう。

(2) 仮説

以上のことを踏まえて研究を進める上で、「人は意図的に記憶力を高めることができる」という仮説を立てた。

(3) 研究手順

これらの動機等を踏まえつつ、「環境・行動と記憶」、「生活習慣と記憶」の大きく2つのテーマに分けて調査した。

①日頃の学習やテスト勉強・日常生活において、覚えたいことをうまく記憶できないことがある

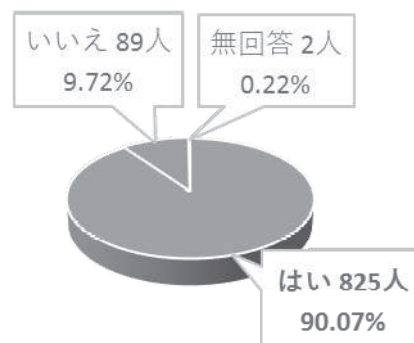


図1 アンケートの回答①

②覚えるべきことを、より能率的に記憶したいと思う

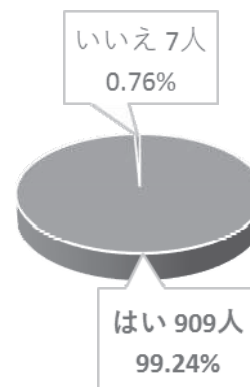


図2 アンケートの回答②

2. 環境・行動と記憶の相関

(1) 記憶力と五感

五感からの情報は脳皮質経由で海馬へ到達する。そして、海馬は五感からの情報が必要であるか判断し、不要なものとして消去するか重要なものとして長期記憶にするかを定める。入ってきた情報全てを長期記憶にすると脳はパンクしてしまうので、海馬ではほとんどが削除される。

短期記憶を長期記憶にする方法として、「何度も繰り返す」、「すでにある長期記憶と結びつける」、「脳のはたらきを活性化する」などがある。特に「脳のはたらきを活性化する」については、慣れないことをすると良い。例えば、普段右手で鉛筆を使っている人は左手で鉛筆を使ってみるなどである。こうすることで、脳に覚えたい情報を蓄えることができる。

(2) 記憶力と感情

快不快や喜怒哀楽のような感情を伴う記憶は「情動記憶」と呼ばれ、記憶に残りやすいと言われている。その理由として、感情が刺激されると、脳から記憶を増強する作用を持つ神経伝達物質が分泌されることが挙げられる。特に「ドーパミン」「ノルアドレナリン」「セロトニン」は情動記憶の形成に大きな関わりを持つ。

「ドーパミン」は、「快感」や「喜び」のような感情に伴って分泌される。テストで良い点を取れた快感や楽しい思い出に関する記憶は、このドーパミンの作用によるものである。

「ノルアドレナリン」は、「怒り」や「不安」、「恐怖」を感じたときに分泌される。これは神経を覚醒させ、やる気や集中力を高める作用を持つので、記憶力向上に欠かせないのである。

そして「セロトニン」は、「ドーパミン」と「ノルアドレナリン」の働きを制御し、精神を安定させる働きを持つ。

ゆえに、記憶力を高めるためには、これらの神経伝達物質を分泌させる必要がある。つ

まり、意識的に感情をコントロールすることで記憶力向上が期待できるのだ。

3. 生活習慣と記憶の相関

(1) 記憶力と睡眠

睡眠には、浅い眠りのレム睡眠と深い眠りのノンレム睡眠がある。私たち人間は、これらの周期を繰り返す過程で、記憶力の整理・分類・定着などを行っている(図3)。つまり、人は寝ているときに記憶を確立していると言える。

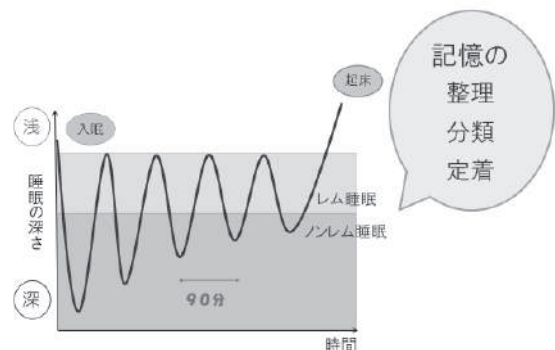


図3 睡眠の周期

また、睡眠不足は脳のブドウ糖を減少させ、注意力や情報処理の正確性などの認知能力を低下させることもわかっている。やはり、記憶力向上には、睡眠は必要不可欠である。

他にも、新しい学習を行ったあとすぐに寝ると、他の情報が入ってこない内に脳が情報処理を行うため、特定の記憶を強化できること(図4)や、30分程度の昼寝は、記憶力向

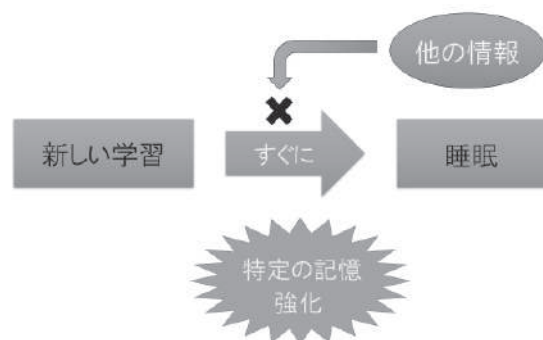


図4 記憶強化の仕組み

上や認知症予防にも効果があるということも言われている。

(2) 記憶力と食事

(i) 朝食

朝食で適切なエネルギーを摂取した場合、そうでない場合に比べて記憶の正確さを測るテストで高得点が見られた。また、朝食でブドウ糖を摂取することが大切である。ごはんやパンに多く含まれるブドウ糖は、脳のエネルギーとなるからである。以上のことより、記憶力を向上させるには朝食でのエネルギー補給は必須である。

(ii) 栄養素

- ・ビタミン B₁は、ブドウ糖を脳のエネルギーとして利用するための重要な栄養素である
- ・ビタミン B₆、ビタミン B₁₂は神経伝達物質の合成に関連した大切な働きをする
- ・カルシウムには、脳の神経細胞間の情報伝達を促進する働きがある

以上を例として、食品に含まれる成分は、記憶力に何らかの影響を与えている。

(iii) その他

コーヒーは疲れた脳を休ませる効果があり、一度休ませることにより再び脳が活性化し記憶力が向上すると考えられている。また、コーヒーに含まれるカフェインは覚醒作用から、記憶力に良い影響を与える。しかし、カフェインの取りすぎは体に良くないため、コーヒーの飲みすぎには注意する必要がある。

チョコレートやローズマリーは主に香りにおいて記憶力に良い影響を及ぼす。

(3) 記憶力と運動

一見何の関係もないように思える記憶力と運動であるが、実は深い相関がある。

まず、運動をすると脳へ行く血液の量が増え、それによって脳が活性化する。さらに、運動をすることで脳の神経細胞が増加し、記憶力向上につながったという研究結果もある。

実際に、適度な運動のあとに記憶力のテス

トをすると成績が向上することも研究で証明されている。このような事実からも、適度な運動が記憶力向上に重要な役割を担うことがわかる。

4. 結論

このような研究結果から、記憶力を向上させる環境や行為が明確に存在することが分かった。そして、「人は意図的に記憶力を高めることができる」という結論を得た。

5. 提案

最後に、記憶力を向上させる生活習慣と、記憶したことを忘れないようにする学習方法を盛り込んだ1日の流れを提案する。

(1) 朝～昼

- ・朝食前の空腹時に記憶する
- ・朝食をしっかり食べる（特にブドウ糖補給のためご飯やパンを食べる）
- ・モーニングコーヒーを飲む

(2) 昼～夜

- ・栄養バランスのよい食事をとる
- ・習慣的に適度な運動をする
- ・30分間程度の昼寝をする
- ・間食にチョコレートを食べる
- ・覚えたいことは寝る前に記憶する
- ・十分な睡眠をとる

(3) 勉強中

(i) 五感を利用する

- ・音読をする・連想語を考える
- ・色の使い方、濃淡に工夫を施す

(ii) 感情を利用する

- ・程よい緊張感の中で、学習する
- ・学習する物事を感情と結び付けて覚える

6. 参考文献

1. キャスリン・ジェイコブソン・ラミン
藤井留美訳『記憶力をのばしたい!』講談社、2008年7月
2. 川島隆太『元気な脳が君たちの未来をひ

- らく』くもん出版，2012年10月
3. 米山公啓『無理せず覚える記憶術 - こうすればあなたの記憶力はまだまだ簡単に伸びる!』インデックスコミュニケーションズ，2006年1月
 4. 加藤俊徳『記憶力の鍛え方』宝島社，2014年10月
 5. 高橋雅延『記憶力の正体 - 人はなぜ忘れるのか?』筑摩書房，2014年6月
 6. 榎本博明『記憶力を高める科学』SBクリエイティブ，2016年8月
 7. 石浦章一『運動・からだ図解 脳・神経のしくみ』株式会社マイナビ出版，2016年4月
 8. 樺沢紫苑『覚えられない記憶術』サンマーク出版，2016年1月
 9. ペネロペ・ルイス 西田美緒子訳『眠っているとき、脳では凄いことが起きている』インターシフト，2015年12月
 10. 山下富美代『記憶力をつける』日本経済新聞社，1997年8月
 11. 池谷裕二『記憶力を強くする - 最新脳科学が語る記憶のしくみと鍛え方』講談社，2001年1月
 12. 櫻井武『睡眠の科学 改訂新版』講談社，2017年8月
 13. 吉田晋「運動10分間で記憶力アップ? 脳の機能活性化か」『朝日新聞DIGITAL』2017年2月7日
 14. 「記憶力が今すぐアップ効果絶大4つのコツ」『日経ウーマン』2016年10月号
 15. 「おなかですくと記憶力アップ」『日本経済新聞』2013年1月25日
 16. 宮本大祐・村山正宜（理化学研究所脳科学総合研究センター行動神経生理学研究チーム）『ノンレム睡眠における皮質のトップダウン入力による知覚記憶の固定化』2016年
 17. 横越英彦『栄養と脳機能に関する基礎研究』2006年
 18. 小林幸子 坂本元子 飯淵貞明 内田雅人 三橋洋子『朝食摂取が持つ知的作業への影響』2000年

オオカミの遠吠えは緑をよぶか

20528 多田 圭織 20716 郡 健太
20717 古川 純也 20802 池森 加奈恵

1. はじめに

ニホンオオカミはイヌ科の哺乳類でかつては本州・四国・九州に生息していた。しかし、狂犬病などの家畜伝染病や、その拡大を防ぐための人為的な駆除、開発による生息地の変化など様々な要因により、1905年に絶滅した。

一方、天敵がいなくなったニホンジカは、ハンターの減少等の要因も重なり、近年急増しており、生態系のバランスを崩す一因となっている。ニホンジカによる農作物の被害が深刻な場所も多い。

そこで、私たちは、オオカミを導入することで、ニホンジカが捕食され、個体数が適正値になり、森林に緑が戻るのではないかという仮説を立てた。

2. 研究内容

(1) ニホンジカの現状について

図1は全国におけるニホンジカの生息個体数の信用区間である。信用区間とは、推定したシカの個体数の幅をあらわしたものである。1990年から2010年の20年間で、およそ10倍になったことがわかる。ニホンジカの増加によって、引き起こされた悪影響は次の3つがあげられている。1つ目は、植生の変化である。ニホンジカが植物を非選択的に食べることで、植物が減少している。2つ目は、野生動物の減少である。ニホンジカの過剰採食により、多くの野生動物が棲み処や食べ物を奪われ、生物多様性が低下している。3つ目

は食害である。ニホンジカによる農作物の被害が深刻な場所も多い。

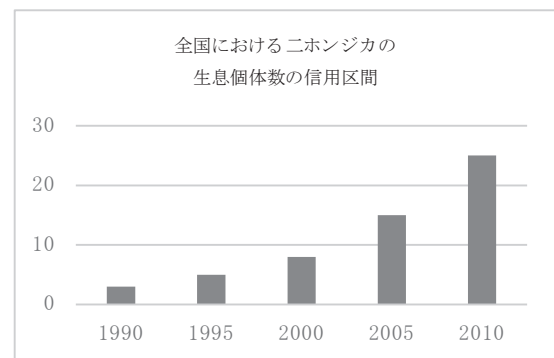


図1 全国におけるニホンジカの生息個体数の信用区間 (出典 環境省)

(2) オオカミ導入の先行事例

世界には、スウェーデンやアメリカのミネソタ州のように、オオカミを実際に導入している場所もある。今回は、その中の1つ、イエローストーン国立公園の導入例を参考にしたい。

イエローストーン国立公園では、野生のタイリクオオカミが人為的な駆除や自然破壊などによって、70年前に絶滅した。そして、アメリカアカシカが増加し、生態系のバランスが崩れた。そこで、1995年から1997年にかけて、絶滅したオオカミと同種のタイリクオオカミがカナダやアメリカのモンタナ州から導入された。

導入から、21年後の2016年には、公園内に108頭のオオカミが生息しており、オオカ

ミの導入による効果の1つとして、アメリカアカシカが減少したり、様々な動物が戻ったりするなど、生態系が改善された。

(3) 四国山地における導入案

他の地域の先行事例をもとに、四国山地にチュウゴクオオカミを40頭導入する案を提案する。

① 四国山地の現状

ニホンジカが増加する一方で、特別天然記念物ニホンカモシカが減少する傾向にある。また、2012年の四国でのニホンジカによる被害は、面積にして2760km²、金額にして1.2億円であり、これは年々増加している。

四国山地は、オオカミを導入するのに、十分な面積があるといえる。なぜなら、四国山地の面積、18297.78km²は、イエローストーン国立公園の面積、8980km²の2倍以上であり、オオカミを導入するのに十分だからだ。

導入数を40頭にする理由は次の通りだ。オオカミは、「パック」という生活グループをもとに生活する。1パックは、3~10頭で構成され、300~500km²の面積を必要とする。その場合は、1頭あたりの面積は、最大で、約167km²となり、40頭だと、6500km²が必要となる。これは、四国山地の総面積の約36%であり、オオカミが住む場所を選択すること、これから頭数が増加することを考慮すると、40頭が最適な頭数だと考えた。

② 導入案の詳細

まず、四国山地の動植物を調査し、これらへの影響を予測し、評価する環境アセスメントを行う。次に、導入を不安視する近隣住民を「とくしま動物園オオカミ見学ツアー」に招待し、オオカミについて正しい知識をもってもらい、オオカミのイメージアップを図る。さらに、モニタリング調査によって、オオカミの頭数の増減を調べる。

また、近隣住民の家畜や飼い犬などが、オオカミによって捕食されるのを防ぐための電気柵の設置に対して、補助金を出すことや、

万が一捕食され、被害を受けた場合を想定した補償制度を作ることも必要となる。

なお、イエローストーン国立公園の実例と比較し、試算を行った結果、緑が戻るまで約80年かかるといえる。

(4) 導入への不安

① オオカミ導入による、生態系の破壊の危険性について

導入を検討しているチュウゴクオオカミは、ニホンオオカミと遺伝子的に近いことが分かっており、かつて日本の生態系に属した動物であることから、全く新しい動物を導入することと比べて、生態系に与える影響は低いといえる。また、四国山地の既存種である、雑食のツキノワグマや、小動物を食べる猛禽類などは、食性が異なることから生態系破壊の危険性は低いといえる。

② 四国山地における適応性について

チュウゴクオオカミは、ニホンオオカミと遺伝子的に近く、また、中国や朝鮮半島、ロシア南部、モンゴルなどの森林や山岳地帯に生息していることから、適応できるといえる。

③ 人を襲う可能性について

過去に、アメリカのキャンプ場で人がオオカミに餌を与えた際に事故が起こったケースがある。このことから、野生動物へ餌付けしないことの周知を図り、オオカミに深く干渉しないことで、対策できるといえる。

また、北海道のクマによる人身被害は、1980年から2000年で399件、つまり1年あたり18件起こっている一方で、カナダでのオオカミによる人身被害は、1969年から2000年で18件、つまり1年あたり0.56件起こっている。データからも、オオカミが人を襲うリスクは低いといえる。

④ 個体数の増減について

図2は、イエローストーン国立公園のオオカミの個体数の増減を示したものである。導入した直後は、右上がりに増加しているが、導入して、15年後くらいから安定しているこ

とがわかる。したがって、オオカミの個体数は、安定していくため増えすぎることはいえない。

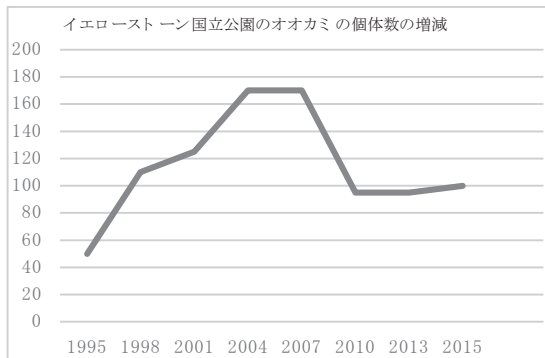


図2 イエローストーン国立公園のオオカミの個体数の増減
(出典 Yellowstone National Park)

④ 小動物を襲う可能性について

オオカミは自分の体重1kgにつき1日に約140g食物を摂取する必要があるため小動物を主食とし、特定の小動物を絶滅に追い込む可能性は低いと考えられる。

(5) オオカミ導入がもたらす効果

まず、特別天然記念物ニホンカモシカの増加があげられる。ニホンカモシカとニホンジカは生息場所、食性において共通点が多い。それらを巡った争いにおいて、ニホンジカがニホンカモシカよりも有利な立場にあるため、ニホンカモシカは減少の傾向にあった。しかし、オオカミ導入により、ニホンジカが減少することで、ニホンカモシカが増加するといえる。

次に、土壌の改善があげられる。植物を非選択的に食べるニホンジカの頭数を抑制することで、植物が増加させ、土壌の改善につながり、その結果、土砂災害の防止や豊かな自然環境の形成につながるといえる。

3. 結論

オオカミの導入はシカの増加を抑え、生態系に良い影響を及ぼし、緑を増やす可能性は

十分にあるといえる。また、四国山地の導入案についても実現を目指す価値はあると考えられる。

4. 参考文献

- 1.朝倉裕『オオカミと森の教科書』雷鳥社、2014年5月8日
- 2.石弘之『世界の森林破壊を追う』朝日新聞社、2003年4月1日
- 3.落合啓二『ニホンカモシカ：行動と生態』東京大学出版社、2016年7月21日
- 4.桑原康生『オオカミの謎:オオカミ復活で、生態系は変わる』誠文堂新光社、2014年2月18日
- 5.丸山直樹『オオカミが日本を救う！：生態系での役割と復活の必要性』白水社、2014年7月24日
- 6.吉野世洋『日本の森にオオカミの群れを放て』ビイングネットプレス、2007年5月1日
- 7.フィッシャー・ハンク『ウルフウォーズ』（朝倉裕・南都成美訳）白水社、2015年4月17日
- 8.マーウィン・ギャリー『オオカミ：迫害から復権へ』（南都成美訳）白水社、2014年4月17日
- 9.モウェット・ファーリー『オオカミが語る：ネバークライウルフ』（小林正佳訳）築書館、2014年1月23日
- 10.奥村栄郎「四国におけるニホンジカ問題：経過と現状」
- 11.石黒直隆「絶滅したエゾオオカミの期限と系譜を探る形態的及び遺伝子学的研究」
- 12.米田正明「知床に再導入したオオカミを管理できるか」
- 13.一般社団法人日本オオカミ協会「スウェーデンのオオカミ狩猟とその管理」
<http://japan-wolf.org/content/2012/04/13>
参照日 2018年1月17日
- 14.一般社団法人日本オオカミ協会「オオカミ

管理に関するミネソタ州概要」

<http://japan-wolf.org/content/2012/07/21>

参照日 2018年1月17日

15.徳島県「四国山地のカモシカについて」

<https://www.pref.tokushimalg.jp/sp/ippannokata/kyoiku/bunka2016042700134>

参照日 2018年1月17日

16.環境省「全国のニホンジカ及びイノシシの
個体数推定値などの結果について」

<http://www.env.go.jp/press/104509.html>

参照日 2018年11月15日

17.農林水産省「全国の野生鳥獣類による農作物被害状況について（平成20年度）」

www.maff.go.jp/j/seisan/tyozyu

参照日 2017年11月23日

18. 生物多様性センター（環境省 自然環境局）「生態系総合モニタリング調査」

www.biodic.go.jp 参照日 2017年11月23日

19.農林水産省「シカの生態と被害対策」

www.maff.go.jp>pdf>07_chapter_4

参照日 2017年11月23日

20.中西安男「四国産ニホンカモシカの生態と課題」35nakanishi.pdf

<https://www.nps.gov/yell/learn/nature/wolves.htm>

参照日 2017年12月23日

プレハブ式仮設住宅は最善の建築方法なのか？

20601 東 優月 20603 石原 弘将 20618 久米 雄士
20619 古賀 咲優未 20641 山口 高幸

1. はじめに

東日本大震災から7年、2018年現在、6万人もの人がプレハブ式仮設住宅からの移行が出来ていない。長い期間プレハブ式仮設住宅に住むことでいろいろな問題が起こっていないのか、また起こっているならプレハブ式仮設住宅以外に最善の建築方法がないのかと考える研究することにした。

2. プレハブ式仮設住宅のメリット・デメリット

<メリット>

プレハブ式仮設住宅のメリットは、現在では、一番安価で建築する事ができ、工期も一番短く完成させることができることである。

<デメリット>

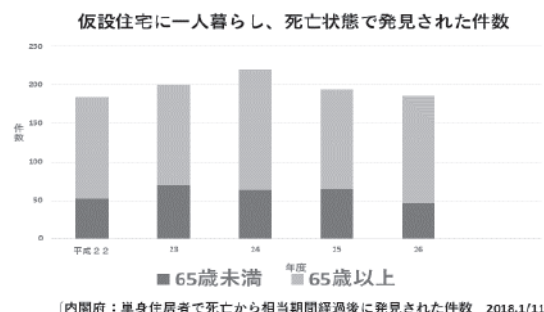
私たちの考えるプレハブ式仮設住宅のデメリットは、以下の3つである。

(1) 子育てがしにくい

まず環境面で、プレハブ式仮設住宅には冷暖房設備があまり整っていない。子供達にとってはとても居心地が悪くなる。もう一つは子どもの騒音の問題がある。プレハブ式仮設住宅は壁が薄いので、子ども達が発する音、特に泣き声などが隣の部屋によく聞こえてしまう。隣の人に迷惑を掛けたくない親には騒音という問題がプレハブ式仮設住宅で子育てをしにくい点としては深刻な問題といえる。

(2) 高齢者の孤独死問題

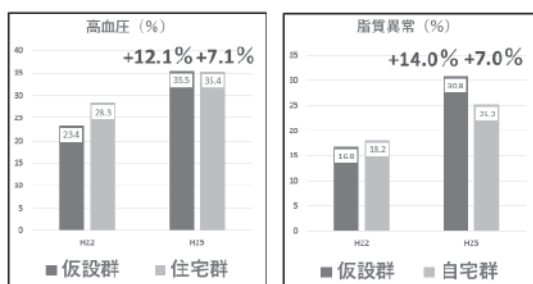
次のグラフは、プレハブ式仮設住宅に一人暮らし、死亡状態で発見された件数を表している。薄い色の部分から、毎年約6割の65歳以上の人が孤独死していることがわかる。こうした事態をふまえ行政だけでなく警察や新聞配達員などが、見守りに一役買う動きが始まっている。しかし経済的な理由により、今なお1000を越える世帯は新居が決まっていない。



(3) プレハブ式仮設住宅で起きる健康問題

次のグラフは、東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県亘理町の2011年と2014年の生活習慣病治療率を示したものである。自宅に住んでいる場合と、プレハブに住んでいる場合を比較している。この4年間で、高血圧では、自宅群7.1%に対し、仮設群12.1%増加している。脂質異常でも自宅群7%に対し、仮設群は14%増加している。この二つどちらの値を見ても、仮設群の方が生活習慣病にかかる割合が高いことがわかる。

* 2011年と2014年の生活習慣病治療率の比較



(東日本大震災後の長期的仮設住宅居住の健康影響：互理町研究2017.11/16)

以上よりプレハブ式仮設住宅は、最善の建築方法ではないと考える。

3. 提案

プレハブ式仮設住宅を建てないなら災害が起きたときにどうやって暮らすのかという疑問をもつ人がほとんどではないのだろうか。これらのことをふまえて私たちはプレハブ式仮設住宅を建てずにコンテナハウスを用いることを提案する。コンテナハウスとは、貨物用のコンテナを再利用した住居のことである。

4. コンテナハウスのメリット

(1) コストについて

従来のプレハブ式仮設住宅に比べコストが安くすむということである。次の表は、宮城、岩手、福島におけるプレハブ式仮設住宅1戸あたりの建設費用を表したものである。プレハブ式仮設住宅は厚生労働省の基準により、建物本体の金額は238万7000円と定められている。断熱材や水道管、電気敷設などの追加費用も考えると、解体も含め1戸約800万円にもなる。

それに比べてコンテナハウスは、建物本体の金額が約16万円、電気敷設や内装などにかかる費用をプラスしても、1戸約115万円におさえることができる。差額はなんと約700万円にもなる。

東日本大震災プレハブ仮設住宅1戸当建設費用

標準額 建物のみ	当初見込み	2012年 3月時点	今後見込まれる追加費用
岩手 宮城 福島 238万7000円	断熱材 土地造成	約530万円	断熱材追加 568万円 風呂追いだき +約40万円
	水道管・ 電気施設	約550万円	窓ガラスの 二重化 トイレの暖 房便座化 664万円 物置設置 +約10万円
	浄化槽・ 浄水層 など	約520万円	風除室 バリアフ リー拡充 574万円 解体 +約100万 円 (8割の住宅 で発生)
			物干し台の 雨よけ など 4万円

(JUIL.COM 厚生労働省と岩手、宮城、福島各県への取材より 2017.12/16)

コンテナハウス1戸当たりの建設費用

工事区分	価格
コンテナ12ft (約5畳)	160,000円
基礎工事	100,000円
電気工事	90,000円
設備工事	100,000円
外壁材 ガルバリウム鋼板	250,000円
内壁材 塗装	60,000円
床材 フローリング	50,000円
天井材 塗装	20,000円
窓	30,000円
ドア	80,000円
シャッター	120,000円
照明	12,000円
エアコン	80,000円
合計	1,152,000円

(AK HOME価格表 2017.12/16)

(2) 強度について

一般的に海上輸送で使われるコンテナは、40フィートであり貨物を最大まで積み込むと24,000kgにもなる。海上輸送の場合は9段ものコンテナを積むことがあり、一番下のコンテナは24,000kg×8段=192,000kgもの重さに耐えることができる。

コンテナハウスは、厚さ2mmの鉄板を使用し海上輸送の為に塩害対策も施されている。そのため、雨や塩風などによる錆に強く劣悪な環境にも耐えられる強度がありメンテナンスをすれば50年後にも使用することが可能である。



(成山堂書店ブログより)



(UNIT 南極でも活躍するコンテナより)

上の写真は、南極にある研究ステーションである。時速 321 kmの突風と-40℃もの厳しい寒さに耐えることができる強固なコンテナハウスで建設されている。

以上のことより、コンテナハウスは耐久性に非常に優れていることがわかる。

5. コンテナハウスの実例

東日本大震災時に海上輸送用コンテナを使用し建てられた三階建ての仮設住宅である。窓を開け自然光を取り入れることにより生活のしやすい室内空間が作られている。また、多層にすることにより棟間隔を約 11m取ることができ、空いたスペースに集会所をつくることで、コミュニティーを形成しやすい環境である。



女川町・コンテナハウス

(東日本大震災 津波 支援プロジェクトより)

6. プレハブ式仮設住宅の問題点と解決策

(1) 子育ての問題について

コンテナハウスはプレハブ式仮設住宅より安く建てられるため差額で十分な冷暖房設備を整えることにより、子供達の居心地が悪いという問題は解決できる。騒音についてもコ

ンテナは壁が厚く気密性・遮音性が高いため、子供の泣き声が周りに迷惑を掛けてしまうなどといった親のストレスを軽減できる。

(2) 高齢者の孤独死について

コンテナハウスで騒音問題が解決され、生活がしやすくなる。また、コンテナハウスを多層化する事により女川町のようにコミュニティーが形成されやすくなり、コミュニケーションが増え孤独死を防ぐことが期待できる。

(3) 健康問題について

コンテナは、過酷な環境でも貨物に影響を与えないよう断熱材が多く使われている。そのため湿気などが発生しづらくなっていて、カビなどで起こるアレルギー反応は改善できる。

以上のことより、プレハブ式仮設住宅のかかえる問題はコンテナハウスを用いることにより、解決できる。

プレハブ式仮設住宅	問題点	コンテナハウス
<ul style="list-style-type: none"> 冷暖房設備が整っていない 子供たちの居心地が悪い 騒音問題 	①子育てがしにくい	<ul style="list-style-type: none"> 冷暖房設備を整えられる 遮音性が高い
<ul style="list-style-type: none"> 騒音問題 コミュニケーションがとりにくい 	②高齢者の孤独死問題	<ul style="list-style-type: none"> 遮音性が高い コミュニケーションがとりやすい
<ul style="list-style-type: none"> カビなどでのアレルギー 	③仮設住宅に住み続けることで起きる健康問題	<ul style="list-style-type: none"> 湿気を防げる →カビが生えない

騒音問題
解決!!

7. 私たちの考えるシステム

まずコンテナをつくり海上輸送用として使う。そして、大きな災害が起きたとき海からコンテナを被災地に届け、陸で組み立て被災地にコンテナハウスをつくる。コンテナハウスが不必要となった場合、内装を取り外し再び海上輸送用として利用できる。このシステムが実現させることができれば、コンテナはISO規格で規定されているため全世界で共有でき、コンテナを運ぶインフラは既に整っているため、被災地に短期大量供給が可能である。

8. 結論

プレハブ式仮設住宅を建てずにコンテナハウスを共有する。

9. 参考文献

1. 『被災者支援のくらしづくり・まちづくり
仮設住宅で健康に生きる。』岩船昌起 2016
年 10 月 9 日
2. 「仮設住宅 2019 年度も存続 4 自治体で」
毎日新聞 2016 年 3 月 10 日
3. 「仮設住宅で孤独死続く被災 3 県、昨年
も 28 人」東京新聞 2017 年 3 月 4 日夕刊
4. 「東日本大震災後の長期的仮設住宅住居住
の健康影響」亙理町研究所平成 27 年 4 月 3
日
5. 「日本内科学会雑誌第 103 巻第 8 号仮設
住宅における健康問題」長純一平成 27 年 8
月 10 日
6. 「応急仮設コンテナハウス」
www.monotsukuri.net/daisinnsai/09/pdf
参照日 2018 年 2 月 19 日
7. <http://www.shigerubanarchitects.com>
8. <http://criticalconcrete.com>
9. <http://www.shopfloor.co.nz>
10. <https://www.google.co.jp/search>

Can We Help Children in Food Poverty?

30610 Okada Akari 30628 Hayashi Ayumi
30814 Kikuchi Nanako

1. Introduction

Did you know that there are many children suffering from “Food Poverty” in Japan? We researched the present situation of child poverty, especially food poverty. During our research, we found an article about “Kodomo Shokudo” in Tokushima. We were interested in this. So we visited there to have lunch and listen to a story. Then, we thought that Kodomo Shokudo is not enough to solve the problem of food poverty. So we thought about how to make the present situation better by searching Kodomo Shokudo and food banks which are the world’s most popular approach to food poverty.

2. Main part

(1) Present Situation

First, we searched the rate of child food poverty in Japan. To our surprise, it is much higher than we expected. The Ministry of Health, Labor and Welfare Industry said that the rate of relative child poverty was 16.3% in 2014. It means one in 6 (3.25 million) people are in poverty. (Information by Economic Industry Newspaper in 2015). This rate is the fourth highest amongst 20 developed countries.

In fact, there are some children who are suffering from poverty in Japan. For example, some children eat Oblate as a snack, sleep in public toilets at stations to bear the cold in winter, and don’t have enough time to sleep because of working hard at a part-time job.

(2) Solution and policy of foreign countries

We searched about some foreign countries’ solutions to food poverty.

① France(Paris)

France has a big population, and in these days, poverty has become a big problem, especially in Paris. In February, 2016, a law prohibiting the disposal of food was passed in Paris. This law bans supermarkets larger than 400m² disposing food which has already expired or will soon. The supermarket must give this surplus food to charity groups or volunteer organizations. If companies don’t follow it, they’ll be punished with paying a fine.

② Canada

Canada also has a big poverty problem. There are about 546,000 children under 18

suffering from poverty. For food, there are food banks and people who can't get much food can get food or ingredients for free. Almost all that work consists of volunteers, and many big supermarkets are also cooperating. These days, some food banks not only give people food, but teach cooking skills or knowledge for families, planting vegetables, and using childcare facilities. About 850,000 people use these foodbanks.

(3)What's the Kodomo Shokudo?

Kodomo Shokudo means "Restaurant for Children" in English. It is a restaurant which serves dishes at a low price or for free for children. It was created to help children who are suffering from food poverty or eating alone. It is essential to be able to have well-balanced, healthy dishes. On the other hand, because of its low profile, it is difficult to continue in the long run.

(4)What are food banks?

Food banks are institutions which collect surplus food from companies, supermarkets, and farmers and give it to welfare organizations that serve people who need help. It was started in the USA, and now, there are about 40 food banks in Japan. It is good to reduce the waste of food ingredients remaining in food companies. On the other hand, the lack of activity funding and talented people is a big problem.

(5)Questionnaire result

We gave a questionnaire to first and second grade students in Joto High School.

Q1; Do you know Kodomo Shokudo?

A1; YES...28.2%

Q2; Have you ever been to Kodomo Shokudo?

A2; YES...6/631 people

Q3; Until what age do you think the owner of it should allow customers to use there.

A3; Under 18...62 (people)

Under 20...48

Children who can have enough food...33

Q4; Where would you like Kodomo Shokudo to be built?

A4; Near houses...162

Near the station...85

Near schools...44

Q5; What price should the dishes be?

A5; More than 500 yen

500 yen...109

300 yen...98

200 yen...60

100 yen ...93

Under 100 yen...53

(6) Present situation of Kodomo Shokudo in Tokushima.

Actually, the Kodomo Shokudo we visited last summer was already closed down. Early closing is not only the case in Tokushima but throughout Japan. The owner refers to the reason for closing on his Twitter.

First, there were few car parking spaces, so many customers had to go there by bicycle or on foot. So it is difficult for families who don't live near the Kodomo Shokudo to come.

Second, some people don't want to go there because they believe that Kodomo Shokudo is just for people in poverty, and if you go there you'll be considered as poor.

Third, because the building was leased, no furniture could be changed to be suitable for children, so some furniture was too big for children to use.

Finally the staff were all volunteers, so the owner couldn't decide their definite shifts for work. This meant there were some days when the Kodomo Shokudo couldn't open because of lack of staff.

3. Our new proposal

We made our proposal to solve child food poverty. We propose building a restaurant which serves nutritious, well balanced lunches for children.

(1) Ingredients

We ask companies and contracted farmhouses to contribute surplus foods regularly. In addition, we make offices accept irregular ingredients contributions from local people.

(2) Volunteer for cooking

We ask homemakers who live near the restaurant to volunteer. It is expected that the homemaker can provide nutritious food, and that they have a great variety of recipes.

(3) Popularity (Advertising)

We advertise using SNS and make flyers to distribute to public facilities and neighboring educational institution.

(4) Price

The usage charge is 350 yen.

(5) Place

Near Tokushima Station.

(6) Accepted age group

Under 20 years of age and family.

(7) Menu

We serve just one menu a day. The meat or fish which is donated is used for the main dish. For original salad we use vegetables made in Tokushima, such as sweet potatoes and lotus roots.

(8) Events

We hold some classes teaching how to cook and the importance of nutrition.

4. Conclusion

As stated above, we thought that present efforts (Kodomo Shokudo and food banks) are not enough to solve the problem of child food poverty. In fact, the Kodomo Shokudo which we visited had to close down because of a lack of ingredients, hands and funds. We found that food banks also face similar problems.

We propose a new proposal based on these two efforts and a questionnaire. If this suggestion is realized, it may get closer to the solution of the problem.

5. References

1)産業経済ニュース

<http://www.sankei.com/column/news/150516/clm1505160001-n1.html>

2)ルポ 子どもの貧困連鎖 教育現場の SOSを追って

著：池谷 孝司 2012年光文社出版

3)イーズ未来共創フォーラム http://www.es-inc.jp/graphs/2013/grh_id004288.html

4)コトバンク Kotobank.jp/

5)セカンドハーベストジャパン [Http://www.2hj.org](http://www.2hj.org)

6)子ども食堂を失敗させる方法 <http://medium.com./kodoshoku/>

7)「子ども食堂」全国に広がる貧困や孤食に救いの手

<http://style.nikkei.com/article/DGXLZO95894480Y6A100C1CC1000>

8)「子どもの貧困」問題の解決を目指すカナダの若き首相―家庭の収入に応じて年間数十万円の児童手当の支給を開始 children.publishers.fm>article

9)毎日新聞「フランス 売れ残り食料、廃棄禁止…大型スーパー」<https://mainichi.jp>article>

Can We Increase Foreign Tourists in Tokushima?

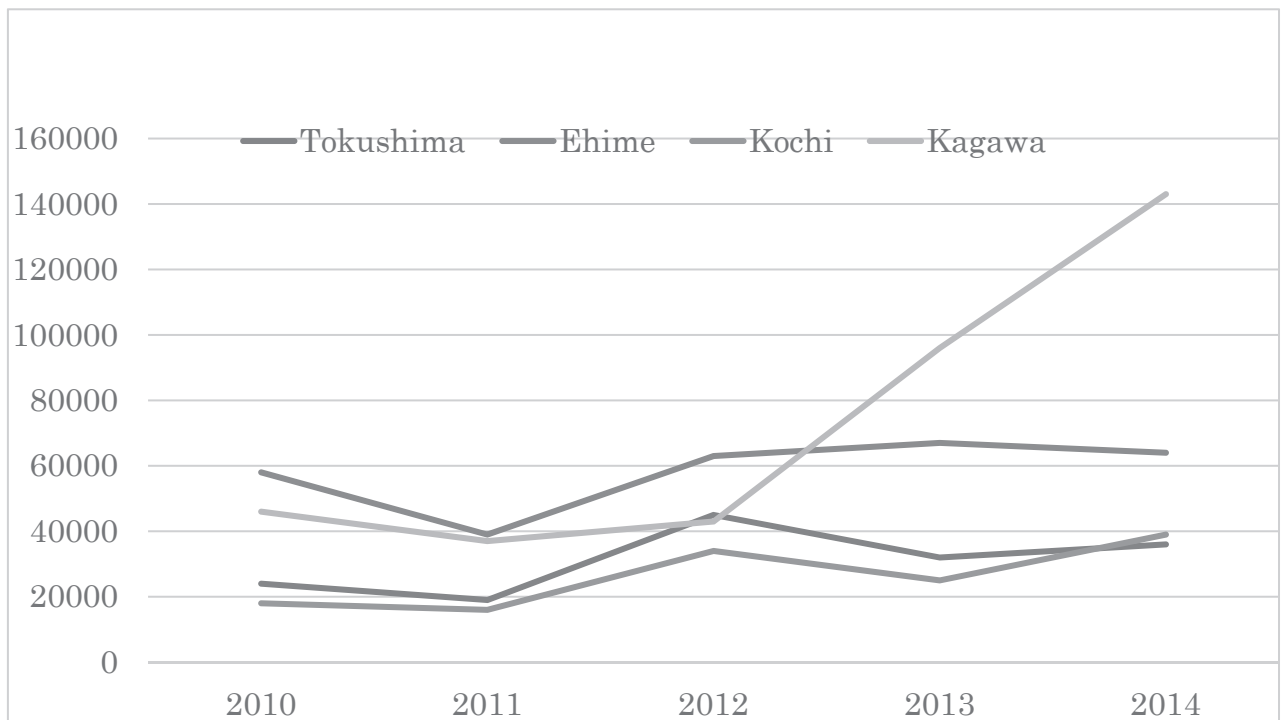
30127 Hirano Tomotaka 30622 Tanizaki Ayano
30627 Hamada Hyuga 30631 Bando Mayu
30734 Matsushita Hiroki 30737 Miyoshi Tomoya
30819 Sato Naomi

1. Introduction

When we visited Hokkaido on a school trip, we were surprised that there were many foreign tourists there. So we became interested in the tourism of Tokushima, especially tourists from other countries who visit Tokushima. When we went on a trip out the prefecture, and local people misunderstood us as Tokunoshima people or Fukushima people. So, we wanted to know what kind of impressions others have about Tokushima, including people from other prefectures and foreign people.

2. The Current State of Tokushima

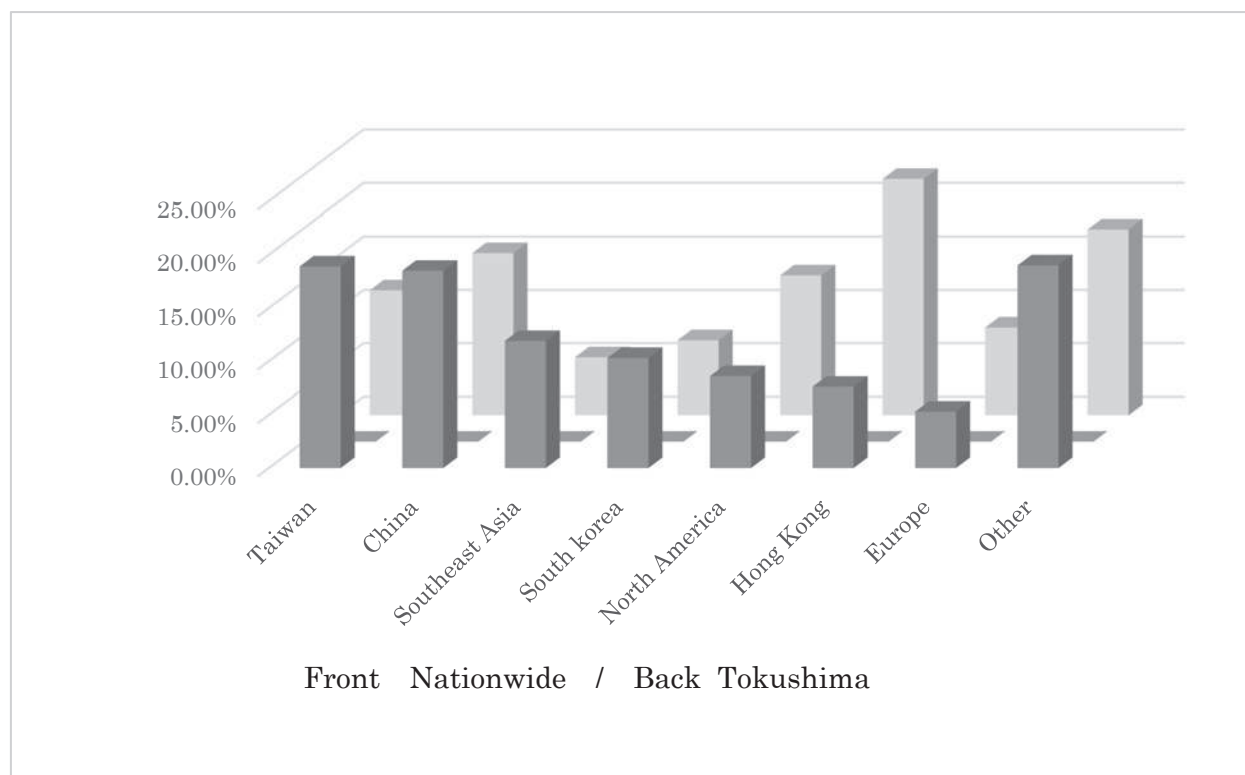
Tourist's statistics



We compared the tourism of the four prefectures in Shikoku, and Tokushima was ranked the worst in 2014. According to “Statistics of Guests in Tokushima”, Tokushima was the worst in Japan from 2010 to 2013. In 2014, Tokushima was the 3rd from the bottom. 1200 years had passed since Shikoku 88 was held. But in 2015, it was the worst in Japan again.

From the above, we can find that many problems with accommodation were not solved. Compared with the other three prefectures in Shikoku, Kagawa was 35th (4.25million people) ,Ehime was 40th (3.57million people), and Kochi was 45th (2.89 million people).

Number of Guests by Country/Region



Looking at the graph, in Tokushima, only the percentage of North America occupies more than the Nationwide results.

We took a questionnaire to the students of Saint Joseph High school in France and ALTs of our high school {22 people} to research the impression of foreigners about Tokushima.

The first question was “Do you know Tokushima?” 8 people answered “Yes”

The second question was “What would you like to do when you visit a tourist spot?” The most popular answer is “To experience traditional culture”. The second most popular answer is “To enjoy the scenery”. And the third most popular answer is “To play in an amusement park”.

The third question was “In Japan, where would you like to visit?” There were many answers, for example, Tokyo, Hiroshima, Nara, Hokkaido, Kyoto, and Mt. Fuji, but Tokushima was never answer.

The final question is “What do you think about Tokushima?” There were many answers. For example, it’s famous for anime, being a traditional town, having a small population, and being rural.

3. Solution

We think that Tokushima has charm. Tokushima has rich nature, many cultural events, and a traditional culture since the Edo period.

For example, AWADANCE, Mt. Tsurugi, Anabuki river, Otsuka International Art Museum, and MACHIASOBI. We think that Tokushima’s charm isn’t inferior to that of other prefectures.

[1] Using SNS

We think we should make Tokushima famous by using SNS because if people who don’t know Tokushima look at pictures of OBOKE or UZUSHIO, they will be interested in Tokushima and want to visit there.

SNSs are the most useful tools to make someone or something famous. And SNS users are increasing rapidly in recent years. For example, there are now over 500 million Instagram users, and 3 hundred million people use it on a daily basis. 80 percent of those people are outside the U.S.

So, we think it is good to use Instagram for making Tokushima famous. We have three reasons. First, we don’t need English sentences, but only need pictures. So it is easy for us to spread information. Second, we can use hashtags (#). By using hashtags, you can see a picture with that hashtag, or other pictures related to that hashtag. Finally, we can take people to a website, where there are details about the information. Worldwide communication on SNS is popular. And some local governments succeed in promoting their attractions (EX culture, food, and sightseeing etc...) by using SNS. So Tokushima should make good use of SNS.

[2] Building a pilot shop

Pilot shops are the institutions in which local governments establish themselves, sell their special products, and give information about a prefecture. There is only one Tokushima pilot shop in Tokyo. Because building it costs a lot of money and Japanese land value is very high, it is difficult to maintain and therefore we suggest building these shop in foreign countries, where land value is cheaper. So we suggest establishing Tokushima’s pilot shop in Saginaw, America, Leiria, Portugal, Dandong, China (Tokushima city’s sister cities) and Luneburg, Germany (Naruto city’s sister city) because we can exchange special products with each other to sell. This way, Tokushima’s name recognition can rise.

The 5 things which we want to do at the Pilot shops.

- ① Suggest places to visit in Tokushima
- ② Sell special products
- ③ Show videos about JORURI or AWADANCE
- ④ Make a traditional experience corner
- ⑤ Make an online store

If Tokushima does this, the opportunity of being known can increase, Tokushima can make itself popular, and the number of tourists to Tokushima can increase.

4. Conclusion

We can increase foreign tourists in Tokushima, but if Tokushima's popularity results in a lot of foreign tourists visit to Tokushima, there are few useful institutions and translators and public transport is not convenient. If we don't solve these problems, it will be less possible for foreign tourists to visit Tokushima again. So the cooperation of people of Tokushima prefecture is necessary and we want to spread this information.

5. References

- ① 外国人観光客推移「公益財務法人、徳島経済研究所」<<http://www.teri.or.jp>>
- ② 国・地域別の宿泊者数「公益財務法人、徳島経済研究所」<<http://www.teri.or.jp>>
- ③ 徳島が好きになる本「公益財務法人、徳島財務研究所」2016年7月初版発行
- ④ 国際親善・姉妹都市：公式ウェブサイト
「徳島市役所」
<<http://www.city.tokushima.tokushima.jp>>
- ⑤ 地域経済ラボラトリー <http://www.region-labo.com/>
- ⑥ Insta Antenna <http://insta-antenna.com/instagram-inbound/>

Ⅲ 成果、評価

1. スーパーグローバルプログラムの成果

昨年同様、本年も概ね計画通り研究開発を行うことができた。1 学年には講演や国際交流を通じて、社会問題に関する知識の習得、国際問題への関心の向上に努めた。また、KJ法やフィッシュボーンを用いて協働的学習を行い、国際的素養や論理的思考力を深める取組を行った。

2 学年の「課題研究」では学年団で指導する体制を整え、まず学問分野別にグループに分かれ、その中で班ごとに研究を進め、課題研究発表会（2月）を行った。マインドマップによる論題の決定や徳島大学講師に3回の指導を仰ぎ、内容を充実することができた。ルーブリック評価によって仮説を設定し、論理的に考える技や、「プレゼンテーション」発表の技を身に付けた。

3 学年の授業「グローバルリーダー論Ⅱ」で「課題研究」を更に深化させ、英語論文「English Research Paper」を作成することで発展させた。さらに、「SGH発表会」（7月）において4班が英語で発表し、質疑応答も英語ですることができた。また、「クエスト」の取組も進路を見据えた「テーマ学習」を行いながら、グループディスカッションをとおして、自己表現力を身に付けた。

1. 1 スーパーグローバル講座 *academic* 大学との連携

- ① [仮説] 大学との連携により、専門性の高い指導や高大連携の接続改善を図ることができるか。
- ② [目的] 高大連携プログラムの開発
- ③ [期待される効果] グローバル化への理解を深める。社会問題や国際課題への関心を深める。国際感覚や異文化理解を深める。グローバルリーダーに必要な態度や素養を習得する。
- ④ [検証] 目標設定シート 2-d

		24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(30年度)
d	課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
		8人	6人	51人	116人	138人	74人		80人
目標設定の考え方: 特定の時期に2~3回実施している現状を改善し、指定3年目までに延べ80人の目標設定。									

- ⑤ [自己評価] 大阪大学大学院国際公共政策研究科と徳島県教委が覚書を交わして連携を進めており、大阪大学教授等に講演に来ていただいたり、大学訪問してゼミに参加したりするなどして、社会問題や国際課題に関心を深めている。徳島大学国際センターとの連携を通じて、留学生との交流を実施したり、医学体験実習で留学生から英語でレクチャーを受けたりして、国際感覚や異文化理解を深めている。また、「21世紀を生きる」「グローバルリーダー論Ⅰ」等では「英語でのプレゼンテーション」指導を始め、県内外の大学から専門性の高い出張講義の実践が効果的に行われた。なお、本年度の数値が減少したのは、HLAB徳島サマースクールの城東セッションが実施できなかったためであり、次年度にはさらに連携を強化し、目標値を達成できる予定である。

1. 2 スーパーグローバル講座 *professional* 企業との連携

- ① [仮説] 企業との連携により、実社会とのかかわりによる社会貢献の意義や実感を芽生えさせることができるか。
- ② [目的] 企業との連携プログラムの開発
- ③ [期待される効果] 社会貢献活動（CSR活動）の考え方や意義を身に付ける。国際社会で必要とされる能力や今高校生としてすべきことを理解する。
- ④ [検証] 目標設定シート 2-e

		24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(30年度)
e	課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
		2人	4人	41人	50人	42人	51人		80人
目標設定の考え方: 現在の20倍増を目標設定。									

- ⑤ [自己評価] 大塚製薬より講師を招き、CSR活動の考え方やインドネシア等で行われている様々なCSR活動について講義を受けた。また、海外拠点の一つであるインドネシアの工場等を訪問し、インター

ンシップを行うとともに、現地でのCSR活動・環境啓発活動の授業（現地の小学生対象）を現地の高校生生徒ともに行うなど、貢献活動の意義を経験として身に付けることもできた。また、日亜化学工業の海外勤務経験者の講演を通じて、国際社会で必要とされる能力や高校生として今なすべきかが理解できた。また、国際機関FAO（東京）や文部科学省日本ユネスコ国内委員会での研修を行ったことで、日本の世界における社会貢献についても、その意義や実感を芽生えさせることができた。なお、数値はほぼ横ばいであるが、生徒の感想では、「社会貢献の意義や今高校生としてなすべきことがよくわかった」など理解が深まっている。

1. 3 グローバルリーダー育成メソッド I in school 教育課程の編成

- ① [仮説] SGH課題研究を実施するために学校が設定した教科科目の取組によって、現代社会に対する関心と深い教養、論理的思考力、批判的思考力、コミュニケーション能力、問題解決能力、行動力等を育成できるか。
- ② [目的] SGプログラム設定による「総合的な学習の時間（クエスト）」の改善・開発。学校設定科目での言語活動の充実。グローバルリーダーに必要な英語運用能力の育成。
- ③ [期待される効果] 国際的素養や知識の習得と国際問題への関心が向上する。課題研究を行うための思考力、コミュニケーション能力、問題解決能力やプレゼンテーション能力を身に付け、英語運用能力も向上する。
- ④ [検証1] 生徒アンケート（平成30年1月実施、回答数：第3学年270名）

3学年（平成27年度入学生）の生徒アンケート「SGH事業で身に付けた能力」では「異文化」、「社会問題」等に関する興味・関心が高まり「自分なりの観点・考えをもつ姿勢」が向上したとする生徒が約80%であった。「SGH事業によって、身に付いたもの」は、「社会問題に関する関心」、「異文化理解」に対する関心が高まり、「コミュニケーション力」、「プレゼンテーション力」が上位を占め、取組の効果が確認できた。特に、SGH対象の人文社会コースの生徒の伸びが顕著である。一方で、「身に付けたもの」では「コミュニケーション力」、「英語の力」が上位を占める。

- ⑤ [自己評価1] 「総合的な学習の時間（クエスト）」（以下クエスト）の中核にSGプログラムを設定している。学校設定科目として1年生全員に保健体育科「Global Health」、人文社会コースは、1学年の公民科「21世紀を生きる」、外国語科「Current English」、2学年の「グローバルリーダー論Ⅰ」、3学年に「グローバルリーダー論Ⅱ」を設定し、「課題研究」を全学年の教育課程に盛り込んだ。

1学年のクエストでは、SGプログラムを実施して、大学や国際機関の先生方による講演会や講義

問22 SGH事業で、身に付いたものは何ですか。	平成27年度入学生		
	1年生	2年生	3年生 (SGH対象)
① 英語の力	11.6%	13.2%	14.4% (25.0%)
② 社会問題に関する関心	61.9%	58.9%	46.5% (56.3%)
③ コミュニケーション能力	20.0%	16.1%	24.4% (31.3%)
④ 異文化理解	59.4%	43.4%	36.2% (56.3%)
⑤ 問題解決能力	8.7%	11.2%	8.9% (9.4%)
⑥ 国際的素養	18.7%	13.2%	14.0% (25.0%)
⑦ プレゼンテーション能力	8.4%	21.1%	19.6% (31.3%)
⑧ リーダーシップ	2.9%	3.0%	4.4% (9.4%)
⑨ 積極性（自己発信能力）	13.9%	11.5%	12.5% (18.8%)

問25 SGH事業で、身に付けたいものは何ですか。	平成27年度入学生		
	1年生	2年生	3年生 (SGH対象)
① 英語の力	47.7%	43.4%	34.7% (37.5%)
② 社会問題に関する関心	13.2%	14.5%	19.6% (15.6%)
③ コミュニケーション能力	57.4%	49.0%	35.1% (34.4%)
④ 異文化理解	16.1%	11.8%	12.9% (25.0%)
⑤ 問題解決能力	26.8%	23.7%	13.3% (28.1%)
⑥ 国際的素養	15.8%	15.8%	13.3% (15.6%)
⑦ プレゼンテーション能力	39.0%	27.6%	20.3% (31.3%)
⑧ リーダーシップ	17.7%	14.5%	12.5% (28.1%)
⑨ 積極性（自己発信能力）	33.9%	22.0%	16.6% (28.1%)

をととして、国際的素養や知識の習得と国際問題への関心が向上した。また、KJ法やフィッシュボーン等、各プログラムの事前・事後指導によって論理的思考力を高め、協働的学習によって国際的素養の育成を充実させることができた。

2学年のクエストは「課題研究」そのものに取り組む。マインドマップによる論題の決定を実施してテーマをグローバル化するように試み、徳島大学から講師を招き、指導に当たっていただいた。また、海外研修との連携を図って「国際グループ」の班編制を意図的にまとめ、研究発表まで一連の流れを構築した。インドネシア研修・フランス研修班が従来の課題研究発表をグローバル課題に転換しつつ、3学年の「SGH発表会」へとつなぐことができた。ループリック評価による分析（後述）では、生徒はグローバルな視点で「研究テーマ」を設定し、興味深い「問い（論題）」を立て、「論文の質（社会貢献度）」は価値あるもので自らの提案があり、プレゼンテーションは理解しやすく「説明する力」は身に付いたと感じている。コミュニケーション能力、問題解決能力やプレゼンテーション能力を着実に高めている。さらに、人文社会コースの生徒は顕著な変容が見られ、学校設定科目で1学年より身に付けた力の多くを代表班の活動に活かしてリーダーシップを発揮している。

3学年は「グローバルリーダー論Ⅱ」の授業の中で2学年の「課題研究」をさらに深化させ、英語論文を作成することで発展させた。7月には「SGH発表会」において英語で発表し、質疑応答を英語で行うことができた。さらに、ALTに研究内容を説明する中で、英語運用能力を高めることができた。また、クエストの取組も進路を見据えた「テーマ学習」を行い現代社会に対する関心と深い教養を身に付け、協働的学習をととして、批判的思考力、コミュニケーション能力、自己表現力を身に付けた。

職員アンケート（添付資料③）でも、生徒は「社会問題」（46.7%）と「プレゼンテーション力」（33.3%）を身に付け、「周囲と協力する姿勢（協調性・リーダーシップ）」（50.0%）、「自分なりの観点や考え方を持つ姿勢」（43.3%）、「考えをまとめて伝える力」（40.0%）が向上したと実感している。また、「今後の進路選択に役に立つ」（50.0%）一方で、「問題解決能力」や「リーダーシップ」は身に付いておらず、「学力向上」や「新しい入試に対応できる」とは考えていない。しかし、職員自身は「国際課題に関心」（70.0%）を持ち、「語学力の育成の必要性」（61.7%）を感じており、新しい学習指導要領にある新たな学力や来る新しい入試制度にも対応できるように、今後とも検証を進めたい。

④ [検証2] 目標設定シート1-e及び生徒アンケート

		24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(30年度)
e	卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合								
	SGH対象生徒:			50%	49%	75%	49%		100%
	SGH対象生徒以外:	13%	13%	14%	24%	25%	—	—	—
目標設定の考え方: 英検2級以上またはTOEIC550点以上の取得生徒の割合 ※集計方法に誤りがあったため数字の修正を行った。(平成26～28年度分)									

⑤ [自己評価2] 「卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベル以上の取得生徒の割合」は49%と減少しているが、本年度よりSGH対象生が3学年全体となったためである。

年度 対象	H26 (指定1年目)	H27 (指定2年目)	H28 (指定3年目)	H29 (指定4年目)
全体	18%	28%	36%	49%
人文社会コース	50%	49%	72%	71%
人文社会以外	14%	25%	25%	46%
生徒アンケート	※10月実施	※2月実施	※1月実施	※2月実施

英語運用力の向上(添付資料⑥-4)では3学年全体、1・2年次SGH対象であった人文社会コースとそれ以外を比較すると、全体がSGH指定を受けて以降10%ずつ増加している。特に昨年までSGH対象クラスの人文社会コースは例年高い取得率を維持しており、課題研究を海外へ発信するためのツールとして、コミュニケーションを取るツールとしての必要性を認識し、それらの取組体験から学習意欲を高めていった。加えて、その姿勢が学年全体・学校全体へ波及しているものとする。なお、本年度のTOEICの結果(添付資料⑥-5, 6)については、2学年は過去3年間と比べて高い上に、1学年は全国平均スコアを大きく上回っており、今後の取得率の向上が見込まれる。

1. 4 グローバルリーダー育成メソッドⅡ *home* 国際機関との連携

- ① [仮説] 国際機関との連携により、日本の世界における社会貢献の意義や実感を芽生えさせることができるか。また、将来留学したい又は国際的に活躍したいといった自らの将来ビジョンを明確化し、自律的なキャリアデザインを促すことができるか。
- ② [目的] 国際機関との連携プログラムの開発
- ③ [期待される効果] 世界の現状や日本の役割を理解する。グローバルリーダーとしての使命感、多様な価値観を学び、グローバルな視点で物事を捉えて発言する能力を培う。
- ④ [検証] 目標設定シート 1-c

	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(30年度)
将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合								
SGH対象生徒:			49%	53%	50%	73%		100%
SGH対象生徒以外:	40%	40%	36%	51%	46%	-	-	-
目標設定の考え方: SGH実施5年目で、SGH対象生徒(全校生徒)の80%以上を目標に設定。								

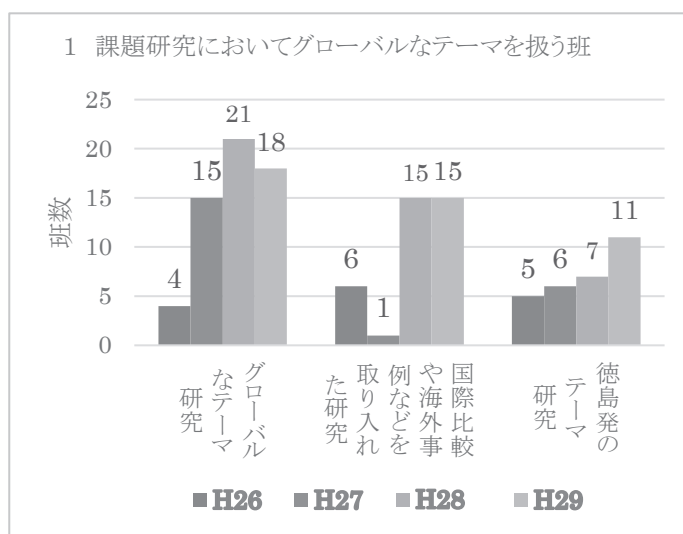
- ⑤ [自己評価] 国際機関FAO, WHO神戸センター等を訪問し、働くことになった経緯や使命感について教えていただくとともに、世界の現状や仕事内容の講義を受けた。グローバルリーダーとして活躍するために、多様な考え方を学び、世界における日本の役割が何か具体的に理解できた。また、外務省「高校講座」や企業研修・職業ガイダンス等をとおして、確かな将来のキャリアデザインを世界に広げ、グローバルな視点で捉えることができるようになった。なお、目標値は73%と全校生徒昨年比で27%増加しており、着実にグローバルリーダーとしての自らの将来ビジョンを明確化している。

1. 5 グローバルリーダー育成メソッドⅢ *abroad* 海外研修等に関する取組

- ① [仮説] 英語等も含めたグループワーク、ディスカッション、論文作成、プレゼンテーション等、またフィールドワークや成果発表のための海外研修等が、課題研究を実施するための効果的な取組となっているか。
- ② [目的] フランス姉妹校やインドネシア研修のプログラム開発
- ③ [期待される効果] 単なる異文化交流ではなく、海外研修の取組が課題研究のテーマと直結し、自分で考え、自ら行動する積極的な活動に取り組む生徒を育成する。
- ④ [検証] 課題研究のテーマ分析

例年課題研究の班は60班前後であるが、「グローバルなテーマ」研究や「国際比較や海外事例」研究は減少、または頭打ち傾向である。ただし、例年のテーマ「糖尿病」に加え、オリンピックの影響から「藍」や「そば米」などの郷土徳島を発信する班が増えた。

- ⑤ [自己評価] 昨年度末のフランス姉妹校での「環境問題」のディスカッション・パリ政治学院でのグループワークやル・アーヴル市役所での取材活動や、大塚製薬の海外拠点インドネシアでのインターンシップやCSR活動の経験等は、本校の研究課題テーマに沿った取組であり、



その成果は「課題研究」での発表へとつながっている。具体的には、校内での海外研修報告会の実施や文化祭でのポスター報告、SGH発表会では海外研修の成果を英語で発表した。

フランス研修生徒の募集において、選考課題に「課題研究のテーマ」や「英語によるプレゼンテーション」等を課した。すると、「フランスの食文化と健康」「働き方改革～フランスとの比較～」等について課題研究を行い、情報収集のためフランス生徒とメールでやりとりをした。また、インドネシア研修でCSR活動を体験した生徒たちは、課題研究で「環境意識改善プロジェクト」について考察するとともに、自分たちが考えた教育支援を提案したポスター発表を校外で行った。海外研修の取組が課題研究の内容に直結し、自分で考え積極的な活動に取り組む生徒の育成に生かされ、SGH4年間の取組が、ようやく実を結んだと実感できた。

なお、海外研修生徒の成果発表は次のとおりである。

- a) SGH発表会（全学年人文社会コース102名対象、発表者11名）トモニプラザ
海外研修報告（英語での発表）ただし、昨年度の参加者
- b) SGH全国高校生フォーラム（2学年2名）パシフィコ横浜
ポスター発表（英語）等
- c) SGH課題研究発表会（1・2学年645名対象、発表者14名）あわぎんホール
海外研修報告（英語での発表）
- d) SGH甲子園（2学年7名）関西学院大学
ポスター発表・環境問題についてディスカッション
- e) 学校支援協議会（2学年7名）城東高校
ポスター発表
- f) 大阪大学コンファレンス（新3学年3名）大阪大学
口頭発表・ディスカッション等に参加予定（H30.4.21～22）

2. 課題研究の成果

- ① [仮説] 研究の課題や研究のねらいに対応した、生徒の変容が見られたかどうか。
- ② [目的] 課題研究のプログラムとルーブリック評価の開発
- ③ [期待される効果] 「四国徳島発・グローバル企業の創造戦略について」を研究テーマに、グローバル企業や大学と連携し、自分たちが考える「グローバル戦略」「グローバルブランド」「CSR活動」やグローバル化から予測する今後の世界の潮流等について、人類の健康増進と環境保全の観点からも考察、発信していくための「課題研究」を行うことにより、持続可能な社会の発展に貢献するグローバルリーダーに必要な態度や素養を習得する。
- ④ [検証] ルーブリック評価

平成29年度 実施時期	段階 項目 対象	課題設定				論文作成			プレゼンテーション		
		研究テーマ (グローバル な視野)	研究目的 (動機)	問い(論題) の立て方	仮説の設定	資料収集 (書籍・アン ケート等)	論文の質 (論理展開)	論文の質 (社会貢献 度)	説明する力 (わかりやす さ)	説明する力 (話し方)	技術 (スライドの 効果)
(A) 11月時点	2学年	68.0%	65.6%	68.4%	67.4%	71.8%	68.0%	71.8%	71.8%	30.2%	76.8%
	人文社会 コース	86.1%	77.8%	72.2%	83.3%	77.8%	75.0%	80.6%	83.3%	30.6%	77.8%
(B) 2月時点	2学年 (昨年)	68.5% (66.9%)	68.8% (65.5%)	69.1% (48.9%)	77.7% (71.5%)	83.4% (64.1%)	74.2% (69.7%)	76.1% (71.1%)	77.7% (73.2%)	39.5% (35.2%)	84.1% (36.3%)
	人文社会 (昨年)	83.8% (74.3%)	86.5% (80.0%)	78.4% (45.7%)	78.4% (82.9%)	81.1% (74.3%)	70.3% (74.3%)	86.5% (68.6%)	86.5% (77.1%)	51.4% (37.1%)	91.9% (45.7%)
(B)-(A) 11月から 2月の変化	2学年	+0.5%	+3.2%	+0.7%	+10.3%	+11.6%	+6.2%	+4.3%	+5.9%	+9.3%	+7.3%
	人文社会 コース	-2.3%	+8.7%	+6.2%	-4.9%	+3.3%	-4.7%	+5.9%	+3.2%	+20.8%	+14.1%

⑤ [自己評価]

ルーブリック評価は生徒にも指導する教員にも到達点を示すことから、研究のテーマがグローバル化し、原稿を見ずに聴衆に巻き込むように発表ができる班・生徒が増えた。

ルーブリック評価を用いて自己評価をさせ、グループ別発表会後の11月時点と課題研究発表会及び論文作成後の2月時点を比較した。

生徒自身は、グローバルな視点で「研究テーマ」を設定し、興味深い「問い(論題)の立て方」ができ、

「論文の質（社会貢献度）」は価値があり、自らの提案もある。プレゼンテーションは理解しやすく「説明する力」が身に付いたと感じている。

学年全体では、論文作成に取りかかった11月時点で、「資料収集」(11.6%)、「仮説の設定」(+10.3%)が増加したのは、アンケート分析等を行ったり、参考文献を検索したりした結果、仮説を検証するために、参考文献を調べ根拠の裏付けを行い、新たな仮説を設定し、論理的に考える技を身に付けたものと考えられる。

SGH対象の人文社会コースの生徒は、当初から高い評価を維持し、6項目で80%以上の高評価を示している。「説明する力（話し方）」は低評価だが、変容は20.8%増と高く、「技術（スライドの効果）」は91.9% (+14.1%)と「プレゼンテーション」発表の技を身に付けている。「SGH課題研究発表会」で代表班10班の中の4班、海外体験発表3組の中に人文社会コースの生徒が含まれており、数多くの生徒が発表した経験から、このような結果として表れていると考えられる。さらに、課題研究で生徒に「身に付けさせたい力」を明確化し、ルーブリック評価基準に反映したい。

3. 次年度以降の課題及び改善点

I 研究開発完了報告書 8. と同じ

添付資料①

【別紙様式7】

ふりがな	とくしまけんりつじょうとうこうがっこう	指定期間	26～30
学校名	徳島県立城東高等学校		

平成29年度スーパーグローバルハイスクール 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）								
	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(30年度)
自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数								
a	SGH対象生徒:		181人	175人	168人	197人		480人
	SGH対象生徒以外:		16人	26人	18人	12人	22人	—
目標設定の考え方:最終目標を, SGH対象生徒(全校生徒)の50%以上に設定。								
自主的に留学又は海外研修に行く生徒数								
b	SGH対象生徒:		42人	51人	43人	21人		96人
	SGH対象生徒以外:		2人	1人	8人	22人	2人	—
目標設定の考え方:SGH対象生徒(全校生徒)の10%程度を最終目標に設定。 ※平成28年度以降は2月時点の実数。								
将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合								
c	SGH対象生徒:		49%	53%	50%	73%		100%
	SGH対象生徒以外:		40%	40%	36%	51%	46%	—
目標設定の考え方:SGH実施5年目で, SGH対象生徒(全校生徒)の80%以上を目標に設定。								
公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数								
d	SGH対象生徒:		20人	16人	9人	13人		192人
	SGH対象生徒以外:		18人	30人	4人	0人	0人	—
目標設定の考え方:SGH対象生徒(全校生徒)の20%を最終目標に設定。読書感想文は除く。								
卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合								
e	SGH対象生徒:		50%	49%	75%	49%		100%
	SGH対象生徒以外:		13%	13%	14%	24%	25%	—
目標設定の考え方:英検2級以上またはTOEIC550点以上の取得生徒の割合 ※集計方法に誤りがあったため数字の修正を行った。(平成26～28年度分)								
(その他本構想における取組の達成目標) 英語または日本語での弁論大会・ディベート大会やエッセイ等のコンテスト入賞者数								
f	SGH対象生徒:		7人	20人	9人	15人		96人
	SGH対象生徒以外:		4人	12人	2人	0人	0人	—
目標設定の考え方:SGH対象生徒(全校生徒)の10%に設定。								

1' 指定4年目以降に検証する成果目標									
		24年度	25年度	29年度	30年度	31年度	32年度	33年度	目標値(33年度)
a	国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合								
	SGH対象生徒:			(64%)					100%
	SGH対象生徒以外:	85%	82%	—					—
目標設定の考え方:最終目標を、全生徒の100%に設定。(ただし、28年度卒業生の生徒の割合)									
b	海外大学へ進学する生徒の人数								
	SGH対象生徒:			1人					29人
	SGH対象生徒以外:	0人	0人	—					—
目標設定の考え方:最終目標(国内の大学へ進学後に進学する生徒を含める)を全校生徒の3%程度に設定。									
c	SGHでの課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合								
	SGH対象生徒:			69%					100%
	SGH対象生徒以外:	—	—	—					—
目標設定の考え方:指定5年目以降は、SGH対象生徒(全校生徒)の95%以上に設定。									
d	大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の数								
	SGH対象生徒:			0人					144人
	SGH対象生徒以外:	—	—	0人					—
目標設定の考え方:指定1年目の生徒が大学に入学するH29に対象生徒(全校生徒)の約15%に設定。									

2. グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット）								
	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(30年度)
a	課題研究に関する国外の研修参加者数							
	0人	0人	24人	14人	32人	14人		60人
	目標設定の考え方: 指定1年目に複数名, その後, 10名以上に増加させる。							
b	課題研究に関する国内の研修参加者数							
	—	45人	76人	64人	105人	83人		120人
	目標設定の考え方: 最終目標を対象生徒(全校生徒)の30%に設定する。							
c	課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数							
	0校	0校	1校	1校	2校	2校		5校
	目標設定の考え方: 指定1年目にハーバード大学生と連携した取組を開始して, その後拡充していく。							
d	課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)							
	8人	6人	51人	116人	138人	74人		80人
	目標設定の考え方: 特定の時期に2~3回実施している現状を改善し, 指定3年目までに延べ80人の目標設定。							
e	課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)							
	2人	4人	41人	50人	42人	51人		80人
	目標設定の考え方: 現在の20倍増を目標設定。							
f	グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数							
	7人	12人	9人	54人	47人	46人		144人
	目標設定の考え方: 指定1年目に5%, 最終目標は15%で設定。							
g	帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。)							
	48人	26人	88人	1人	1人	1人		80人
	目標設定の考え方: 長期・短期両方での受入れ延べ人数を1クラス程度から倍増させていく。(H27より1日滞在等は除く)							
h	先進校としての研究発表回数							
	0回	0回	2回	1回	5回	5回		6回
	目標設定の考え方: 学校内, 学校外(県内, 県外, 海外)へと発表場面や視聴対象者を拡大していく。							
i	外国語によるホームページの整備状況							
	○整備されている △一部整備されている ×整備されていない							
	×	×	○	○	○	○		○
	目標設定の考え方: 指定3年目までに充実した内容で整備をする。							
j	(その他本構想における取組の具体的指標) 英語または日本語での弁論大会・ディベート大会やエッセイ等のコンテスト参加者数							
	12人	10人	9人	22人	41人	92人		200人
	目標設定の考え方: 指定1年目に延べ参加者数を40名(1クラスの生徒が最低1回)から, 最終目標は5倍増加させる。							

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
全校生徒数(人)	1,034	999	960	959	958	957	
SGH対象生徒数			673	642	673	957	
SGH対象外生徒数			287	317	285	—	

添付資料② SGH生徒アンケート(H30.1月実施)

設 問	選 択 肢	H27 入学生			H28 入学生		H29 入学生
		1年生	2年生	3年生	1年生	2年生	1年生
1 あなたは、将来、国際的に活躍できるグローバルリーダーになりたいと思いますか。	① なりたい ② できればなりたい ③ なりたいとは思わない ④ わからない 無回答	19.0%	14.8%	18.8%	19.5%	18.6%	25.5%
2 グローバル化が進む社会を生きる上で、あなたが特に必要だと思うものを2つ選んでください。	① 英語の力 ② 社会問題に関する関心 ③ 深い教養 ④ コミュニケーション能力 ⑤ 問題解決能力 ⑥ 国際的素養 ⑦ 日本語の力（プレゼンテーション能力） ⑧ リーダーシップ ⑨ 積極性（自己発信能力）	44.8%	48.4%	40.2%	59.4%	59.5%	46.1%
3 SGH事業によって、次のような点を意識していましたか。意識していたものをすべてマークしてください。	① 普段経験できない国際的な取り組みに参加で ② 英語を中心とした言語活動に関する能力やセンスの向上に役立つ ③ 国際化を進める大学への進学に役立つ ④ 大学進学後の志望分野探しに役立つ ⑤ 将来の志望職種探しに役立つ ⑥ グローバルな視野を持つことができる	37.1%	33.9%	35.8%	37.0%	31.0%	30.1%
4 SGH事業によって、次のような点で効果がありましたか。効果があったと思うものをすべてマークしてください。	① 普段経験できない国際的な取り組みに参加で ② 英語を中心とした言語活動に関する能力やセンスの向上に役立つ ③ 国際化を進める大学へ進学するための学力向 ④ 大学進学後の志望分野探しに役立つ ⑤ 将来の志望職種探しに役立つ ⑥ グローバルな視野を持つことができた	31.3%	25.0%	33.2%	27.6%	33.7%	23.9%

◆SGH事業で身につけた能力について

※以下の結果のパーセンテージは、肯定的な回答（増した（向上した）・どちらかという増した（どちらかという向上した））をした生徒の割合。

設 問	H27 入学生			H28 入学生		H29 入学生
	1年生	2年生	3年生	1年生	2年生	1年生
5 SGH事業によって、国際課題に対する興味・関心が増しましたか。	86.5%	81.9%	78.6%	85.4%	85.6%	85.6%
6 SGH事業によって、国際課題に関する学習に対する意欲が増しましたか。	79.7%	75.3%	79.7%	85.4%	81.7%	84.0%
7 SGH事業によって、未来の社会問題に対する興味・関心が増しましたか。	78.1%	76.3%	80.8%	76.0%	78.8%	84.3%
8 SGH事業によって、外国語に関する興味・関心が増しましたか。	78.4%	77.3%	79.3%	81.2%	82.0%	81.7%
9 SGH事業によって、人類の健康増進と環境保全に関する理解や関心が増しましたか。	75.5%	73.7%	73.8%	78.6%	79.1%	79.7%
10 SGH事業によって、異文化に関する理解や関心が増しましたか。	88.7%	81.9%	84.9%	89.0%	85.0%	88.9%
11 SGH事業によって、学んだ事柄を応用することへの興味・関心が増しましたか。	73.5%	71.1%	79.0%	71.1%	74.5%	73.9%
12 SGH事業によって、物事に積極的に取り組む姿勢（自主性・意欲）は向上しましたか。	74.5%	71.7%	76.4%	72.4%	75.8%	72.9%
13 SGH事業によって、周囲と協力する姿勢（協調性・リーダーシップ）は向上しましたか。	62.3%	71.7%	76.4%	64.3%	68.3%	71.6%
14 SGH事業によって、物事に粘り強く取り組もうとする姿勢は向上しましたか。	64.2%	71.1%	76.4%	70.1%	70.9%	68.6%
15 SGH事業によって、自分なりの観点や考え方を持とうとする姿勢は向上しましたか。	81.0%	80.6%	83.8%	79.2%	79.4%	80.7%
16 SGH事業によって、物事の問題点に気づく力は向上しましたか。	60.0%	70.1%	76.4%	65.9%	68.3%	69.0%
17 SGH事業によって、問題を解決する力は向上しましたか。	57.4%	66.1%	69.4%	51.3%	66.3%	55.9%
18 SGH事業によって、物事の本質に迫ろうとする姿勢は向上しましたか。	69.4%	71.4%	72.7%	65.9%	72.5%	65.7%
19 SGH事業によって、考える力（洞察力・発想力・論理力）は向上しましたか。	71.0%	76.3%	76.4%	69.2%	73.9%	74.8%
20 SGH事業によって、考えをまとめて伝える力は向上しましたか。	60.0%	70.1%	71.6%	59.7%	66.0%	65.7%
21 SGH事業によって、国際性（英語による表現力・国際感覚）は向上しましたか。	57.7%	62.5%	66.8%	64.0%	67.0%	64.7%

設 問	選 択 肢	H27 入学生			H28 入学生		H29 入学生
		1年生	2年生	3年生	1年生	2年生	1年生
22 これまでのSGH事業によって、身に付いたものは何ですか。該当するものをすべてマークしてください。	① 英語の力 ② 社会問題に関する関心 ③ コミュニケーション能力 ④ 異文化理解 ⑤ 問題解決能力 ⑥ 国際的素養 ⑦ プレゼンテーション能力 ⑧ リーダーシップ ⑨ 積極性（自己発信能力）	11.6% 61.9% 20.0% 59.4% 8.7% 18.7% 8.4% 2.9% 13.9%	13.2% 58.9% 16.1% 43.4% 11.2% 13.2% 21.1% 3.0% 11.5%	14.4% 46.5% 24.4% 36.2% 8.9% 14.0% 19.6% 4.4% 12.5%	12.7% 63.0% 15.6% 61.7% 5.2% 26.0% 4.9% 2.3% 13.0%	9.2% 57.2% 14.1% 48.7% 8.2% 20.6% 17.0% 4.2% 10.5%	9.2% 66.7% 17.0% 49.0% 10.1% 21.2% 8.2% 3.6% 10.1%
23 あなたは、自主的に留学または海外研修に行きたいと思いませんか？	① 城東高校入学後、行ったことがある ② 現在手続きを進めている ③ 高校在学中に行く予定である ④ 諸事情（経済的理由など）がクリアできれば、高校在学中に行きたい ⑤ あまり興味が無い 無回答	1.6% 1.3% 1.9% 58.1% 37.0% 0.0%	4.9% 2.6% 2.0% 35.2% 54.3% 1.0%	4.1% 1.5% 0.7% 36.2% 55.4% 2.2%	1.0% 1.3% 2.3% 50.0% 45.1% 0.3%	2.3% 0.0% 0.3% 38.2% 58.5% 0.7%	2.9% 7.2% 32.7% 31.4% 24.8% 0.1%
24 将来、仕事で国際的に活躍したい、またはその必要があると考えるようになりましたか。（※選択肢3は捉え方を誤る可能性があるためH28～削除）	① SGHへ参加することで変わった ② SGHへの参加が理由ではないが変わった ③ 参加前と変わらない ④ まだ決まっていない 無回答	18.4% 22.3% 30.6% 27.7% 1.0%	23.3% 40.8% — 30.3% 5.6%	34.7% 59.8% — 25.1% 1.5%	32.5% 38.0% — 23.7% 5.8%	35.3% 59.1% — 29.1% 0.7%	39.6% 55.9% — 24.8% 4.7%
25 今後、SGH事業によって、身に付けたものは何ですか。該当するものをすべてマークしてください。	① 英語の力 ② 社会問題に関する関心 ③ コミュニケーション能力 ④ 異文化理解 ⑤ 問題解決能力 ⑥ 国際的素養 ⑦ プレゼンテーション能力 ⑧ リーダーシップ ⑨ 積極性（自己発信能力）	47.7% 13.2% 57.4% 16.1% 26.8% 15.8% 39.0% 17.7% 33.9%	43.4% 14.5% 49.0% 11.8% 23.7% 15.8% 27.6% 14.5% 22.0%	34.7% 19.6% 35.1% 12.9% 13.3% 13.3% 20.3% 12.5% 16.6%	53.6% 14.6% 53.2% 14.6% 24.4% 14.3% 34.1% 21.1% 27.9%	50.0% 10.8% 42.8% 10.5% 14.1% 13.0% 22.9% 15.7% 25.1%	35.9% 16.0% 52.9% 12.1% 21.2% 15.7% 25.2% 17.0% 18.3%
26 今後、SGH事業に取り入れてほしいものは何ですか。該当するものをすべてマークしてください。	① 第一線で活躍されている方の講演・講義 ② 国際機関や政府機関での研修 ③ 大学や研究機関での研修 ④ 企業での研修 ⑤ 海外での研修 ⑥ 多くの外国人との交流 ⑦ 課題研究 ⑧ 語学力向上に関する講座 ⑨ コンテスト・コンクールへの参加 ⑩ その他	29.4% 20.6% 32.3% 29.0% 30.0% 35.8% 10.6% 24.5% 6.5% 0.3%	28.3% 24.7% 23.0% 28.3% 26.0% 25.7% 3.9% 25.3% 3.0% 0.3%	21.0% 25.8% 20.3% 19.2% 18.8% 25.8% 5.9% 18.1% 6.3% 0.0%	38.3% 25.6% 31.2% 22.1% 37.7% 32.1% 6.8% 26.6% 3.9% 0.3%	35.9% 21.6% 28.4% 24.2% 18.3% 24.5% 4.2% 25.8% 1.3% 0.3%	40.5% 20.3% 31.4% 17.3% 28.4% 27.1% 4.6% 24.2% 2.6% 0.0%

◆課題研究（3年次クエスまたはグローバルリーダー論）について

※以下の結果（34番を除く）のパーセンテージは、肯定的な回答（増した・向上した・どちらかという増した・どちらかという向上した）をした生徒の割合。

設 問	H27 入学生			H28 入学生		H29 入学生
	1年生	2年生	3年生	1年生	2年生	1年生
27 課題研究を行ったことで、論文作成能力は身につきましたか。		72.7%	63.1%		76.1%	
28 課題研究を行ったことで、プレゼンテーション能力は身につきましたか。		67.1%	64.6%		70.9%	
29 課題研究を行ったことで、多様な価値観は身につきましたか。		77.0%	76.4%		79.1%	
30 課題研究を行ったことで、国際課題を探究する態度は身につきましたか。		64.8%	78.2%		73.9%	
31 課題研究を行ったことで、コミュニケーション能力は身につきましたか。		60.5%	69.0%		70.3%	
32 課題研究を行ったことで、問題解決能力は身につきましたか。		70.4%	70.5%		72.5%	
33 課題研究を行ったことで、国際的素養（社会的問題に対する素養）は身につきましたか。		52.0%	74.9%		56.9%	
34 課題研究を行ったことによって、身に付いたものは何ですか。該当するものをすべてマークしてください。	① 英語の力 ② 社会問題に関する関心 ③ コミュニケーション能力 ④ 異文化理解 ⑤ 問題解決能力 ⑥ 国際的素養 ⑦ プレゼンテーション能力 ⑧ リーダーシップ ⑨ 積極性（自己発信能力）	5.6% 52.0% 15.5% 8.6% 29.9% 5.9% 34.5% 6.3% 15.5%	11.1% 46.5% 26.2% 17.7% 10.7% 9.2% 23.2% 8.1% 12.9%		4.6% 51.0% 20.6% 11.8% 25.2% 7.2% 30.7% 4.9% 13.7%	
35 課題研究を行ったことが、将来の大学等の専攻分野の選択に影響を与えていると思いませんか。		57.6%	66.8%		67.3%	

◆これまでの事業・講座について

※以下の結果のパーセンテージは、肯定的な回答（とても良かった・良かった）をした生徒の割合。

設 問	H27 入学生			H28 入学生		H29 入学生
	1年生	2年生	3年生	1年生	2年生	1年生
36 SG講座「グローバル化する社会で求められる力とは？」（5/22, 大阪大学大学院国際公共政策研究科 松繁寿和教授）はどうでしたか。	—	—	—	93.8%	—	92.5%
37 SG講座「インドネシア～見果てぬ夢を追う～」（11/27, 大阪大学大学院国際公共政策研究科 松野明久教授）はどうでしたか。	—	—	—	86.3%	—	94.1%
38 SG講座「Future Global Leaders Camp 大阪大学」（8/8～8/10）はどうでしたか。	100.0%	—	—	86.7%	—	94.2%
39 SG講座「大阪大学国際公共政策学科訪問」（12/18）はどうでしたか。	—	90.9%	—	—	91.2%	—
40 SG講座「徳島大学 医学部体験学習」（12/16）はどうでしたか。	—	—	—	—	92.9%	—
41 SG講座「大塚製薬のグローバル化～世界の人々の健康に貢献するために～」（6/22, 大塚製薬株式会社東京本社 浜本光生総務部長）はどうでしたか。	92.6%	—	—	88.6%	—	93.8%
42 SG講座「大塚の海外におけるCSR活動について」（10/19, 大塚ホールディング株式会社総務部 梅津芽生課長）はどうでしたか。	90.9%	—	—	88.6%	—	93.1%
43 SG講座「海外勤務経験者に聞く」（12/14, 日垂化学工業）はどうでしたか。	—	—	—	85.7%	—	88.2%
44 SG講座「企業研修・国際機関研修」（9/22）はどうでしたか。	—	—	—	95.8%	—	89.9%
45 GH講座「アジアの人々の飲み水と健康」（11/24, 徳島文理大学 姫野誠一郎教授）はどうでしたか。	91.6%	—	—	90.9%	—	93.5%
46 GL育成メソッド「TOEIC全員受験」（12/18）はどうでしたか。	—	69.8%	—	81.8%	72.9%	81.4%
47 GL育成メソッド「文部省, FAO(国際連合食糧農業機関)訪問」（8/2～4）はどうでしたか。	100.0%	83.3%	—	78.6%	87.5%	94.3%
48 外務省高校講座「外務省の仕事と役割を知る」（10/25, 外務省 柏口温子課長補佐）はどうでしたか。	—	—	—	—	—	90.5%
49 GL育成メソッド「出張授業 EUがあなたの学校にやってくる」（11/10）はどうでしたか。	86.5%	—	—	86.7%	86.9%	90.2%
50 GL育成メソッド「姉妹校派遣 フランス研修」（3/18～30）はどうでしたか。	—	—	80.0%	—	84.8%	—
51 GL育成メソッド「インドネシア研修」（7/31～8/5）はどうでしたか。	—	92.3%	—	—	87.1%	—
52 SG講座「『覚えること』から『問いかける』ことへ」（6/1, 徳島大学 豊田哲也教授）はどうでしたか。	—	87.2%	—	—	91.5%	—
53 SG講座「情報リテラシーを身につけよう」（9/22, 徳島大学 渡部 稔教授）はどうでしたか。	—	85.9%	—	—	88.9%	—
54 SG講座「徳島大学 課題研究指導」（7/13, 11/2, 12/11）はどうでしたか。	—	82.5%	—	—	91.2%	—
55 SG講座「徳島大学 体験授業」（10/16, 10/17, 10/18）はどうでしたか。	—	—	—	—	96.7%	—
56 SG講座「大阪大学 国際公共政策学会（FGコンフェンス）」（4/22）はどうでしたか。	—	—	72.7%	—	—	—
57 成果発表「SGH発表会」（7/22）はどうでしたか。	—	85.9%	87.2%	92.3%	95.1%	90.3%

記述欄意見(一部)

<1年生>

(よかった点)

- ・ 広い視野で物事を考えたくなった。
- ・ 様々な立場の人からの講演が聴けて良かった。
- ・ これまで自分が希望する職種のことしか考えていなかったのので、たくさんの講師の先生方からいろいろなことを学び、将来の仕事の幅が広がったと思う。
- ・ SGH指定校の間に入学し、その恩恵を受けられたのは幸運だと思う。これからも真摯に取り組み自分の視野を広げたい。
- ・ これまで海外と聞くと、アメリカやヨーロッパなどの国際的に主要な国しかイメージに無かったが、アジアやアフリカなどの発展途上国について勉強するのも面白いと思った。
- ・ SGH発表会の時の先輩方のプレゼンテーション能力の高さに刺激を受けた。自分もあの場に立てるようになりたいと思う。
- ・ 英語の力が必要だと強く感じた。英語力を伸ばしたい。

(意見・要望)

- ・ どのようにして成果をだしていくのか、どうすれば成長でき成功できるのかそういう話をもっと聞きたい。
- ・ ただグローバル化だけでなく、関氏の功績のように、地元にも視点を移した事業もあると、世界や社会に出た際に役に立つと思う。
- ・ もう少しディスカッションとか生徒の活動があるといいと思う。
- ・ 話を聞いて新しい知識が増えるのは楽しいが、面白くて終わってそれ以上につながない気がする。勉強が忙しくて、社会のことをあまり調べようと思わない。

<2年生>

(よかった点)

- ・ 海外に対する興味関心が増えた。
- ・ 印象に残るものが多く、生きる力につながると思う。
- ・ 進路を考えたり社会に対する問題意識を持ったり、その意識を深めたりするきっかけになった。
- ・ インドネシア研修に参加して宗教のことを知り、視野を広げることができた。旅行先として選ばない国だったのでよい刺激になった。
- ・ 課題研究を通して、将来も活かせるスキルを身に付けることができた。
- ・ プレゼンテーションを非常に多く経験することができた。
- ・ 日本の現在置かれている状況などを客観的視点でみることができた。
- ・ 自分に足りないものが見えてよかった。
- ・ 課題研究を通して自分の進路に関する知識を増やすことができた。
- ・ 将来の職業選択の幅が広がった。
- ・ 海外研修の機会をいただけとことに感謝している。
- ・ 自分たちで考えたことを研究するのはおもしろかった。
- ・ TOEICテストを高校生のうちに受けることができた。
- ・ 高校生向けの体験授業ではなく、実際に徳島大学の講義を受けることができた。

(意見・要望)

- ・ 学力向上の講座を受けたい。
- ・ 英語の力を身に付けたい。
- ・ 1週間に1時間なのが残念。回数を増やしてほしい。
- ・ リーダーシップを取ることができるよう人間になりたいと思った。
- ・ 課題研究のプレゼンテーションが難しかった。

- ・ 英語の力不足を感じた。もっと身に付けたい。
- ・ 課題研究では答えのない問題を考えるのが難しかった。
- ・ 自分の考えや意見をしっかりと持ち、責任を持って発信することの大切さを学んだ。
- ・ 留学に興味を持つようになった。
- ・ 課題研究の結論がうまく出せなかったことを後悔している。
- ・ 夏休みの補習の時間等を利用して課題研究に取り組むまとまった時間がほしかった。
- ・ 国際的教養を深めていきたい。
- ・ 自分のしたいことや講座を選べるようにしてほしい。
- ・ 1年次に比べ講演が少なく残念だった。
- ・ 国際社会で生き抜くためにこれから自分は何をするべきかじっくり考えていきたい。
- ・ 評論文を読むようになった。
- ・ 英語に触れる機会が増えた。
- ・ コミュニケーション能力や、リーダーシップに関する講演が少なかった。

<3年生>

(よかった点)

- ・ 社会に関心を持つきっかけとなった。
- ・ 将来進みたい分野の選択肢が増え、より具体的になった。
- ・ 多角的な視点から様々なことを見ることができた。
- ・ 課題研究で調べた内容が知識として身に付いた。
- ・ 大変なことも多かったが、自分の力になったと思う。
- ・ 第一線で活躍されている方の講義を聴いて、それぞれの仕事に対してぼんやりとしたイメージしか持っていなかったが、詳しく知ることができ、将来の進路に役立てることができた。
- ・ 異文化にふれあう機会があるのは良いことだし、これからの生活にも役立つだろうと思った。
- ・ メンバーとのコミュニケーション能力や、問題解決能力が身に付いた。
- ・ グローバル化について考えるよい機会となった。
- ・ 様々な分野の先生方の話を聞けるのは視野を広げるのに参考になった。
- ・ フランス研修は、一生の思い出になるほど刺激的で大きな影響を与えてくれた。楽しかったのはもちろんフランス人の考え方、文化、生活の違いを知り、大変勉強にもなった。
- ・ 他クラスの人と協力し合ったので、コミュニティが広がった。
- ・ 調べたこと以上に問題点などが見付き、深い教養の大切さを学んだ。
- ・ 課題研究によって、自分でまとめる力が身に付いた。
- ・ 他の学校ではできないだろうことができてよかった。
- ・ SGH発表会での英語の発表は本当に貴重な経験となった。発表会に向けて磨いた英語の書く力・話す力は大学入試においても役立っていると実感している。

(意見・要望)

- ・ 昨年度に比べ、異文化交流の機会が少なかった。
- ・ 今となっては、課題研究にもっと積極的に取り組むべきだったと後悔している。
- ・ SGH事業において、主体的に取り組むことはあまりできていないと感じた。自分を含めて、もう少し主体的に取り組むべきだった。
- ・ 地域だけでなく、世界の課題に取り組む必要があると思った。
- ・ 課題研究は時間がもう少し十分にあればよかったと思った。

添付資料③ SGH職員アンケート (H30.1月実施)

設 問	選 択 肢	H27	H28	H29
問1 グローバル化が進む社会を生きる上で、生徒たちにとって特に必要だと思うものを次のうちから2つ選んでマークしてください。	① 英語の力 ② 社会問題に関する関心 ③ 深い教養 ④ コミュニケーション能力 ⑤ 問題解決能力 ⑥ 国際的素養 ⑦ 日本語の力 (プレゼンテーション能力) ⑧ リーダーシップ ⑨ 積極性 (自己発信能力)	35.4% 22.9% 6.3% 54.2% 33.3% 12.5% 4.2% 2.1% 25.0%	26.0% 30.0% 10.0% 64.0% 24.0% 12.0% 2.0% 8.0% 18.0%	25.0% 33.3% 18.3% 48.3% 30.0% 5.0% 10.0% 3.3% 23.3%
問2 これまでのSGHによって、生徒たちが身に付けたものは何だと思えますか。	① 英語の力 ② 社会問題に関する関心 ③ コミュニケーション能力 ④ 異文化理解 ⑤ 問題解決能力 ⑥ 国際的素養 ⑦ プレゼンテーション能力 ⑧ リーダーシップ ⑨ 積極性 (自己発信能力)	0.0% 54.5% 0.0% 21.2% 0.0% 9.1% 12.1% 0.0% 3.0%	4.0% 48.0% 6.0% 36.0% 0.0% 14.0% 26.0% 0.0% 4.0%	10.0% 46.7% 6.7% 31.7% 3.3% 10.0% 33.3% 0.0% 10.0%
問3 SGHに参加することによって、次の①～⑥に対する生徒たちの興味・関心・意欲・理解は増えましたか。増したと思うものをすべてマークしてください。	① 国際課題に対する興味・関心 ② 国際課題に関する学習に対する意欲 ③ 未知の社会問題に対する興味・関心 ④ 外国語に対する興味・関心 ⑤ 異文化に関する理解・関心 ⑥ 学んだ事柄を応用することへの興味・関心	72.9% 14.6% 33.3% 27.1% 47.9% 8.3%	76.0% 20.0% 26.0% 48.0% 58.0% 10.0%	70.0% 13.3% 26.7% 48.3% 51.7% 13.3%
問4 SGHに参加することで、次の①～⑩に対する生徒たちの姿勢や力は向上しましたか。向上したと思うものをすべてマークしてください。	① 物事に積極的に取り組む姿勢 (自主性・意欲) ② 周囲と協力する姿勢 (協調性・リーダーシップ) ③ 物事に粘り強く取り組もうとする姿勢 ④ 自分なりの観点や考え方を持とうとする姿勢 ⑤ 物事の課題点に気づく力 ⑥ 問題を解決する力 ⑦ 物事の本質に迫ろうとする姿勢 ⑧ 考える力 (洞察力・発想力・論理力) ⑨ 考えをまとめて伝える力 ⑩ 国際性 (英語による表現力・国際感覚)	35.4% 27.1% 12.5% 50.0% 27.1% 4.2% 4.2% 18.8% 29.2% 8.3%	38.0% 42.0% 10.0% 60.0% 30.0% 8.0% 18.0% 34.0% 30.0% 30.0%	35.0% 50.0% 13.3% 43.3% 30.0% 6.7% 11.7% 25.0% 40.0% 31.7%
問5 SGH事業は、生徒たちにどのような変化をもたらすと思えますか。2つ選んでマークしてください。	① 人間力の育成に役立つ ② 学力の向上に役立つ ③ 今後の進路選択に役立つ ④ グローバルな視点で物事をとらえられるようになる ⑤ 留学や海外勤務など、国外へ出て行くことを考える生徒が増える ⑥ 語学力の向上をめざす生徒が増える ⑦ 新しい大学入試制度に対応できる	14.6% 2.1% 35.4% 54.2% 22.9% 33.3% 0.0%	14.0% 8.0% 40.0% 60.0% 26.0% 38.0% 8.0%	20.0% 5.0% 50.0% 45.0% 28.3% 41.7% 6.7%
問6 SGH事業がはじまったことで、自分にあてはまるものを2つ選んでマークしてください。	① 国際課題についてより関心を持つようになった ② 語学力の育成の必要性をより感じるようになった ③ 自分の授業改革にもつなげようと思うようになった ④ 学校の知名度が上がることによるメリットを考えるようになった ⑤ 予算の用途について提案できないか考えるようになった ⑥ あまり関心を持っていない	58.3% 45.8% 39.6% 4.2% 14.6% 10.4%	62.0% 46.0% 32.0% 14.0% 14.0% 10.0%	70.0% 61.7% 28.3% 10.0% 8.3% 15.0%
問7 SGH事業を通じて、生徒たちに身に付けてほしいものは何ですか。該当するものにすべてマークしてください。	① 英語の力 ② 社会問題に関する関心 ③ コミュニケーション能力 ④ 異文化理解 ⑤ 問題解決能力 ⑥ 国際的素養 ⑦ プレゼンテーション能力 ⑧ リーダーシップ ⑨ 積極性 (自己発信能力)	31.3% 60.4% 50.0% 29.2% 50.0% 14.6% 18.8% 8.3% 47.9%	32.0% 52.0% 62.0% 26.0% 62.0% 24.0% 32.0% 14.0% 40.0%	28.3% 56.7% 50.0% 26.7% 58.3% 16.7% 26.7% 26.7% 50.0%
問8 今後、SGHで積極的に実施してほしい講座等は何ですか。次のうちから2つ選んでマークしてください。	① 第一線で活躍されている方の講演・講義 ② 国際機関・政府機関での研修 ③ 大学・研究機関・企業での研修 ④ 海外での研修 ⑤ 多くの外国人との交流 ⑥ 課題研究 ⑦ 語学力向上に関する講座 ⑧ コンテスト・コンクールへの参加 ⑨ その他	39.6% 25.0% 31.3% 20.8% 33.3% 8.3% 14.6% 4.2% 2.1%	44.0% 30.0% 36.0% 12.0% 34.0% 12.0% 12.0% 2.0% 2.0%	45.0% 21.7% 18.3% 15.0% 41.7% 16.7% 25.0% 13.3% 3.3%

- ・生徒たちに他校にはない講座・講演の機会を多く体験させることができ、またそれらから生徒の興味・関心をグローバルな視点で広げることができたと思われる。
- ・引き続き様々な講師を招いて話を聞く機会を設けるのは貴重だと思う。
- ・生徒たちにとって素晴らしい機会が多く与えられると思うが、あれもこれにもなると、消化するだけということになりかねないので、生徒の希望やニーズで各生徒が深く学べるようにできたらと思う。
- ・自分自身とても勉強になっている。
- ・大変よい取り組みだと思う。
- ・事業の成果として学校の財産となっているものを今後どのように継承していくかが大切だと思う。
- ・生徒にとっても職員にとっても、これからは役立てられることが多い事業だと思う。もっと積極的に参加したいと思った。
- ・とても有益な事業であり、これからも力を入れていく必要があると思う。
- ・多様な事業、講座が用意されており、生徒の興味・関心を刺激する良い材料になっていると思う。準備、運営をされる先生方のご苦勞に頭が下がる。課題研究でもっと深いアドバイスができれば良かったと反省している。
- ・労力の必要な事業で、担当する方の負担は大きいですが、生徒の方にも着実に力が付いているように思う。
- ・海外の文化や社会問題、国際課題に触れることで、自国や地域に対しても新たな視点で見ることができるようになっていると思った。
- ・SGH事業でないといけないような貴重な機会が多くあり、生徒にとってすごく良いことだと思う。
- ・全ての学年を担当しないと全体像がよく見えてこない。各学年がどのようなことに取り組んでいるのか、お互い周知することが必要だと思う。
- ・生徒がもっと主体的に活動できる事業・講座ができるとよい。
- ・個々の講座はとても良かったのですが、2学期にSG講座が集中していた気がする。分散するか数を減らした方が、生徒たちは貴重な体験としてより集中して取り組むことができるのではと思う。
- ・行事が多く、授業時数確保の観点に反するのではないかな。
- ・人文クラスは継続的に展開できるが、他は断続的になっているのではないかな。
- ・企業的価値を高める方向でグローバル化をとらえるのではなく、人権や異文化に対する寛容の視点を内容に取り入れて欲しい。
- ・時間数が少なすぎるため、生徒・教員とも超ハードである。負担が大きすぎる。
- ・少々講演が多すぎるのかなと思うこともある。感想を書いて終わるのではなく、話を聞いて思うことや考えたことをHRで議論し、意見交換できる時間があればもう少し深まるのではないかなと思う。
- ・見たり、聞いたりなどインプット型が多かったように思われるので、もう少し生徒の活動を重視した取り組みがよいのではないだろうか。
- ・常識度テストを実施したらどうか。
- ・2年次の課題研究論文は、問いから結論まで一貫した内容となっているか、文章を含め生徒への指導をより充実させて欲しい。3年次に推薦やAO入試で提出を求められることもあり、グループ研究である以上更なる内容の充実が必要である。
- ・とてもいい講演がたくさんあったが、一部の生徒には伝わっていない気もした。なぜこの話を聞くのか、そのことによってはどのような力を身につけて欲しいのかを一回一回きちんと伝える必要があるなと思った。
- ・延長せずやめるべきだ。

平成29年度教育課程表

徳島県立城東高等学校

教科	科目	標準単位	1年			2年				3年			
			文 理	人文社会	数 理	文 理		人文社会	数 理	文 理		人文社会	数 理
						文	理			文	理		
国語	国語総合	4	5	5	5								
	現代文B	4				3	2	2	2	3	2	3	2
	古典B	4				3	2	3	2	3	2	3	2
地理歴史	世界史A	2								□ 2	□ 2		□ 2
	世界史B	4				○ 4	○ 3	3	○ 3	○ 3	○ 2	3	○ 2
	日本史A	2								□ 2	□ 2		□ 2
	日本史B	4				○ 4	○ 3	○ 3	○ 3	○ 3	○ 2	○ 2	○ 2
	地理A	2								□ 2	□ 2		□ 2
	地理B	4				○ 4	○ 3	○ 3	○ 3	○ 3	○ 2	○ 2	○ 2
公民	現代社会	2	2	2	2								
	倫理	2								◇ 3		◇ 3	
	政治・経済	2								◇ 3		◇ 3	
	21世紀を生きる (設)			1									
数学	数学Ⅰ	3	3	3	3								
	数学Ⅱ	4	1	1	2	4	3	3	3	3		3	
	数学Ⅲ	5					1		2		5		5
	数学A	2	2	2	2								
	数学B	2				2	2	2	2				
	基礎数学 (設)									◎ 2		2	
	応用数学 (設)										2		2
理科	物理基礎	2			2		△ 2						
	物理	4					▲ 2		▲ 3		▲ 4		▲ 4
	化学基礎	2	2	2					2				
	化学	4					3		2		4		4
	生物基礎	2			2	2	△ 2	2					
	生物	4					▲ 2		▲ 3		▲ 4		▲ 4
	地学基礎	2	2						2				
	化学探究 (設)					■ 1				■ 1		△ 1	
	生物探究 (設)									2		2	
地学探究 (設)					■ 1				■ 1		△ 1		
保健 体育	体育	7~8	3	3	3	2	2	2	2	2	2	2	2
	保健	2				1	1	1	1				
	Global Health (設)		1	1	1								
芸術	音楽Ⅰ	2	□ 2	□ 2	□ 2								
	音楽Ⅱ	2				□ 1	□ 1						
	美術Ⅰ	2	□ 2	□ 2	□ 2								
	美術Ⅱ	2				□ 1	□ 1						
	書道Ⅰ	2	□ 2	□ 2	□ 2								
	書道Ⅱ	2				□ 1	□ 1						
	書道Ⅲ	2								◎ 2			
外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	4	4	3								
	コミュニケーション英語Ⅱ	4				4	3	4	3				
	コミュニケーション英語Ⅲ	4								4	4	4	4
	英語表現Ⅰ	2	2	2	2								
	英語表現Ⅱ	4				2	2	2	2	3	2	3	2
	Current English (設)			1									
家庭 情報	家庭基礎	2	2	2	2								
	情報の科学	2				2	2	1	2				
家庭	子どもの発達と保育(専)	2~6								◎ 2			
	食文化(専)	1~2				□ 1	□ 1						
体育	スポーツⅡ(専)	2~16								◎ 2			
音楽	音楽理論(専)	2~6								◎ 2			
美術	素描(専)	2~10								◎ 2			
グローバル リーダー論	グローバルリーダー論Ⅰ (設)							2					
	グローバルリーダー論Ⅱ (設)										1		
総合的な学習の時間(クエスト)		3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
小 計			32	32	32	32	32	32	32	32	32	32	32
ホームルーム活動			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
総 計			33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33

* 同一記号のグループから1科目を選択する。

* 地理歴史の選択(文理・数理コース)

2年次

3年次

世界史B

..... 世界史Bを継続、日本史Aまたは地理A

日本史Bまたは地理B 日本史Bまたは地理Bを継続、世界史A

* スーパーグローバルハイスクールの特例により、保健及び人文社会コース2年次の情報の科学、2年次・3年次の総合的な学習の時間(クエスト)を1単位減している。

添付資料⑤ 運営指導委員会における指導、助言等

(1) 運営指導委員

No.	所 属	役 職	氏 名	分 野
1	鳴門教育大学	教授	前田 洋一	教育
2	鳴門教育大学	教授	石濱 博之	教育
3	(公財) 徳島経済研究所	理事・事務局長	竹中 淳二	経済
4	(公財) とくしま産業振興機構	副理事長	並木 俊明	経済
5	(一社) 徳島県医師会	事務局長	高田 浩	医療
6	(公財) 徳島県国際交流協会	常務理事・事務局長	安田 亨	国際

※上記委員に加えて、管理機関である県教育委員会から、外国語科、公民科、総合的な学習の時間の各担当指導主事が出席。

(2) 開催日〔会場〕

- ・第1回 平成29年10月20日(金)〔徳島県立城東高等学校〕
- ・第2回 平成30年2月14日(水)〔あわぎんホール〕

(3) 主な協議内容

- ①校設定科目「グローバルリーダー論Ⅰ・Ⅱ」及びグローバルリーダーについて
- ②取組内容(高3生による英語発表会、インドネシア研修、課題研究発表会など)

(4) 委員等からの感想及び指導助言

①について

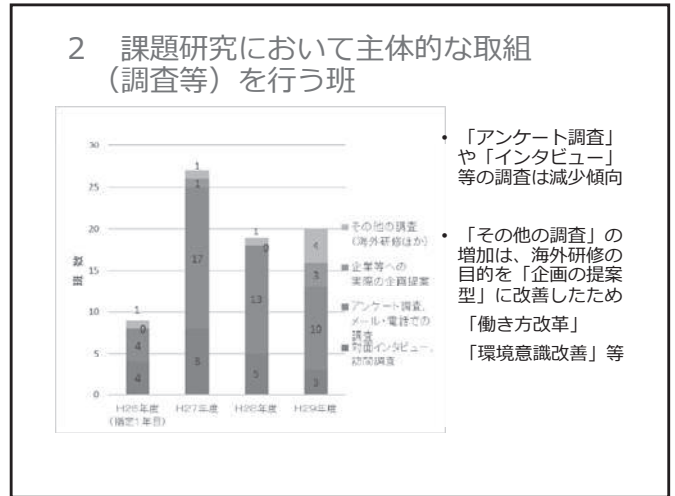
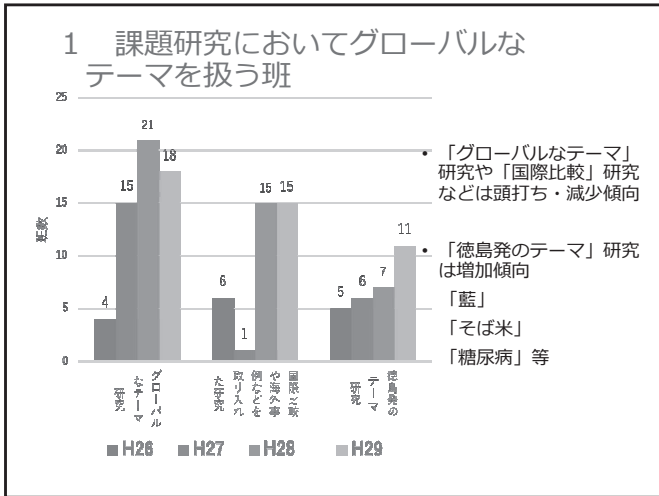
- ・英語で考える力を伸ばすためには、「他教科と連携して」というところが求められる。CLIL(教科学習と英語学習を組み合わせたアプローチ)などの例も参考にしたらどうか。
- ・「グローバルリーダーになりたい」と思うことが必要。各生徒がイメージを持ちやすいように、「城東高校で育てようとする人物像」をはっきりさせる必要がある。
- ・グローバルリーダーになるためには、日本でもリーダーである必要がある。そのためには人間力を高めることが必要。文化や趣味など、いろんなことにチャレンジしてほしい。
- ・日本語でいいから、もっと深く考える機会をもってほしい。
- ・英語力を高めるために、ALT・ネイティブスピーカー・留学生と触れる機会を増やし、異文化に触れるようにしてもらいたい。
- ・ディベートできる人間がリーダーだろうか。逆に忍耐力が必要な場合もある。協働でやる

作業が多いので、まとめる力、異文化を受け入れる受容力などが必要。留学生を受け入れることもよいかもしれない。

②について

- ・発表態度が堂々としていて感心した。私の時と隔世の感があり、課題設定のユニークさは大きな成果だと思う。中には論理展開に飛躍が見られるものもあるが、内容はよく練られており、自ら課題を見つけて解決していく力を養おうという国の動きを感じる。
- ・現行の英語教育を研究課題にした班があった。批判的な意見もあったが、今の英語教育が全部駄目だということではない。意図する目標を踏まえて分析し、論じていくとよい。
- ・1, 2年の生徒全員が参加することはとてもよいと思う。一生懸命考えたことを問題提議し皆で共有できる有意義な取組である。
- ・専門家の話を聞けば、広がりがあったのでは。活性化とは何か、そもそもそこから考えてほしかった。時間の制約はあるが、掘り下げる方法はいろいろある。
- ・英語で発表したいという生徒の意欲はすばらしい。質疑応答の最後が日本語になってしまった班があったが、最後まで英語でやるともっと良かった。
- ・研究調査を、アンケートやインタビューなしに机の上だけで済ませるのは残念だ。
- ・10月には教員が英語で授業を行うところを見せてもらったが、生徒も同じようにやっついこうとしていて、効果が現れていると思った。日常の授業が大切である。
- ・課題研究発表会は少しずつ着実に進化している。3年生7月の発表会で行われていた英語での発表が、一部この時期にできるようになるなど、時期が前倒しになってきている。また、SGH指定以前の約20年前に始まったフランスの学校との交流も、成果が出ている。

添付資料⑥ 生徒の変容



3 課題研究における自己評価の変容

課題研究の11月時点と2月時点の生徒自身のルーブリック評価で「4満足いく状態」・「3やや満足いく状態」を選択した割合

平成29年度 実施時期	段階 対象	課題設定				論文作成			プレゼンテーション		
		研究テーマ (グローバルな視野)	研究目的 (動機)	問い(論理) の立て方	仮説の設定	資料収集 (書籍・アンケート等)	論文の骨 (論理展開)	論文の質 (社会貢献度)	説明する力 (わかりやすさ)	説明する力 (話し方)	技術 (スライドの効果)
(A) 11月時点	2学年	68.0%	65.6%	68.4%	67.4%	71.8%	68.0%	71.8%	71.8%	30.2%	76.8%
	人文社会コース	86.1%	77.8%	72.2%	83.3%	77.8%	75.0%	80.6%	83.3%	30.6%	77.8%
(B) 2月時点	2学年	68.5% (66.9%)	68.8% (65.5%)	69.1% (48.9%)	77.7% (71.5%)	83.4% (64.1%)	74.2% (69.7%)	76.1% (71.1%)	77.7% (73.2%)	39.5% (35.2%)	84.1% (36.3%)
	人文社会コース	83.8% (74.3%)	86.5% (80.0%)	78.4% (45.7%)	78.4% (82.9%)	81.1% (74.3%)	70.3% (74.3%)	86.5% (68.6%)	86.5% (77.1%)	51.4% (37.1%)	91.9% (45.7%)
(B)-(A) 11月から 2月の変化	2学年	+0.5%	+3.2%	+0.7%	+10.3%	+11.6%	+6.2%	+4.3%	+5.9%	+9.3%	+7.3%
	人文社会コース	-2.3%	+8.7%	+6.2%	-4.9%	+3.3%	-4.7%	+5.9%	+3.2%	+20.8%	+14.1%

- 参考文献で根拠の裏付けを行い、新たな仮説を検証できる「論理的思考力」を身に付けた。
- 人文社会コースの生徒は、6項目で80%以上の評価を得て、「プレゼンテーション力」を身に付けた。

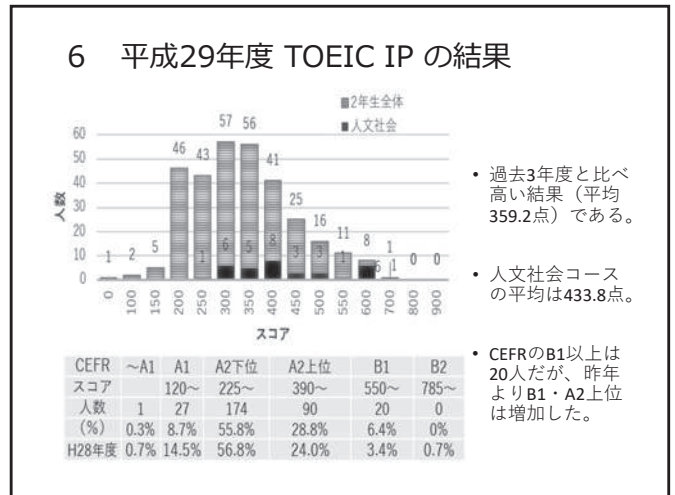
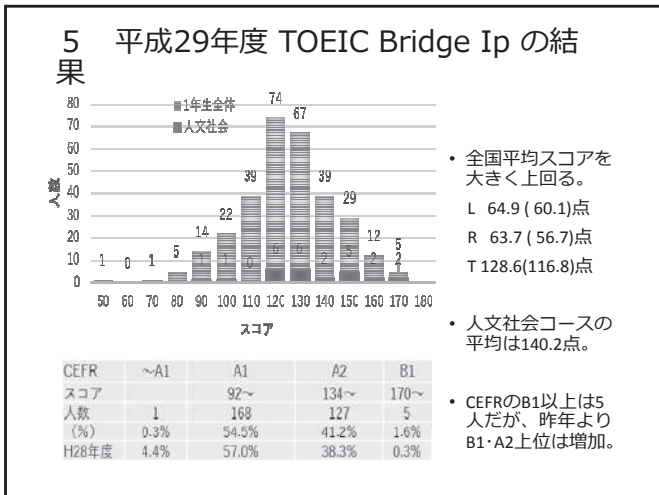
4 英語運用力の向上

「CEFRのB1～B2レベル(英検2級・TOEIC550点以上等)の資格取得生徒の割合」(生徒アンケートより)

年度	H26 (指定1年目)	H27 (指定2年目)	H28 (指定3年目)	H29 (指定4年目)
全体	18%	28%	36%	49%
人文社会コース	50%	49%	72%	71%
人文社会以外	14%	25%	25%	46%

生徒アンケート ※10月実施 ※2月実施 ※1月実施 ※2月実施

- S G H指定を受けて以降、全体が10%ずつ増加。
- 特にS G H対象クラスの人文社会コースは高い取得率を維持して、全体の取得率に波及している。



平成29年度「SGH課題研究」評価基準

段階	番号	項目	不十分な状態 (1)	やや不十分な状態 (2)	やや満足な状態 (3)	満足いく状態 (4)
課題設定	1	研究テーマ	グローバルな視野が不十分である。	グローバルな視野がやや不十分である。	グローバルな視野を意識している。	グローバルな視野を十分意識している。
	2	研究目的 (動機)	明確な課題意識が持っていない。	明確な課題意識をしっかりと持っている。	課題意識が明確で、独自の着眼点を持っている。	課題意識が明確で、独自の深い研究目的である。
	3	問い (論題) の 立て方	明確な問い (論題) が立てられていない。	明確な問い (論題) が立てられ、背景や理由が述べられている。	興味深く調べられる問い (論題) が立てられ、背景や理由が的確に述べられている。	興味深く調べられる問い (論題) が立てられ、背景や理由が将来的につながるものや社会の役に立つものである。
	4	仮説の設定	問いに対する仮説が立てられていない。	仮説はあるが問いに対応していない。	問いに対応した仮説が立てられている。	十分に考えられた仮説が立てられている。
論文作成	5	資料収集	インターネット資料のみを活用している。	論文・書籍を活用している。	複数の論文・書籍を活用している。	複数の参考文献のほか、アンケートやインタビュー等を加えている。
	6	論文の質 (論理展開)	論理的な展開ができていない。	論理的な展開にやや不十分さが残る。	概ね論理的な展開ができてい	極めて論理的な展開と文章構成ができてい
	7	論文の質 (社会貢献度)	研究の価値 (社会貢献度) が十分に見いだせない。	ある程度、研究の価値 (社会貢献度) を感じることができ	価値ある研究だと感じる。	自らの提案があり、極めて価値ある研究だと感じる。
プレゼンテーション	8	説明する力 (わかりやすさ)	理解しやすしい説明ではなかった。	あまり理解しやすしい説明ではなかった。	概ね理解しやすしい説明であった。	極めて理解しやすしい説明であった。
	9	説明する力 (話し方)	原稿を読み上げる程度である。	原稿を見ずに説明することができ	原稿を見ず、聴衆に語りかけるようにできる。	原稿を見ず、聴衆を巻き込むように語ることができる。
	10	技術 (スライドの効果)	文字の色や大きさに工夫がなく、図や表などを用いていない。	文字の色や大きさ、図や表などの工夫があるが、情報量が少ない。	複数の図や表などがバランスよく用いられ、情報量が適度である。	複数の図や表などがバランスよく効果的に用いられ、情報がわかりやすく精査されている。

平成26年度文部科学省指定
スーパーグローバルハイスクール
研究報告書 第4年次

平成30年3月30日発行

発行 徳島県立城東高等学校
所在地 〒770-0853
徳島県徳島市中徳島町1丁目5番地
印刷 徳島県教育印刷株式会社
